

初めはややしんみりしていた晩餐会も時の経過と共に次第に賑やかになり、あちこちで遠征の間にあった出来事が話題に上って、雰囲気は盛り上がってきた。参加した人たちは、話の各所に出てくる祐子の奇跡的な行いを聞いて、祐子を本当の救世主だと思い、畏敬の念を抱くようになった。そして、一方では誰にでも優しく、涙もろい、母の様な祐子に一層親しみを増していた。会食は9時頃まで続いた。晩餐会が終わると、祐子は康介と香川を見送ってから、スバハを寝かしつけて戻って来たアイリーンと一緒に、自分の事務所に入った。

「*****」(アイリーン、いろいろありがとう。あなたの連絡が適切だったので、本当に助かったわ。これからはコンゴのウグング・ボンリガンボさんや日本の内観賢さんと連携を密にして取り組まなくてはならないの。それにはあなたの力がなくてはならないわ。これからもよろしく頼むわね)

アイリーンは何度も礼を言われ、恐縮した。

「*****」(ママ、私の命はママにお預けしています。何でもご指示ください。精一杯やらせていただきます)

祐子は会釈を返した。ふと、物質転送機を見ると、装置の前にアイリーンの置いた木の台があり、その上に1通の手紙が載っていた。開封するとウグングからだった。

「*****」

(ママユウコ様

アキさんの話を伺い、とても悲しく思っております。アキさんのご冥福をお祈りしております。

我々は、我が国の大統領官邸内の詳細な見取り図を手に入れました。その図から建物内部の相対的な位置は把握しました。しかし、空間的な位置の特定ができずに困っています。塀の位置とその中にある官邸内の間取りは分かるのですが、周囲が強固な塀で覆われている上、警備が厳重で近付けないので、どうしても官邸の建物と塀の空間的な位置関係が掴めません。具体的に言うと、大統領の執務室の平面位置がプラスマイナス5メートルほどの誤差を持ってしか特定できないのです。衛星写真を

使ってもその程度の精度しか得られません。それがひとつの問題点です。それから、既に亡くなっている大統領の両親と、大統領が師として仰いでいた教授の情報や、大統領が自分の判断で処刑してきた部下や兵士についての情報もほぼ揃いました。しかし、それらの人たちに対して大統領がどれほど悔悟や畏怖の念を持っているのかは不明です。あとは衛星ラジオの入手と通信衛星のトランスポンダの確保、衛星送信局の設置とマイクロチップを埋め込んだ護符の準備です。小型爆弾の準備もほぼ整っています。そちらでの準備はその後どのように進んでいるのでしょうか？とりあえず大統領宛に手紙を送るための準備が整えば、段階的に計画に着手できるところまで来ています。ご連絡をお待ちしております。ウグング)

祐子はウグングの絶え間ない動きに驚嘆した。そして、自分がこれから取り組もうとしていたことに対して、フォローを受けてしまったことに、焦燥感さえ覚えた。祐子は直ぐに賢にテレパシーで話し掛けた。日本は真夜中で、賢が一番深い睡眠の中にあることは分かっていた。

「あなた、夜中にごめんなさい。私は今日の夕方キガリに戻りました。これからはこちらで活動をするつもりです。あなたから借りている物質転送機と、これから何台かお願いすることになるオーラ・ビジョン・システムを使って、いよいよアフリカ救済活動を開始します。あなたが、約束してくれた支援について、どう考えているのか教えていただきたいと思います。ひとつは50億円というとてつもなく大きな支援のこと。そしてお金だけでなく、新しく開発するEVL S Iチップ、それからアフリカにばらまく小型ラジオとそのラジオに電波を送る衛星放送局のこと、さらには静止衛星の契約と衛星通信用のトランスポンダの確保。こんな大変なことを、私もあなたの言葉に甘んじて、つい簡単にウグング・ボンリガンボ氏に約束してしまいましたが、これらのことは並大抵な努力では達成できないということが想像できます。私はこれからどう進めたら良いのか皆目見当が附かないのです。あなたと原さんのお知恵をお借りしなくてはなりません」

賢は祐子のテレパシーを睡眠中の意識で捉えた。

「祐子、おかえり。キガリに戻ってきてくれて、ホッとしている。いろいろ大変だったな。亜希子は今、霊界でご両親達と一緒に住んでいる。遺体はいつでも蘇生できるようにと考えて、細菌の侵入や外部からの悪い影響を受けないように、俺の部屋に無菌の特注棺を用意して、その中に安置してある。警察に感付かれたらまずいから、近いうちに棺の場所を家から別の場所に移そうと思っている。おれは、機会をみて、亜希子を必ず蘇生させるつもりだ。それから、君に頼まれたアフリカのふたりの女性のことは、君が一段落したら、おれがテレポーテーションして君の所に連れて来ることにしよう。君の心配しているアフリカ難民救済のことは、俺なりに進めている。50億円の拠出も取締役会に諮ってある。何とかなりそう。多分2年、4期ぐらいに渡る支出になるだろう。EVL S Iチップは原さんに頼んだ。彼は直ぐに部下に指示したとのことだ。多分1ヶ月もあればプロトタイプが完成するだろう。それからアフリカから戻って直ぐにウルトラ・スペース・ソニックという衛星通信ラジオの会社に話を持って行った。大歓迎されたよ。ゴーを掛けてもらえれば、1ヶ月で試作機の完成、2ヶ月で初ロットの納入を開始できると言っている。試作機は100台、初ロットは5000台、次ロットから一気に1万台のペースにできる。1台2000円弱になる見込みだ。型は複数台持つことになる。おまえの話を聞いて、仕様はこちらで勝手に決めさせてもらった。多言語への対応を鑑みてケースの表面から一切の文字を亡くすことにした。表示は全て機能イメージのアイコン表記にする。追跡されないように製造名盤も附けない。ケースの色は赤、黄、白の3色と伝えておいた。何処に落ちても目立つようにな。それからヘリコプターからの投下を考えて1台ずつ衝撃吸収用のプラスチック材で梱包する。ラジオの発送先は祐子から指定を受けた場所にする。それも、物質転送機での送付になるから、送り先の正確な位置情報が必要になるぞ。これで総額20億円だ。衛星通信局は意外に簡単にできそう。バックアップなしの簡易局の設置を請け負う会社がある。衛星通信開発工業株式会社という会社で、海外の実績も多い。衛星通信局とは謂っても簡単な送信設備を持つ簡易局なので、1局あたり3億円で請け負っても

らえる。6局造るとして18億円。その請負には、勿論設備機器一式、建設費用、運用指導、教育、初期メンテナンスの費用まで全て含まれている。日本からの輸出になる。衛星のトランスポンダはAFSATという南アフリカの会社と話をした。既に契約に調印する一歩手前まで行っている。衛星は6機を利用することになる。ラジオなので、トランスポンダの部分利用で毎月1200万円くらいの利用料で済みそうだ。3年間でおよそ4億円だ。そのほか、ラジオをばらまくヘリコプターのチャーター費用1回500万円として2年間で3億円。残り3億円を予備費にする。祐子がOKを出せば直ぐにゴーを掛ける。それから、OVS、つまりオーラ・ビジョン・システムは設置場所の詳細情報を送ってほしい。そちらの指示で、先ず位置情報端末を送り、位置確認してから、いつでもOVSを送りつける。これはなんとか衛星局と同じ6台でやりくりしてほしい。それから、MTSつまり物質転送機はフルマにだけ、あと2台送る。このMTSを他の場所に転送してはいけない。こちらは直ぐにでもゴーできるぞ。それから、こちらの諏訪プロジェクトだが、試行サイトの先行トライアルの準備が着々と進んでいる。アフリカに負けたくないよう、ピッチを上げるように指示している。俺も身体が動くようになってきたから、そろそろ会社に復帰しようと思っている。アフリカの推進で問題があれば、いつでも言ってくれ。俺はいつでも君の元にテレポーテーションするから。兎に角、おまえが元気で戻って来てくれて、俺は嬉しい」

祐子は驚いた。ウグングの動きが迅速だと思って驚いていたが、賢の行動も劣らず素早かった。自分だけがのろのろしているような気になってきた。

「あなた、ありがとう。こちらの明日、そちらの今日の夕方までにはゴーサインをさせて頂くわ。一番眠いときにごめんね。私はこれから休むわ。おやすみなさい」

胸の中に賢と亜希子の姿が浮かんできた。ふたりとも微笑んでいる。祐子はふたりに寄り添って、眠りに落ちた。

翌朝、祐子は起床すると先ず賢からの情報をウグングに伝えた。直ぐに

返信がきた。ウグングは非常に驚いていた。祐子から説明を受けた戦略が、僅か数日を経過した段階で既に具体的な形で動き始めていることに、驚きを通り越して、畏怖さえ覚えると言ってきた。ウグングは祐子の行った奇跡的な行いを見て、祐子への畏敬の念が湧いたことは確かだったが、戦略はあくまで戦略で、実行計画の立案から具体的な戦術に展開するまでには、様々な紆余曲折があるはずなので、これからは自分の方から積極的に働き掛けて、推進してゆかなくてはならないと考えていた。それが祐子の説明の通りに一気に展開してゆくことに、ママユウコという存在の途方もない底力を感じ、身震いするほどの緊張感を覚えた。ウグングからの全面的な肯定の返信を受けると、祐子は賢にテレパシーで話し掛け、全ての計画を賢の計画通りにスタートさせてほしいと告げた。祐子のゴーサインを受けて、賢はその日の午後ウルトラ・スペース・ソニック社と納期の取り決めや配送計画について協議し、発注を行った。衛星ラジオの製造は動き始めた。翌日は午前中、衛星通信開発工業株式会社との簡易放送局の設置計画の詰めを行った。基本的には相手の提案を受け入れた形になったので、全ての用件について大きな問題も無く合意に至った。具体的な設置場所については、後日賢が、祐子の指示に基づいて連絡することになった。翌日の午後はAFSAT社との協議だった。賢は南アフリカにテレポーテーションして、仕様の詰めを行った。AFSAT社はフランス系の会社で、賢から持ち込まれた話を非常に歓迎した。アフリカ上空にある既存の6機の静止衛星のトランスポンダにはいずれも、「ストリームによるラジオ放送を引き受ける程度なら十分な余裕がある」との説明を受けた。放送局や、設備についての納入提案を受けたが丁重に断り、トランスポンダの一部利用契約だけを行うことになった。賢は仮契約を済ますと、直ぐに日本に戻った。その一方で賢は「そろそろ諏訪のプロジェクトを加速させなくてはならない」という気持ちに駆られてきた。

ある日、賢は祐子のキガリでの活動が遠征前の軌道に戻ったのを確認してから、祐子の元にテレポーテーションし、それから直ぐに祐子連れてウグングの部屋に空間移動した。突然の祐子達の出現にウグングは狂

癡転倒するほど驚いた。ウグングの意識は暫くの間混乱していた。ウグングが落ち着くのを待って、祐子が此処にテレポーテーションした理由を説明してから今後の実行計画に附いて再確認を行った。ウグングは動き始めているプロジェクトに、意識で捕らえることのできないほどのダイナミズムを感じて身震いしていた。ふたりはウグングの部屋を出て、モンジャル老翁の部屋に向かった。モンジャルは理も否もなくプリミテとキルリエをキガリに連れて行くことに同意した。モンジャルの目に涙が浮かんでいた。モンジャルはふたりの女性を探しに沢に出掛けた。やがてプリミテとキルリエが息を切らせて部屋に駆け込んできた。

「****」(本当に来てくれたのね)

プリミテが弾む息を飲み込むようにして言った。キルリエは唇を噛み始めて大きく目を見開いている。

「****」(プリミテ、キルリエ、わたしと一緒に此処を出て行く覚悟はできているの？もう、戻って来られないかも知れないわよ)

ふたりの女性は祐子に命を預けると言った。祐子は賢に頼んで、この日はひとまずキガリに戻り、翌日ふたりを迎えに来ることにした。ふたりの女性は今すぐに附いて行きたいと言い張ったが、祐子は村のみんなにこれ迄のことを感謝して、一晩一緒に過ごすように告げた。祐子はモンジャル老翁に挨拶をすると賢に抱かれて直ぐにキガリに引き返した。

翌日の朝方、祐子は賢と共に再びモンジャルの部屋を訪れた。この日はウグングの姿は無かった。賢は先ず祐子をキガリのオフィスに戻し、続いてキルリエ、プリミテの順にキガリに移動させた。テレポーテーションで朦朧としているふたりの女性の意識が戻るのを待って、祐子はアイリーンを呼んだ。新たにできた妹と助手にスワヒリ語を教え、キガリでの生活に早く馴れるようにふたりの身の回りの面倒を見てほしいと頼んだ。アイリーンも興味津々な様子を隠すでもなく、可愛い仲間を満面の笑みで受け入れた。

祐子に対してゴーサインを出してから1週間後、ウグングは同志の一人が経営するキサングニのホテルに、コンゴ民主共和国内に分散している同志の代表100人を参集させた。ウグングの要請を受け、賢と祐子が

会議の中でOVSとMTSのデモを行うことになった。各地に散り、地下活動をしてきた同志達は疑念を抱かれないように様々な民族衣装やビジネスウエアなどでカモフラージュして集まって来た。

賢は祐子からの連絡を受け、日本時間の2時に位置情報端末を手にして一旦キガリの祐子の部屋にテレポーテーションし、祐子を伴って、そのままウグングの宿泊しているホテルの部屋にテレポーテーションを行った。意識がはっきりすると二人は直ぐにMTSとOVSを日本から搬送させた。会議はホテルの大会議室で催された。テーブルは2重の長方形に並べられていて、スクリーンをバックにした議長席にウグングが座り、その左側に祐子と賢、右側にキンサシャから来たサブリーダーのドベグ・ツダムバリとカナングから来た同じくサブリーダーのステファン・アマジボが坐った。コンゴの国を思う勇士達の集まった会議に出席して、賢と祐子は襟を糺した。初めにウグングが全員を前に、今回の作戦について詳細な説明を行った。既に電話やメールで概要を伝えられていたため、出席者達はウグングの詳細な説明を一言も聞き漏らすまいと意識を集中した。

「*****」(同志諸君、遠方からの出席、ご苦労様でした。今日集まってもらったのは、他でもありません。我々が長い間準備を重ねてきたことを実行に移す段階に至ったため、同志諸君の意志を一つにして、実行計画を確実なものにし、完全に成功に導くためです。そして、今回は諸君も既に聞き及んでいると思いますが、あのキガリにあるフルマから社長のママユウコとこの戦略に欠くことのできない最先端技術や資金面、作戦面で支援をしていただける日本の会社内観システムから社長の内観賢さんに出席していただきました。このお二人は、人類を新しい道に導いてくれる我々の同志です)

賢と祐子は立ち上がって頭を下げた。出席者全員が拍手をした。しかし、出席者達のこわばった顔には緩みが見えない。ウグングは続けた。

「*****」(我々は今日までの長い間、国民のことを考えない政府や役人達に苦しめられてきました。多くの愛おしい家族や友人、女性達、子供達、そして我々の仲間の命と希望が奪われてきました。こんな国を

改めようと、我々は一致団結して、現在の政府を打ち倒そうと準備を重ねてきました。しかし、武力を使って政権を打倒し、新政権を樹立しても、また次の専制君主を作る危険性があるのです。そこで、我々はここにいらっしゃるママユウコとMr. ウチミのお二人と協議を重ね、暴力を用いず、これらの政府や役人達の姿勢を改めてもらうという戦略を立てました。これまで我々を苦しめ、食べ物にしてきたヨーロッパ諸国、米国、ロシア、中国など、どの国も達成できていない、きわめて精巧な情報制御の方法と革命的技術を用いた戦略です。この戦略遂行の為には我々同志の中に一人の脱落者、裏切り者を出すことも許されません。だからと言って、同志の皆さんに苦痛を強いることなど微塵もありません。今日はこの戦略について詳しく説明します。疑問や意見があったら、説明終了後に討議し、全員一致した意志の元でこの戦略の実行に着手したいと思います。今日、ここで全員が合意に達したら、慎重の上にも慎重を重ねて、自分達の任務を遂行してほしいと思います。

それでは、これから戦略の遂行手順と同志の皆さんの役割について説明します。まず同志の皆さんの活動の形ですが、始動時は情報収集、伝達が主な任務になります。そして計画遂行時は情報のプロパガンダ（宣伝拡大）活動が中心になり、計画の定着時には国民を支援するための実践的行動が主体になります。およそ3年間でこの国、そして、アフリカ全土の変革を達成させようという、迅速かつ壮大な計画です)

ウグングは祐子と取り決めた戦略とその実行手順を詳細にわたって説明した。同志の中には様々な宗教に属している人たちが居る。ウグングは宗教的な背景を一切持たない戦略であることを強調した。詳細な説明を終えると、ウグングは説明内容についての質問を受けた。何人かの男が挙手した。ウグングは最も厳しい顔をした30歳前後のヌババニという男を指名した。サファリ・ウェアを着た、兵士のような印象を与える男だ。

「*****」(ウグング将軍、ご指名感謝します。俺はこれまで命を捨てても、今の政府を倒そうと決意していました。だから、先ほどの説明を聞いて、本当にそれで問題が解決するのか、どうしても納得いか

ないのです。国軍に守られた政府は、武力闘争を通してしか倒すことができないと確信しています。国軍をどのように押さえ込むのか、もう少し詳しく説明してください)

「****」(同志ヌババニ、これまでは君の言うとおりであった。この私もそう信じて生きてきた。しかし、よくよく考えてみると、専制政府を打倒した革命軍の政府も前の政府と同じ轍を踏む結果になるということを、我々は過去に何度も何度も目の当たりにしてきた。それは武力に対して武力で制圧することの危うさを物語っている。剛に対して剛で立ち向かえば、一つの剣が打ち砕かれても、次の剣が残る。次の剣が次の剛の象徴になる。それに対して、剛なる政府に柔なる戦略で望む、剛を抱き参らせること、剣を厚い真綿でくるんで、秘薬で溶かしてしまうこと、これこそが次に柔軟な政府を擁立する道だということが分かったのだ。そしてその戦術こそが、さっき説明したとおり、先ず大統領やその取り巻きの気持ちを変えることに全力を投入することだと判断した。さっきも言ったが、大統領の心が国民の方を向けば、国軍を指揮する方向が変わるはずだ)

ヌババニはまだ納得がいかないようだったが、ひとまず引き下がった。次にリビ・ドブロビンヌという50歳前後の穏やかな雰囲気の方が質問をした。

「****」(ウグング將軍、ご指名いただきありがとうございます。今までの話を窺って、3つの疑問を感じました。一つは大統領や高官達の元に、誰がどうやって封書や、時限爆弾付きの小包などを届けるのかということ、もう一つは、大統領の過去を暴いても、彼を逆上させるだけで、逆に我々の存在自体を危うくする結果を招かないかということ、3つめは、これまでも国連や赤十字が我が国に対して様々な支援をしてきていて、それでも窮状は一向に改善されなかったという事実があるのに、また国連に頼って大丈夫なのかという点です)

ウグングはリビの質問を受けて応えた。

「****」(同志ドブロビンヌ、君の言うとおりで。誰でもそう感じるだろう。それで今日は特別にママユウコとMr. ウチミにはるばる

ここまで来ていただいたのだ。これから、二人に君たちの疑問を払拭するデモンストレーションを見てもらう。それを見て、まだ疑問に感じているものがあつたら、再び質問を受けよう)

ウグングの合図で賢と祐子は立ち上がった。賢は会議室の角の空いたスペースに移動した。そこには既に物質転送機とOVSが設置されている。賢と祐子は初めに物質転送のデモを行い、続いてOVSのデモを行った。OVSのデモではリビ・ドプロビヌヌを呼んで亡き妻との会話にトライさせた。誰一人として、自分の観ているものが何なのかを理解できなかった。あまりに現実離れしていた。やるかたなく全員が納得した。誰一人として、物質転送機やOVSについて質問する者も無かった。まだ妻の姿が脳裏から消えないリビが言った。

「****」(俺たちは何と遅れた世界に生きていたのだろうか。この世にこんなマシンがあろうなどは夢にも思わなかった。この目でこの凄い力を持ったマシンを知った以上、我々はウグング將軍の戦略に全面的に従う以外に選択肢があろうはずも無い。なあ、同志諸君、そう思わないか?)

全員が頷いた。それからしばらくの間、ウグングを中心にして出席メンバーの地区を20に分け、その地区ごとの役割の割り当てが行われた。優に2000人はいるコンゴ国内の同志の役割については、地区ごとの代表がそれぞれの地域で任務を分担させることになった。各地域に戻ったもの達は、先ず情報の収集を図るようにウグングから指示を受けた。一つには現在の大統領と高官達の詳しい経歴を調べ上げること、その時に特に、該当する個人個人に特有な弱点が無いかどうかに注意を払い、それらを把握すること。そして、大統領や高官達が公務等で使う可能性のあるあらゆる施設の正確な見取り図と、その空間的な位置情報を手に入れることである。ここで一つの問題点は、彼らが必ずしもそのような情報入手の手法に長けている訳ではないということだった。特に施設の空間的な位置情報を把握できる者は殆どいない。討議の結果、コンゴ国内の20の地域に対し、賢が1ヶ月後に各地域に一台の割合で位置情報端末を貸し出すことになった。貸し出しとしたのは、コンゴの戦略が軌

道に乗った段階で、それを他国にも展開するため、その時コンゴ国内から回収した位置情報端末を流用しようと考えたためだった。20台という台数が少なすぎるとの意見もあったが、賢は「それ以上にすると、物質転送機の情報流出が起こる危険性があり、それはメンバーにとって非常に危険なことだからだ」と説明した。この戦略に関する情報の流出は絶対に防がなくてはならないことを強調した。出席者達の脳裏にはデモで見た物質転送機の鮮烈な印象もさることながら、OVSのデモで目の当たりにした、「死後も魂は生きている」という衝撃的映像の余韻が残っていて、これまでシャーマンによって漠然と伝えられてきた、とてつもなく恐ろしい世界を直接垣間見たという恐怖感に捕らわれていた。口数の少なくなったメンバーにウグングが激励の言葉を掛けて会議は終了した。会議室から全員が退室すると、賢は先ずOVSを、続いてMTSを由仁に戻した。賢と祐子はウグングに暇乞いをし、賢はそのまま祐子を抱いてキガリの祐子の部屋にテレポーテーションした。ウグングは目の前で消えた二人の残像をじっと佇んで見詰めていた。

賢と祐子はキガリの祐子の部屋に戻った。ふたりとも意識が部屋の空間に定着すると、部屋の隅にアイリーンが居ることに気付いた。アイリーンは壁を背にしてがたがたと身体を震わせている。スバハを落とすまいと必死に両腕をスバハに巻き付けている。スバハに母乳を与えている最中のようなのだ。アイリーンは顔面蒼白で震えながら膝を折り、しゃがみ込んだ。スバハはアイリーンの乳首を放し、彼女の顔を見詰めて泣き出しそうになっている。祐子がアイリーンに近付いた。

「*****」(驚かせてしまったようね。アイリーンごめんなさい。空中移動してキサングニまで行ってきたのよ。そこでウグング将軍に会ってきたわ)

祐子は意識的に空中移動という言葉を用いた。アイリーンは蒼白な顔を祐子に向けて、声を震わせながら言った。

「*****」(わ、わ、わたし・・・驚いて・・・乳が出なくなりましたみたいですよ)

スバハが大声で泣き出した。祐子はアイリーンの震える手からスバハを受け取ると、直ぐに自分の乳房を出し、スバハの口元に当てた。スバハは泣き止むと、祐子の乳首に貪りついた。賢は祐子とアイリーンの姿をじっと佇んで見詰めていた。アイリーンが床の上から1通の書簡を拾い上げた。スバハを渡すときに手から滑り落ちたものだ。やがてスバハは祐子の乳首を口に含んだまま寝入ってしまった。祐子はスバハをそっと離して、アイリーンに戻した。アイリーンは書簡を祐子に渡した。ヘデン事務総長からの書簡だった。

「*****」

(ユウコ・ツグンショウ様)

先日はゴーマにてお会いし、お話することができたことを大変うれしく思います。私は国連本部に戻ってから直ぐに、各国の代表を招集し、アフリカの検討グループメンバーを加えて臨時の委員会を開催致しました。勿論あなたの話された戦略には一切触れませんでした。あなたの提唱したアフリカ連合構想とトーテムの考え方について、委員会で各国代表に打診してみました。各国代表はそれぞれの国の利害を最優先に考えているので、アフリカ連合構想については速答できる国は無く、全員が持ち帰って検討すると応えていました。しかし、トーテムについては様々な意見が出ました。意見は大きく二つに分かれました。勿論その場で結論など出せるはずもなかったのですが、出席者の中のおよそ半数はトーテムに似た構想を持っていることが分かりました。あと半数は否定的でした。トーテムの構想に賛成の意志が窺えた国々は、自国の産物を保護する政策を考えているようでした。自国の得意とする産物、特に魚介類、畜産物、鉱物や貴金属、コーヒー、ココア、紅茶、マンゴーなどの果物、欄などの熱帯植物、ゴム、薬草などなど現在、国の経済を支えている産物について、自国がアフリカ全土のコントロール権を持って、その調整をするという考えに少なからぬ興味を覚えたようです。アフリカ連合構想の話をはじめにしておいたので、その影響もあってか、トーテムの考え方が各国の代表に比較的抵抗少なく受け入れられたようです。委員会の中で、トーテムについて様々な議論が行われました。国々の思惑が頭

れてはいましたが、それらの意見を要約すると大体以下の5点に絞られます。一つはトーテムのスケールの違いです。そのスケールによって国にもたらす利益が異なってくるからです。二つ目はトーテムを持ったときの権利と義務です。自国の背負ったトーテムに対してどのような業務を負うのか？またその権利の範囲はどの程度のものなのか。3番目はトーテムを担当しない国の対応で、他国のトーテムの産品を生産したいときなどにはどのような制限を受けるのか、また、その場合の収益はどのようになるのか？4番目は取引についてで、アフリカ域内とアフリカ以外の地域との取引はどのように行われるのか？5番目はトーテムの維持管理で、どのように保護され、それに違反した場合はどのような処置を受けるのか、また、密漁、密輸などに対してどのように対処するかという点です。議論は5時間に及び、各国の要望もあってトーテム専門の検討委員会を作ることが決まりました。各国が自国の産出している品目の情報を全て持ち寄り、それぞれの収益性や管理方法などの検討を行うことになりました。来週早々に第1回会合が開催される運びとなりました。Mrs. ツグンショウのご提案のすばらしさを改めて認識しています。検討はまだ始まったばかりですが、少なくとも参加国のおよそ半数に現状を改革しようとする姿勢が見えたことは、望外の喜びです。アフリカ支援体制についてはアフリカ救済同盟NGAFA（ンガファ）120カ国に対して追加支援の働き掛けをおこなっていますが、今のところ、やはり支援各国はあくまで自国の利益になる支援という前提を崩していません。リアル・アフリカ救済同盟ReNGAFA（レンガファ）の7カ国とは来週中に秘密裏の会合を持つ予定です。進展が見えたら、また連絡致します。Mrs. ツグンショウ、そちらも進展があったら現在の状況についてご連絡いただきたく思います。

エドワード・ヘデン)

祐子はアイリーンの肩を抱くようにして言った。

「*****」（アイリーン、ここに居るMr. ウチミは空中移動ができるのよ。私はこの人に掴まって移動したのよ。Mr. ウチミには以前会ったことがあるでしょう。この方と私は同じ目的を持って行動しているのよ。

アフリカを、そして世界中を真の平和にするために・・・・・・)

アイリーンの目に涙が流れた。アイリーンの意識が怖れから畏敬の念に変わっていったことが分かった。

諏訪中郷地区の試行は様々な障害を乗り越えて漸く始動した。末宮地区の先行テストの成功がプロジェクトを推進するメンバーの自信になっていた。調整事務所はその管轄地域を末宮地区から中郷町全体にまで拡張した。末宮で稼働していたPCでのシステムはカンデムのノードダウンコンピュータに切り替えられ、本格的なコンピュータ・システムが稼働し始めた。住民全員に氏名を表記したidトークンが渡され、住民が買い物などでidトークンを提示すると、idトークンとブルーツスを用いたコンピュータ端末間で通信が行われ、その情報は中央のコンピュータに送られてリアルタイムで処理された。idトークンは住民を固有ナンバーで管理するデータベースの情報入力装置のキーとしての役割を担った。それぞれのidトークンに付けられたidナンバーがシステムのキーコードになっていて、住民の行動は店舗や施設などの対面ポイントで管理された。しかし、住民からは直接idナンバーが分からないようになっていて、人のidナンバーを調べたり、口外したりすることは禁じられた。調整事務所の窓口担当でさえ住民のidナンバーを口にするには許されなかった。当初、このコンピュータで管理されたidトークン方式に対しては大抵の住民が反対だった。プライバシーの侵害になるというのがその主な理由だった。住民達の間には

「個人情報がかつちやう、恋人と会うことだってできやしないじゃない」

「誰にも知られないように、旅行することもできなくなる。秘密は一切なしだとも言うのか？誕生日のサプライズだって、事前に分かってしまうから、インパクトが無くなって、つまらない」

「人に知られたくないようなもの、女性にはそういうものが沢山あるのよ。これじゃ、何をどれくらい買ったかだって直ぐに知れちゃうわ」などと非難や苦情が雨嵐のごとく寄せられた。しかし、プロジェクトの

メンバーの説得で大抵の者達は納得した。それは、i dナンバーの元に管理され、個人の情報として直接参照されるのは、原則として購買商品等の品目と購入総額、それと総労働時間だけだと分かり、それ以外のあらゆるデータは統計データとして管理・利用されるだけで、その内容までは詮索されないということが、はっきり理解されたからだった。末宮のテスト試行時にはi dトークンには住民番号だけが記録されていて、その認識の為にだけしか使われなかったが、中郷町全域まで広げた試行からは個人それぞれのDNAの情報がコピーされて記憶されることになった。そのため、調整事務所は全ての住民に髪の毛や爪など個人のDNAを調べることのできるものを拠出してもらうことになった。また、20才以上の中郷町の住民全員について、自己意志の宣言をしてもらうことになり、10項目の個人の意志がi dトークンの住民番号に付随する個人属性情報として記録されることになった。住民にはDNAの資料提供を受けるとき簡単な選択式の質問用紙が渡された。質問用紙には次のように書かれていた。

「以下の10の質問に回答ください。右側の2つの回答のうち自分に合っていると思う方を○で囲ってください。

- | | | | |
|----|----------------------|----|-----|
| 1 | あなたは人間の生命は永遠だと思いますか？ | はい | いいえ |
| 2 | あなたは肉体の他に魂があると思いますか？ | はい | いいえ |
| 3 | あなたは昼と夜どちらが好きですか？ | 昼 | 夜 |
| 4 | あなたは自分のことが好きですか？ | はい | いいえ |
| 5 | あなたは自然と科学どちらが好きですか？ | 自然 | 科学 |
| 6 | あなたは100才以上生きたいですか？ | はい | いいえ |
| 7 | あなたは脳死になったら臓器提供しますか？ | はい | いいえ |
| 8 | あなたはこの人生が気に入っていますか？ | はい | いいえ |
| 9 | あなたは現在の生活に満足していますか？ | はい | いいえ |
| 10 | あなたは夏と冬どちらが好きですか？ | 夏 | 冬 |

これらの質問は、個人の尊厳を維持するために、必要になった時点で参照するための質問だった。例えば脳死状態になった者がいた場合、その

個人の意志に従って、国の法律への対応が行われることになった。試行が開始されるまでに住民17,583人全員のDNA情報の読み取りと10の質問の回答、性別、年齢、職業、経歴などの個人属性情報が収集され、コンピュータ・システムおよびi dトークンへの登録が完了していた。試行システムの謳い文句の一つに、「瞬時に統計的な分析ができるシステム」というのがあって、様々な統計データを、相関分析を用い、DNAの部分配列の同じ人たちと異なった人たちの間の相違として識別することができた。一つの例として、試行が開始されて直ぐの頃、調整事務所に様々な意見が寄せられたが、批判的な意見を言ってきた人たちのDNAには配列上に一つの傾向性があることが判明し、それが全般的な傾向ではないと判明したときは、それらの意見は改善対象として直ぐに取り入れるようなことはせず、暫く様子を見ろという処置が行われたりした。もう一つのデータの使い方として、住民の動向の予測があった。住民の行動パターンの傾向性を調べ、そこから将来住民が行うだろうと思われる行動を予測した。調整事務所は域内の住民が旅行を希望したときが、一番緊張した。事前にコーポレートカードを用意し、各種保険の準備、住民が予約した宿との交渉などを出発までに済ませなくてはならなかった。旅行までに全ての準備が整わないケースもあった。それに役立ったのがi dトークンの利用データであった。旅行希望者が調整事務所に旅行の申請をする1週間前にはその地域住民の購買商品に単調さの傾向が顕れてきていて、その単調さが1週間以上続いた後、地方の特産品を購入する傾向が顕れた。コンピュータがそれを検知して重回帰分析を用いて予測を行い、操作画面にハイライト表示すると、その数日後、決まって特異な傾向性を示していた地域から旅行の希望者が現れ、調整事務所に申請してきた。その傾向性は一様のもではなかったが、一定の傾向性の変化に基づいて、分析結果は自動的に更新された。コンピュータデータは様々な形で活用されはじめた。

ある日、由仁の家に40歳ほどの背広に黒いコートを羽織った一人の男性が尋ねて来た。家にはお腹が目立つようになった梓が定期検診を受け

るために会社を休み、一人で留守番をしていた。男性はアガタという名前前で、原智明研究会の正会員だと名乗った。

「私はある方の依頼を受けて来ました。その方はDNAについて非常に重要なことを内観さんと相談したいと言っているのですが、どうしてもこの家に来ることができない事情があると言っていて、私に代理でこちらに出向いてほしいと頼んできたのです。私はそんなことは自分でやってほしいと、一旦は断ったのですが、その方の話しを聞いて、その重大さに驚き、できるだけ早くこのことを内観さんに伝えた方が良く考えました。会社の方に伺うことも考えましたが、内容が内容ですので内々に伝えるべきと判断して、思い切ってお宅に伺うことにしました」

梓はその男性に全く会ったこともなく、賢や原がその男性のことを知っているか否かも分からなかったので、とりあえず外で待ってもらい、まず携帯で賢に連絡を取った。このときはそうするのが一番良いと感じていた。賢は会社の販売報告会議に出席していた。仕事の最中に梓が電話をかけてくることはほとんどないので、きっと緊急のことだろうと思った。

「梓、どうしたんだ。何かあったのか？」

梓は、アガタという男について賢に説明した。賢は家の玄関の外を透視した。見知らぬ男だ。その男の意識を見詰めた。悪意も作弄的な意図も見えない。しかし、梓には「見覚えの無い男性だ」と伝えた。そして原と相談してみて、もし原も見知らぬ男なら、用件だけ聞いて、会社の方に来させるようにしてくれと言った。梓は直ぐに原にも連絡を取った。原は言った。

「アガタさんですか？鹿兒島に居た頃の知人にアガタという人が居ます。だけど、どうして僕がここに居ることが分かったのだろうか？梓さん、少なくとも僕の知っているアガタさんは水族館の飼育係をしていた人なんですけどね。DNAですか？何を伝えに来たのかな？もし、賢さんが大丈夫と言うようなら、用件を聞いてもらえませんか？」

原の話聞いて梓は安心した。外は雪が降りしきっていて、吹雪く雪が家の中にまで舞い込んでくる。身震いするほど寒い。こんな厳しい冬の

日にはるばる由仁まで来てくれたことを、梓は済まないと思った。梓はアガタと名乗る男をリビングルームに通した。アガタがコートを脱いで手にし、梓に促されるままにソファーに腰掛けると、梓はコーヒーを入りにキッチンに向かい、キッチンから声を掛けた。

「アガタさん、原さんとは懇意になさっていらしたのですか？」

「いいえ、私は原さんにはお目に掛かったこともありません。今どちらにいらっしゃるのかご存じですか？」

梓の背筋に冷たいものが走った。梓はインスタントコーヒーを用意して、2つ用意したコーヒーカップの一つだけに手早く熱湯を注ぎ、それを手にして、平静を装ってソファーのところに行くと、男の前にコーヒーを出して、質問には応えずに言った。

「寒いですから、コーヒーをどうぞ。原友昭研究会の正会員さんなんですか？ どんなご用件かご説明いただけますか？」

「ありがとうございます。実は、私に依頼した方の話は大体こういうことなんです。その方は以前からずっとDNAの構造とRNAの働き方、それと存在物の生命との関係について研究を続けてこられた方なんです。ここ1、2年インドに渡り、最新の遺伝子科学を研究すると共に古代のインド哲学を学び、生命についての確信を持ったとのことなのです。研究を続けている間に彼は自分の探求しているテーマがこちらの会社内観システムズに販売されているオーラ・ビジョン・システムと物質転送機の技術に関連がありそうだとすることに気が付いたと言っています。そして、それだけでしたら、ただ、「そうなのか」と感心しただけで終わったと思うのですが、その関連する部分というのが、DNAの能動配列に相当する部分だったので、更に追求したと言っています。彼は物質転送機の時空制御によって、DNAはその情報構成に変化を受けるはずだということです。つまり、簡単に言うと、物質転送機に掛けられた生物はDNAに影響を受け、酷い場合は原因不明の発病をしたり、発狂したり、あるいは肉体組織の細胞が全く違った生物の細胞に変化してしまう危険性があるということなのです。普通の生体ではDNAが損傷を受けるとその自己修復作用が働いて、直ぐに正常な状態に戻るのだけ

れど、物質転送機に掛けられると、時空間が変化するので、DNAの占める空間もその影響を受け、場合によっては、連鎖の切断や欠落、交錯が生じ、それは修復可能な範囲を超える危険性があると彼は言っています」

梓は慎重に話を聞き、それに対して何ら判断を下さずに言った。

「そうですか。分かりました。内観にそれを伝えれば良いのですね」

「それから、もう一点あります。それはオーラ・ビジョン・システムに関することです。彼は遺伝子の研究をしていてオーラ・ビジョン・システムの持っている重大な問題点に気付いたと言っています。それはオーラ・ビジョン・システムが人間の脳波を捉え、その脳波から得られる潜在記憶を引き出して、それに基づいて虚次元の意識の波動に同調する波動を発生させ、その波動に同調した虚次元の存在の意識を呼び出すという技術を用いているはずだが、その同調するための波動が虚次元だけでなく、実次元にも影響を与えるというのです。その結果、元の脳波を発生させている生命体、すなわち死んだ人を呼び出している人の身体を構成しているDNAに影響を与え、その人の個性とは異なった、死んだ人に特有な個性を決定するDNA配列と同じように、実次元の人の遺伝子情報がONされる危険性があるというのです。彼は実際、御社の製造したオーラ・ビジョン・システムを使って、躁鬱的な傾向のある人に、その人が最も恨んでいた、既に亡くなっている人の意識を呼び出させて、話しをさせるという実験をしました。その結果、その躁鬱的な傾向のある人には、その人の最も嫌う、その故人の性格が顕れてきて、その人は発狂しそうになったとのことなのです。オーラ・ビジョン・システムにはそのような危険な要素があるので、その点を修正した方がよいのではないかと言っていました」

「お話は分かりました。それではその旨も内観に伝えておきます。外は雪ですから、タクシーをお呼び致しましょうか？」

「私は、あの方からのご伝言をお伝えしただけですから、詳しいことは存じ上げませんが、内観さんは現在どちらにいらっしゃるのですか？」

「多分、会社だと思います」

「何時頃お戻りになるのでしょうか？」

「さあ、はっきりとは分かりませんが……」

赤ん坊が梓のお腹の中で、盛んに動いている。予約時間にまだ2時間あるが、梓は早めに病院に行こうと思った。

「待たせていただくわけには……」

「申し訳ありません。私はこれから札幌の病院に行かなくてはならないので、ちょっと、こちらでお待ちいただくわけには……」

「そうですか。でも、丁度よかった。私もこれから札幌に行く用事があります。大変申し訳ありませんが、タクシーで一緒させていただく訳にはいきませんか……あなたがお出掛けになるまで、もう少し詳しくお話をさせていただけたらと思ひまして……」

梓は男の丁寧な言葉遣いに、先ほど抱いた警戒感が薄れていた。

「分かりました。それじゃ、一緒しましょう。技術的なこと以外のお話でしたら、タクシーの中ででもできるでしょう。私は札幌中央駅の近くの病院に参ります。これから出掛けます。直ぐにタクシーを呼びますから、一緒に参りましょう」

男は微笑みながら頷いた。工場の前に常時4、5台が常駐していたので、梓が電話で頼むと、5分ほどでタクシーはやって来た。梓は外出の用意をし、男が家を出るとその後から外に出て玄関のドアに鍵をかけた。タクシーはアプローチの前に停車していた。男が梓の脇に来て微笑みを浮かべながら、囁くように言った。

「私の言うことを聞いてください。さもないとこの錐があなたと、赤ちゃんに同時に突き刺さりますよ」

梓は耳を疑った。腹部に固い、尖った物が突きつけられているのが分かる。梓は戦慄を覚えた。

「お腹の赤ちゃんを助けたかったら、何も話さないで言うとおりにしてください」

梓が先に乗り、その後から男が梓の横に乗った。タクシーの運転手が後ろを振り返って言った。

「奥様いつもご利用戴き、ありがとうございます。どちらまでいらっし

やいますか？」

梓は黙っていた。アガタが言った。

「千歳空港までお願いします」

「はい分かりました」

タクシーの運転手は了解の返事はしたが、明らかに何かおかしいと感じた。しかし、男の指示に従ってハンドルを切った。

タクシーが走り始めると、梓は賢に向けて強く意念を發した。

「あなた、助けてください。先ほどの男に拉致されます」

梓は何度も何度も賢に向けて意念を送った。

賢は梓の想念を受け取った。話し掛けてくる言葉は解釈できなかったが、梓が危険な状態にある事は分かった。賢は直ぐに梓の意識の出ている周辺を透視した。梓は速いスピードで移動しているようだ。それが車の中だということが直ぐに判断できた。賢は直ぐに会議を中座して会議室から出るとタクシー会社に連絡を入れた。案の定、1台のタクシーが由仁の家に寄り、それから空港に向かったということが分かった。賢は梓の身体を透視した。梓の戦慄と恐怖に押しつぶされそうな意識と、赤ん坊の乱れた状態にある意識が感じられる。梓の感覚から腹部に固い金属製の物が突きつけられているのを感じた。賢は何かを手にすることが頭をよぎったので、社長室のデスクサイドにあるアタッシュケースを掴んで部屋を飛び出し、会社の外に出た。外は吹雪いている。賢はいきなり空中浮揚して、一気に梓の意識の出ている方向めがけて滑空した。雪が顔に強く当たってくるようだが、身体には風の圧力も、雪に打たれる痛ささえも感じなかった。少し飛行すると直ぐにタクシーを捕らえることができた。賢はタクシーと同じスピードで滑空し、静かにルーフの上に降りた。運転手が車の重心の変化に気付いて、スピードを落とした。賢は意念を集中して車中を透視した。梓は硬直したように身動き一つしていない。男が何か話しているのが分かる。賢は天耳を開いた。

「奥さん、ご主人はいつも何時頃、お帰りになるんですか？」

「さ、さあ、その日によって違いますから・・・き、決まっていませんけど」

賢は梓に向けて語りかけた。

「梓、俺は今、この車の上に居る。すぐに助けに入るから、冷静にしている」

梓は賢の声を捉えた。梓の天耳の機能がONした。

「先ほどのDNAの話、分かりましたか？そのまま続けると、問題が生じることは理解して戴けるでしょう？」

梓は白を切っている。

「わ、私には、そういう難しいお話は分かりません」

「そんなことはないでしょう。あなたは、以前は研究所のエリート課長だったんですから」

賢は車内を完全にイメージで捉えた。男は話しながら、時々刃物を持った手を、膝の上に戻して休める動作をすることが分かった。賢はそのタイミングでテレポーターションするタイミングを探った。梓に向かって声に出しながら同時にテレパシーで語りかけた。

「梓、これから、君の前に追い被さるようにテレポーターションする。冷静にしているよ。俺が敵に対して発する気を受け取るな」

梓には、賢の言葉がはっきり聞こえた。男も何かを感じたのか、深呼吸をして窓の外に意識を向けた。その瞬間、賢は正確に梓と男の間の空間に右手に持ったアタッシュケースを差し込み、自分の身体は梓を保護する為に覆い被さるように、梓の前の空間に向けてテレポーターションした。分かっているにもかかわらず梓の心臓は激しく脈打った。赤ん坊の動きは完全に止まった。梓は次第に身体が押されるような感覚を覚えてきた。賢の姿が目前に覆い被さるように現れると、梓は恐怖感が消えてゆくのを感じた。やがて賢の姿がはっきりとしてきた。梓は賢の背中にそっと両手を廻した。男は突然現れた賢に気付き、驚愕して叫んだ。

「うわー、ん、な、な、な、・・・・な・・・・」

男は驚きのあまり、手にしている刃物のことも忘れて車のドアを開けようと必死にもがいた。漸く賢の意識が車の中に定着したとき、男は自分が刃物を持っていることを思い出したかのように、賢にめがけて突き刺すような動作を取ろうとした。賢は一瞬、プラナを吸い込み、男に向け

て放った。

「動くな、えいっ！」

その声と同時にタクシーの運転手が急ブレーキを掛けた。車が路上を滑った。一瞬男の動きが止まった。男はそのまま硬直状態になった。車はスリップしながら4回転して止まった。

「やあっ！」

男の身体がドアに叩きつけられた。男は持っていた刃物を手から落とし、賢は直ぐにそれを拾い上げた。男の顔は仁王のように引きつって、大きく目を開けたままだ。身体は動かない。賢は梓の身体から身を浮かせるようにして男と梓の間に割り込むように坐った。

「あなた、来てくださったのですね」

「君の念を受け取ったから、すぐに来た。怪我は無いか？喝は大丈夫だったか？」

「はい、あなたが教えてくれましたので、避（よ）けることができました」

賢は梓の手を握り締めた。梓の目から涙がこぼれ落ちた。

タクシーの運転手が意識を取り戻すまでに5分ほどかかった。男はまだ動かない。男の両手は賢の腰ベルトで硬く縛り上げられた。

「シャ、社長さん、一体どうなったんですか？」

「この男は、妻を拉致しようとしたんです」

「やはりそうでしたか……私もどうしようかと……でも、どうやって、車の中に入ったのですか？」

「空間移動ですよ。そのうちに分かります」

「は、はい……」

「運転手さん、このまま札幌警察署に向かってください」

「はい」

警察の事情聴取を済ませると、ふたりはそのまま札幌・レディース・クリニックに向かった。タクシーの中で賢は梓の腹部に手を当て、赤ん坊の状態を透視した。赤ん坊は硬直したように全く動かない。賢は赤ん坊

に向かって語りかけた。

「もう怖くないよ、邪気を抜くからね。大丈夫だよ、イチ、ニ、サン、はい！もう大丈夫だ」

「あなた、赤ちゃんが動いたわ」

「うん、さっきの気合い、赤ちゃんには強すぎたみたいだね」

賢も検診に立ち会った。検診を終えると、医師は言った。

「特に問題はありません。順調に成長していますよ」

梓が賢の顔を見た。梓の顔は綻んで、先ほどまでの緊張の陰はなくなっていた。ふたりはそのまま待たせておいたタクシーで由仁に向かった。途中、梓はアガタから言われた、MTSとOVSの問題点を逐一賢に説明した。

「大丈夫だと思うが、後で原さんに確認しよう」

外は次第に暗くなり、雪がヘッドライトの光を受けて輝いている。道路の一部が白く浮き上がって見えた。

「あなた、夜の雪道は不気味な感じがするわね」

道路の両脇には所々に、先端に反射板を取り付けた雪の深さを表すポールが立っているが、どのポールも雪を被って、その役割を果たしていない。タクシーが由仁に着いたのは6時過ぎだった。賢は会社の前で降りた。総務部長が心配して賢の帰りを待っていた。

「社長、お待ちしていました」

「何かあったんですか？」

「はい、社長が出て行かれてから少しして、札幌地方検察庁の検察官が来ました。うちの製品に、人体に悪影響を及ぼす危険性があるのではないかという嫌疑が掛かっていると言いました。私もあり得ないことだと言って弁駁しましたが、検察官もまだ確たる証拠を掴んではいないので、状況把握に来ただけの様です。社長、今後どのように対処したらよろしいでしょうか？」

「君もうちの製品について技術的な内容を把握しておきなさい。もし製品が人体や生物に対して悪影響を与えるというよう欠陥が見つかったら、すぐに製造を中止して、製品の回収をする。だが、そんなことは絶

対にない。君も知っての通り、両製品とも初ロット製造まで、ずっとテストを行ってきたし、現在も様々なテストを継続して行っているが、異常は一件も発生していない。多分、妨害組織が仕組んだことだろう。まあ、毅然とした態度で臨むことだ。だが、これからもより厳しい条件で様々なテストを行うように品質管理部長に伝えておく」

「はい、わたくしも肝に銘じておきます」

賢は総務部長から、中座した午前中の会議について説明を受けてから帰宅した。

家には梓が夕食の支度を済ませ、首を長くして賢の帰りを待っていた。賢が玄関のドアを開けると梓が駆け寄って来た。賢は梓を胸に抱きしめた。梓は賢から離れようとしなかった。

「梓、今日は大変だったね。どんなことがあっても、直ぐに俺を呼ぶんだぞ」

梓は黙って頷いた。

「赤ちゃんが順調で安心したわ。怖い思いをしたから、悪い影響がなければいいんだけど」

「潜在意識の中には刻み込まれたかも知れないな。梓、時間のあるときはモーツァルトでも聞いて胎教を整えた方がいい」

「ええ、そうするわ」

賢は自分から離れない梓の頬を両手で挟むようにして額に軽く口づけした。賢は梓の肩を抱くようにしながらソファーに向かい、ふたり一緒に腰掛けた。

「あなた、今日はずっと近くにいてね。今夜はずっと」

「うん、分かった」

原が帰宅すると賢は原に梓から聞いたMTSとOVSの人体への影響について相談した。梓は賢に身体を着けるように隣に座って話に加わった。

「DNAへの影響ですが、既に考えられる影響については全部検証済みです。何ら問題はありませぬ。それよりアガタという名前の男の存在が

気に掛かります。それとその男が言っていたDNAの研究をしている人というのがどうも引っ掛かるんです」

賢は2度頷いて言った。

「僕もそうなんです。梓からその話を聞いたとき、僕の頭には橘さんのことが思い浮かびました。我々のことを知っている人で遺伝子の研究をしている人ということになると、限定されますからね。橘さん以外には勾島教授くらいかな？」

「まあ、その事は暫く意識から外して置いた方がいいかもしれませんね。いずれ、次のアプローチがあると思います。ただ、梓さんを脅して拉致しようとしたことは許せません。別の意図を感じます。裏に何か組織の存在があると思いませんか？」

「ええ、私もそう思うわ。あなた、気を付けてね。この間の事故といい、私たちへの攻撃の意図があるのは明白です」

「確かにそうだな。しかし、悪い結果を想定することは止そう」
その晩は愛子の帰りが遅かった。賢は愛子を透視してみた。愛子は電車の中に居た。愛子の周辺に乱れた意識の投影は感じられなかった。電車は由仁駅に着くところだった。

「愛子の帰りが遅いな」

賢は朝、愛子に会っていない。早朝会議のため早めに家を出ていた。梓が言った。

「愛子さん、今日は誰かに会うから遅くなるって言っていたわ。最終電車に乗っているのなら安心ですね。もうじき駅に着く頃だわね。あなた、迎えに行っておいた方がよいのではないかしら」

「今日は君が危険な目に遭ったばかりだから、愛子も保護した方がいいな。これから駅までテレポーテーションするよ」

「はい、それがいいと思います。ずいぶん遅くなってしまったから・・・」

「電車は丁度今、由仁駅に入るところだ。じゃ行って来るから」

梓は急に不安になった。賢は原に、暫くの間梓と話しているように頼んでから、一気に由仁駅に向けてテレポーテーションした。家は由仁駅より次の古山駅の方が近い。しかし、古山駅周辺は人通りも無く、夜道は

特に不安を覚えるので、由仁駅を使っていると愛子は言っていた。きっと由仁駅で降りるはずだ。

「あなた、気を付けてね」

意識の中に梓の声が響いてきた。

賢は由仁駅の外れの、人影の無い場所に顕現した。鉄道を横切る改札陸橋の階段の裏手だった。その場所は時々テレポーションして着地する場所で、駅の東側にある由仁文化交流館でイベントでもない限り、普段は人通りがほとんどない。賢は顕現すると、空気の冷たさに身震いを感じ、意識がはっきりすると直ぐに陸橋を登って改札口に向かった。プラットフォームを透視してみた。丁度駅に電車が入って来たところだった。この時間になるとさすがに電車から降りて来る人影もまばらだ。透視で愛子の姿を捉えたその時、一組の男女が改札口を通り抜け、プラットフォームに向かって降りてゆく姿が賢の目に留まった。他には誰も改札口を通る者は居ない。男はネクタイを締め、黒っぽいトレンチコートに身を包んでいて、女性はベージュのコートを着、白っぽいマフラーを首に巻き付けている。賢は改札口の前で一瞬立ち止まり、意識を集中して愛子を透視した。愛子はプラットフォームに降りて来たふたりに挟まれるようにして、再び電車の中に戻ってしまった。

「まずい拉致される」

賢はそう思うと壁際が目立たないところに行って即座に駅のプラットフォームにテレポーションした。電車はまだ動き出しておらず、ドアも開いている。愛子の乗った車両がどれかはっきりしないが、賢は目の前の車両に飛び乗った。先頭車両だ。電車はがら空きだった。しかし、その車両について今し方乗り込んだはずの愛子の姿は無かった。ドアが閉まり、電車が動き始めた。一組の男女がその車両の中央付近の席に寒そうに身体を丸くして並んで座っている。賢は「おかしい」と思った。先ほどの透視で、愛子は確かに目の前の男女に挟まれるようにしてこの車両に戻ったはずだ。賢は意識を研ぎ澄まして、男女の意識を伺った。ふたりは穏やかなグリーンオーラで包まれていて、荒んだ感情は感じられない。ふたりの意識の想念は内側に向いているようだった。ふたりか

ら発せられている「寒い」という感覚が伝わってきた。賢にはこのふたりが愛子を拉致しようとしたようには思えなかった。賢はふたりに近付いて男の隣に腰掛けた。

「あの、今、小柄な高校生の女の子を見かけませんでしたか？」
男性は少し怪訝な顔をした。

「えっ？」

「僕の娘なんです。確か、この電車に乗ったと思ったのですが？」

「いいえ、知りませんが……なあ、おまえ見たか？」

男は女性に確認した。

「いいえ、そんな高校生、見ませんでしたよ。この電車に乗ったのは私たちふたりきりでしたから。なんかの間違いじゃないですか？」

賢はふたりに礼を言うと、順次後部の車両に移ってみた。しかし、どの車両にも愛子の姿は無かった。賢は車両の連結部分に出て、そこからテレポーテーションで一気に由仁駅の改札口に戻った。もう誰も居ない。賢は陸橋を降りて、そこから空中浮揚した。辺りは街の灯りの残っているところを除いて漆黒の暗闇だ。賢は愛子の姿を探した。由仁駅から家までの5キロほどの道の上空を雪に打たれながらゆっくり滑空して、家の前まで来てみたが、愛子の姿は無かった。賢は家の中に入った。梓と原が心配そうに待っていた。

「お帰りなさい」

「お帰りなさい」

「梓、愛子は戻ってないよな。愛子が消えてしまった」

「えっ！消えてしまった？愛子さんには会うことができたのですか？」

梓が驚いて言った。原も驚きを隠せない。

「愛子さんが失踪する可能性は無いと思いますが……」

「いや、透視で確認した限りでは、愛子は一旦電車から降りて、再び電車に戻ったんだ。で、俺も同じ車両に乗り込んで確認したんだが、愛子の姿は無かった。どの車両にも居なかった。まさか、失踪したなんてことは……」

賢はもう一度由仁駅までの道の上空を滑空してみることにした。由仁駅

まで往復したが、やはり愛子の姿は見つけることができなかった。3人はどうしたらよいか考え込んでしまった。もう11時を回っている。その時玄関のドアが開いて、愛子が入って来た。

「ただいま！ああ、寒かった」

「愛子、おかえり、ずいぶん心配したよ」

「遅くなってごめんなさい。降りたとき電車の中にシューズ鞆を忘れてしまったのを思い出して、取りに戻ったのよ。だけど、すぐに電車が出てしまったから、古山まで行って、歩いてきたんだ。古山から来るのは大変。人が通らないでしょう。真っ暗だし、雪が積もっていて、歩きにくいと思ったらありゃしない」

「・・・・・・・・」

3人は一瞬言葉を失った。

「愛子、由仁で降りたとき、男の人と女の人が電車に乗らなかったか？」
愛子は暖炉の近くに来て手を翳しながら言った。

「ああ、そうそう、あの人達の間を分け入るように飛び乗ったのよ。だけど、気が付いたらあの人達居なくなってた。後ろの車両に移ったみたい」

「俺はね、愛子を迎えに駅までテレポーテーションして、愛子の乗った電車の車両に飛び乗ったんだ。すぐに電車が出たけど、車両の中におまえの姿はなくて、乗客は男の人ひとりと女の人ひとり、ふたりだけしか居なかったんだ」

「それは変だよ。電車最終だから、乗客、結構いたよ。由仁でもかなり降りたし、私は車両に戻るのに必死だった。だって停車時間が短いから。だから、小父さんたちの間に割り込むようにして、電車に駆け込んだのよ」

同じ時間、同じ空間で、異なったことが起きる。あり得るだろうか？賢はこの現象を理解できなかった。パラレル・ワールドなのだろうか？自己の核から、同じ空間に対して、2つのあるいは複数の写像が投影されることがあるということなのか？賢は原の方を見た。原も賢の方をじっと見ている。

「賢さん、一つの空間にいくつかの世界が同時に重なって存在するパラレル・ワールドの具体的な検証ができますね。僕はパラレル・ワールドを現実の物として見るのは初めてです。意念のコンセントレーション（集中）があまりにも強烈なので、賢さんの意識が現在頭れている世界に合致しない状況で、新しい世界が作られたのだと思います」

梓が不思議そうな表情をして原を見た。

「原さん、この空間が何重にも重なって存在するということですか？ 現実には私は、この空間しか認識できませんが……」

「賢さんも、僕も、意識によって世界が変わることは確かめました。賢さんの場合は、テレポーターションで自分自身を別空間に瞬間移動させることができるし、僕は意識によって別の惑星を訪問することも経験しました。そして、今では物質転送機で現在の空間の一部を切り取って、別の空間に移すこともできるようになりました。その事でも分かると思いますが、同じ一つの位置にいくつかの空間が同時に存在することが可能だということなのです。空間は人間の意識によって作られているのだと確信しています」

賢も頷いた。梓はまだ納得がいかないようだった。

「この世界、この宇宙には無限に広がる存在があるでしょう。その無数の存在が個別にそれぞれの特性を持っているんですよ。それと同時に別の存在が同じ空間を占有するなんて、どうしても考えられないわ」

賢が言った。

「無限と言ったって、全ては一つの源から拡散した世界だろう。元は一つなんだ。その拡散の仕方が少し異なれば全く別の世界が生まれるよ。元々この無限の世界を構成している物質はミクロの無限小、素粒子で構成されているだろう。素粒子は不確定で決まった存在形態を持たない。確率的に存在しているんだから、この世界が同じ空間に同時に別の存在に変化しても何もおかしくない。そう思わないか、梓？」

梓は先ほど経験した恐怖心かなりを潜めていて、パラレル・ワールドの話にのめり込んでいた。賢は梓が不安から離れていることに安堵感を覚えた。愛子が言った。

「でも、今日のことはとても不思議だな。賢パパが乗った電車と私が乗っていた電車が同時に同じ根室本線のレールの上を走っていたって考えると、頭がおかしくなりそうだね。私、ひとつのレール上を違う電車が走っているところを想像できない」

「それは、この3次元世界に生きていれば誰だって2つの重畳した空間の事象を同時に認識することはむずかしいと思うよ」

「だって、それって同じ場所に今あるのとは別の素粒子があるってことでしょ。不可能に思えてしまうわ」

梓が愛子に同調して言った。

「ぼくは無限小と無限大の概念を理解できれば、パラレル・ワールドも理解できると思うよ。原さんの語録にもあるだろう、無限大と無限小は同じものだって一節が。覚えているか、愛子？」

「前に原さんに語録の説明をしてもらったことがあるよ。私には難しすぎて分らなかったけど」

「それじゃ原さんにもう一度説明してもらおうか？」

「いいですよ」

原はほほえみながら応えた。

「“無限大”と“無限小”が同じだという概念は次のように説明できるんです。無限小に無限大を乗ざると“ ∞ ” * “+0” = “1” となって、結果は“1”になるんです。つまり、 $\infty * (1/\infty) = 1$ で無限小の物はいくら沢山集めても、最大で“1”であるということなんです。もっとも、ここで謂う“1”は普通の算術上の“1”とは意味が違いますけどね。すべてを含んだ、収斂した数としての“1”ですけどね。我々の世界にあるあらゆる物は原子からから出来ていて、現代科学は無限小に向けて素粒子の探求を突き進めているけど、我々も、他のどんな存在も無限小のクオークの集まりだということは確かでしょう。それらのクオークを自分の全体分、周りの人たちの分、周囲の自然界の存在物の分、この宇宙のあらゆる物の分全てを寄せ集めて、無限個集まったとして、その合計は“1”になるんです。すなわち、それは唯一の存在に帰すと言うことなんです。もう少しわかりやすく言うと、物質はその根元まで縮小していった素粒子にまで至

るとその存在を確定できなくなるんです。これは時間的、空間的に確定できないと謂う意味なんです。大きさが無限小になるのです。しかも、確定できないだけでなく、一つの素粒子が他の素粒子と同じであるというとても重要な事実があるのです。現在の科学はまだこのことを見いだせていないですがね。すなわち2つの素粒子はその存在を判別できなくなるということなのです。つまり、異なった物質に存在するそれぞれ一つずつの素粒子を抜き取ると、それは全く同じものであるということ。この世界を素粒子レベルまで探求すると、全ての素粒子の数は無限大数に近く、その大きさは無限小に近くなりますが、それらが全体として一つの存在を示しているということが分るのです。それでは無限大はどうかというと、宇宙存在に於ける物質の数は無限大に近くなる。しかし、銀河を見ても分かるようにそれらの存在は一つに結合されていて、究極まで拡大すると一つの核に収束する。また、こと座の銀河団を見ると分かるように、それぞれの銀河も皆結びついていて、一つの方向に向かって進んでゆこうとしている。それは全体として一つに収束しようとする動きだと思うのです。宇宙はビッグバンで示されるとおり、一つの存在から出来上がった結果です。膨張を続けて究極まで拡大し、最終的にまた、ブラックホール化して一つに収束する。すなわち“1”なのです。無限大である宇宙全体に存在する素粒子の数は無限大です。そして、その大きさは無限小これを掛け算すると、見事に“1”に収束するでしょう。つまり無限大と無限小が同じだということの意味しているのです。いずれも“1”なのです。人間にとって、宇宙は数としての無限大が認識され、素粒子は大きさとしての無限小が認識されています。でも、それはいくら集めても“1”にしかならないのです」
賢も頷いてから言った。

「原さんの話はこの3次元世界を元にした説明だけど、パラレル・ワールドを理解しようとすると、ちょっと難しいかも知れないね。同時にもうひとつ上の次元から見た認識を持つと、もっと簡単に理解できるよ」

「それはどういうこと、賢パパ？」

「4次元になると時間も空間も固定されなくなるんだ。それは愛子自身が体験したことだけどね、おまえは失踪を経験しただろう。あの時、愛子が

紀ノ川のほとりに居ても、この空間では誰も愛子のことを認識できなかった。お父さんも、お母さんもね。おまえは4次元の別空間に移行していたんだ。この3次元現象世界に顕現して初めて、皆が愛子の居ることに気付いたろう」

愛子の目にうっすらと涙が浮んだ。賢はそこで口をつぐんだ。原がそれを受けて続けた。

「そうなんです。4次元の視点で見れば、同時に2台の列車が同じレール上を走っていても何の不思議もありません。時間も空間も重畳して存在できるからです。その様に扱えた方が分り易いですね。素粒子の世界も実は4次元と3次元の接点になるんです。それが無限大と無限小の交錯する領域なのです」

梓が言った。

「ということは、あなたは由仁の駅で4次元に移行していたということなのでしょうか？」

「どうも、そのようだな。テレポーテーションして由仁駅の近くに現れたときから3次元と4次元に跨がっていたようだな。俺が透視して見た列車は混んでなかったのに、愛子の乗った電車は混んでいた。愛子にも、俺にも見えたあの一組の男女は一体誰だったのだろう？・・・・・・愛子にはつらいことを思い出させてしまったようだな。すまない」

「ううん、だいじょうぶ。ちょっとお母さんのことを・・・・」

愛子の涙でパラレル・ワールドの話は終わりになった。全員が入浴し、寝室に向かった。梓の心はふたたび不安で揺れ動いてきた。この夜ほど梓は賢の胸をあたたかいと感じたことはなかった。

祐子から何の連絡もなく、落ち着いた日々が過ぎたある日、賢は自分から祐子に連絡を取り、約束したMTS 2台を祐子の事務所に送り、OVS 6台と位置情報端末20台を祐子から送ってもらったリストに従って、ウグングの仲間のアジトに直接転送した。これでコンゴに於ける次の行動のお膳立てができた。

梓が拉致されそうになるという出来事があってから1週間が経った。身

辺に危険が迫っていることを感じた賢は亜希子の遺体を家に置くのはまずいと感じ、棺を賢の寝室から、工場の地下室に移すことにした。休日に賢、原、愛子、梓の4人のみによって移動は行われた。棺は内容物が判別できないように段ボールで完全に覆い、4人で戸口まで搬出しておいて、配送業者を呼び、大型家具でもあるかのように思い込ませて、慎重に工場の荷物受け渡し口まで運搬してもらった。棺は工場の荷受け場所で降ろされた。工場では特別に休日出勤を頼んだ従業員に命じ、リフトを使って地下に降ろさせた。この1週間の間にその事以外に特に変わった出来事は無かった。

その日賢は信州の状況を確認するため、一旦東京の数馬を訪ね、その後一緒に諏訪に向かうことにしていた。周囲の者に違和感を抱かせないために、諏訪にはテレポーテーションで移動するのは止めた。梓も同行したが、飛行機に乗ることによる胎児への影響を考え、賢は許さなかった。賢は朝の便で羽田に着いた。到着ゲートを通り抜け、ロビーに出たとき、そこに雪坂康子が立っていることに気付いた。

「おはよう、康子どうしたんだ？」

「おはようございます。私、樋口社長から内観社長を迎えに行くように言われましたので」

賢は一瞬、数馬が雪坂にそんなことを指示するだろうかと言う考えがよぎったが、雪坂の元気な声の影に一抹の寂しさを見て、微笑みを返した。

「ありがとう、康子。まだ時間があるから少しコーヒーでも飲んでゆこうか？」

「はい」

ふたりは空港3階のカフェに向かった。康子は歩いている賢の左脇に来て賢の左腕の下に自分の右腕を差し込んで抱えるように絡めた。賢が康子の顔を見ると康子は下を向いたまま、視線を合わせようとしない。賢はそのまま康子と一緒に3階のレストラン街にあるカフェに入った。

康子は席に着くまで賢に絡めた手を外そうとしなかった。席に着くと、ウェイトレスが注文をとりに来た。ふたりはカフェラテを頼んだ。

「康子、ふたりになるのは久しぶりだね」

「わたし、胸がドキドキして、昨日の夜は眠れませんでした」

「数馬の秘書の仕事はどうだ？」

「……一緒に居たいです。もう、お怪我は大丈夫なのですか？」

「康子、俺が怪我をしたとき、何度も来てくれたんだね。ありがとう。君には会える機会もなくて、何のお礼もできなかったけど……」

「わたし、あの後も、何度か札幌に行きました。あなたにお会いしたくて。元気な姿を見るだけでもいいと思って……」

「えっ？なぜ家に寄ってくれなかったんだ？」

「だって……あそこには田辺部長がいらっしゃいますから……私伺えません。お家の外で、あなたのお帰りになるのを待っていて、あなたが家にお入りになるのを見届けてから、また戻っていました」
賢は康子に済まないと思った。

「いつか、きっとあなたと一緒に生きることができると信じています。それはできないことなのでしょうか？私はあなたとふたりきりで生きてゆきたい……」

「康子、前にも言っただろう。君を愛しているけど、ふたりだけで生きてゆくことは難しいって……」

「……」

康子は黙って下を向いてしまった。その時、賢は祐子の呼んでいるテレパシーの声を捉えた。意識を祐子に向けてみた。

「あなた、できたら物質転送機の操作方法を教えて欲しいの。ウグングから、キンサシャにある首相官邸内の大統領の居る可能性が高い部屋の、執務机の位置が確認できたという連絡が入ったの。彼はOVSを使って首相の亡くなった両親との会話と、大統領に殺された将校のコメント、大統領の以前の愛人からのメッセージを3枚のDVDに録画したと言っているわ。それと大統領宛の書簡3通も用意したって。首相のデスクに送り付けようとしているのだけど、手紙はウグングのところ、DVDはそれぞれ録画した同志の拠点にあるの。それらの場所ははっきりしているんだけど、それをどのようにして一緒に送ったらいいのかわからないの。間違いが許されないでしょう。私や、アイリーンではこれを正確

に処理する力量がないの。あなたに助けて欲しいのよ」

賢もテレパシーで応えた。

「分かった、少ししたら、君の事務所にテレポーテーションするよ」

「ありがとう、待っているわ」

祐子からのテレパシー通信が切れると、賢は康子に向かって言った。

「そろそろ出ようか？」

康子は首を横に振った。

「・・・いや、もっとふたりきりで居たい」

「ごめん、俺は少し用事があるんだ。君はもう少しゆっくりしていたらいいよ」

賢は動こうとしない康子の肩にそっと手を当てて、勘定書を手にした。

「わたし、ここで待っています・・・」

「だけど、時間が掛かるぞ」

「待っています・・・」

賢は支払いを済ますとキャッシャーに「連れが暫く残っている」と告げてカフェを出た。賢は数馬に電話を掛けるために急いで電話ボックスに向かった。

「もしもし、数馬おはよう、賢だ」

「おう、早いな。おはよう」

「ちょっと緊急の用事ができたんだ。あとで、直接行くから、先に諏訪に行っていてくれないか？」

「もしもし、分かった。できるだけ早く来てくれよな。そっちの用事が済んだらまた、連絡してくれ」

賢は康子が出迎えに来たことは口にしなかった。数馬が知らないことは明らかだ。数馬はどんな用事ができたのか聞こうとしなかった。受話器を置くと、賢はトイレに駆け込んだ。誰も居ないことを確認して、そのままキガリの祐子の事務所にテレポーテーションした。

祐子はベッドの縁に腰掛けて賢の顕現をじっと待っていた。やがて賢の姿がはっきり現れてくると、祐子は直ぐに賢の元に駆け寄った。賢は意識が固定すると、祐子が自分に身体を寄せていることを感じ、静かに抱

き締めた。キガリは真夜中だった。

「あなた、ありがとう。忙しいのにごめんなさい」

「こんなこと、なんでもないよ」

「この計画の最初の挑戦でしょう。失敗を許されないから、どうしてもあなたに助けて欲しかったの。日本が朝の内に連絡したの」

「俺がここに来るのは、あたりまえのことだよ。朝までベッドの中で話しを聞くよ」

祐子は恍惚とした中で、時々意識を戻しウグングからの手紙の内容を説明した。朝になると祐子は身繕いを整え、直ぐにアイリーンを呼んだ。アイリーンはスバハを抱いてやって来た。昨晚祐子はスバハをアイリーンに頼んでおいたのだった。アイリーンは賢を見ると、会釈して頭を下げた。祐子はアイリーンにこれから賢が行うMT Sの操作を覚えるように言った。それから、詳細な3次元位置情報が記載された、アジトの拠点とターゲットの所在場所のリストを見せて、そこの特徴を説明した。

「大体話したから分かるでしょう。ここと、ここと、ここでビデオを録画したのよ。DVDはこの3カ所にあるわ。それから、ここがウグングのいる場所で、この位置情報は大統領宛の手紙を置いてある場所を記載してあるわ。別のものを3通用意してあるわ。そして、ここが大統領官邸の場所。ここと、ここと、ここと、ここ、これらの部屋にあるデスクの表面中央の位置情報になっているわ。ここに書いてある一連の位置情報は時限爆弾の置いてある位置で、ここから爆弾を転送する前に、ウグングがここを管理している男に連絡を入れることになっているの。そしてたらその男が時限爆弾の時間をセットしてスイッチを入れることになっているわけ。但し、物質転送機の転送中にタイマーの時間が狂わないということが絶対条件だけどね」

「MT Sで空間を切り取って、別の場所に貼り付けるとき、時間は停止した状態になることは確かだが、MT Sの処理能力からして、実際に止まっている時間は数秒だろう。だから、あまり気にしなくても大丈夫だ」賢はそう言うと、祐子にこれから行おうとするものの手順を確かめた。

「現在手紙やDVDの置いてある拠点ポイントからダイレクトに大統領

領官邸充てに転送するのではなく、一旦祐子の元に転送してから、それをしかるべき形に整えて封印し、転送した方がいい」と説明した。賢は早速MTSを作動させ、手紙とDVDを全て回収した。賢は手紙の中身とDVDの映像を透視して確認した。3通の手紙の筆跡は明らかに異なっている。DVDの映像はぼやけているが人物の確認はできるレベルだった。DVDのケースは3つとも異なっている。祐子は直ぐにレターサイズの異なったタイプの封筒を用意してきた。3通とも異なった封筒を用いることで、違う人物から送られたことを装うつもりだ。1通目の宛名は祐子自身が手紙の筆跡を真似て書いた。それは両親からのメッセージを伝える書簡だ。2通目はアイリーンに書かせた。愛人からの気持ちを伝えるものだ。3通目は肅正された隊長からのメッセージを伝える為のもので賢に頼んだ。それぞれ宛名の書き方を違い、筆跡を違えるためだ。賢はPCを使って作文し、それを黄土色の紙に印刷した。準備ができると、祐子はそれぞれの封筒に手紙とDVDを入れ、1通目の封筒に、賢が1週間前に祐子宛に転送しておいたマイクロチップを仕組んだ護符を入れて封印した。DVDを収納するケースの厚みが異なっているため、封書の厚みも3通とも異なり、全く別の3つの封書に見える。賢は先ず位置情報端末を取り出し、その位置検出機能をONして、リスト上に記載されている大統領の一つ目の執務室の位置情報より30センチメートル上方に向けて転送し、10秒ほどして、それを直ぐに回収した。回収された位置情報端末の示している位置はリスト上の予測位置から右に13センチ、左に17センチ、垂直方向に-7センチずれていた。賢はリストの位置情報を修正し、そこに向けて1通目の書簡を転送した。第2の執務室、第3の執務室にも同様の方法で2通目、3通目の書簡を転送した。転送し終わると、賢は祐子に、ウグングに宛てた転送完了の通知を書くように言った。祐子は既に手紙を用意してあった。賢はそれを直ぐにウグングに送り付けた。これで最初の活動は完了した。

コンゴ民主共和国の大統領官邸の中は一寸した騒ぎになっていた。この日大統領は夫人を伴って、国務大臣の催したフランス企業とのレアメタ

ル成約記念式典への出席と迎賓の為に、昨晚からパレスホテルに宿泊していた。大統領官邸には補佐官、執務官達が留守の間の業務を任されて働いていた。大統領執務室に人の出入りはなかったが、清掃担当のメイドが第2執務室の前を通りかかったとき、中で「バタン」という何かが倒れるような音がするのを聞いて、執務官の事務室に報告に来た。執務官の一人がメイドに附いて直ぐに第2執務室に行ってみた。この執務室は会議室を兼ねた執務室で、大統領の前での御前会議が出来るようになっている。部屋の中はいつも通りで、何ら変わったところはない。メイドが床の上に1通の封書が落ちているのに気付いた。それを拾って執務官に渡すと、執務官が言った。

「*****」(これは大統領宛じゃないか。差出人はバタゲ・ドンダリンか。聞いたことの無い名だな。誰がこれを持って来たんだ？ 検閲もされていないじゃないか)

「*****」(どなたも来なかったと思います)

「*****」(そんな馬鹿なことがあるはずはない。窓から投げ入れられるはずもないが、念のため窓の状態を調べてみなさい)

メイドが全ての窓を調べたが、空調しているので、当然どの窓もきちんと閉ざされ、その上施錠されていた。執務官は直ぐに大統領補佐官の事務室を訪れ、このことを補佐官に報告した。補佐官は内容物の安全性を確認してから、封書を大統領が普段執務を行う第1執務室の机の上に置くように言った。執務官は事務室に戻り、金属探知機を用いて封筒の中を探知し、更に封書に注射針を挿入して内気の毒性反応を調べた。金属探知機が僅かに反応したが、重量的に見てそれは誤差の範囲で特に異常がないと判断し、封書を持って第1執務室に行った。その部屋の机の上にも1通の封書が投げ置かれていた。それはボウム・フラグ・ハリバムニという者からの封書だった。筆跡も異なっている。執務官はその中身の安全性の確認をするために事務室に戻り、再び戻って来て、大統領のデスクの中央に2つの封書を重ねて置いた。執務官はこのことを直ぐに補佐官に報告した。補佐官は神経質になっていて、直ぐに第3の大統領執務室についても確認を行う様に執務官に指示し、自分も同行した。こ

の部屋は普段は大統領と補佐官以外の者の入室が禁止されている部屋で、大統領がプライベートに使う部屋だった。唯一メイドだけが朝夕の掃除のための入室を許されていた。補佐官が中に入った。執務官は入り口のところで、補佐官の様子を窺っている。やはり封書があった。差出人はケント・フレデリスキーとなっている。いずれの部屋にも封書が投げ入れられたことになる。補佐官はただ事ではないと感じた。どの部屋の封書も無造作に放り出したように置かれていた。補佐官はこれらの封書について共通性を確認しようとしたが、できなかった。どのように投げ入れられたのか、どうしても分からなかった。3通の封書は封筒も全く別物で、筆跡も、差出人も異なっている。その上、封書の厚みも違っていた。補佐官は直ぐに大統領の付け人にメールを入れ、電話を掛けた。付け人から返事が来た。あと1時間ほどで官邸に戻るので、その後で確認するとの返事だった。補佐官は落ち着かなかった。いらいらしながら大統領の帰還を待った。やがて大統領が官邸に戻って来た。補佐官は直ぐに封書について大統領に告げた。大統領は特に驚いた様子も見せずに言った。

「*****」(誰かが持ち込んだんだろう。まずは中身を見てみよう)

「*****」(大統領、3通の封書が同時に正規のルートを経ずに持ち込まれるということは、それだけでも異常な事態と思われます。外側から検査を行いましたところ、封筒内部には重金属物や、危険物などは入っていないようですが、CDかDVDの様なものと僅かに金属反応を示す小さな小物が入っているようです。万が一のことを考え、開封はたくしが致します)

大統領は封書3通を補佐官に渡した。補佐官は1通目を開けてみた。特に異常はない。中には4つ折りにした1通のレターと黒色のCDケース、そして護符が入っていた。補佐官はレターには手を触れずに、CDのケースを取り出し、開けた。印刷面に“DVD”と手書きで書き込まれているメディアが出てきた。補佐官はケースを入念に調べた。別段異常はなさそうである。金と緑に輝く錦糸の袋に入れられた護符も中を開けてみた。小さな碟にされたキリスト像のアイコンと祈りの言葉を書いた純白

の紙が出てきた。補佐官は慌ててそれを袋に戻した。

「*****」(大統領、レターとDVD 1枚、それに護符のようなものが同封されています。どう致しますか？DVDはそちらの再生機で再生できますが・・・)

そう言うと補佐官は2通目、3通目も開封し、それらについても同じような説明を大統領に伝えた。大統領は補佐官から渡された1通目の手紙をさらっと読んでから言った。

「*****」(ヌグバムリ、私は第3執務室に移動する。少し疲れた。休みたい。DVDは後で見しておく)

大統領はさも、手紙の内容が取るに足りないものだとでも言うかのようにレターと護符を封筒に戻して、机の上に放り出した。補佐官は手紙の内容に興味があったが、大統領の意志には逆らえなかった。大統領が肘掛け椅子に凭れ掛かるようにして目を瞑ったので、補佐官は残りの2通の封書を机の上に置き、軽く頭を下げ、執務室を退出した。大統領は補佐官が出て行くで一呼吸置いてから、先ほど放り出した封筒と残りの2通の封書を手にして第3執務室に移動した。リクライニング・チアに腰掛けると1番目の封筒からレターを取り出し、もう一度読んだ。大統領の眼光が鋭さを増してきた。

「*****」

(大統領閣下)

わたくしは、嘗ては革命戦士であられた閣下を尊敬し、同時にこの国の繁栄を願ってやまないコンゴ民主人民共和国の国民の一人です。閣下が革命を成し遂げられたとき、わたくしたちはこの国の政治が変わり、我々国民にやっと平和がもたらされるものと確信しておりました。それから何年か経った今、閣下はこの国の国民がどのような状態に置かれているかをご存じでしょうか？男達は戦闘に明け暮れ、お互いに殺し合い、この国を豊かにするための本来の仕事など全く行わなくなりました。その結果、多くの家族が悲惨な状態に置かれ、女達、子供達は命を守ることもままならない状態に陥っています。病気が蔓延し、人々は生き延びるために、ゴミをあさり、窃盗までしなくてはならなくなっ

ています。そんな状態の中で、わたくしはOVSというマシンを使って閣下のお父上からの通信メッセージを受け取りました。それを録画したDVDを同封致しました。ご覧戴きたく存じます。お父上は閣下に、この国の平和についてお話しなさっています。そして閣下に神様のご加護がありますようにと、護符を送って欲しいと仰いましたので、同封致しました。

閣下、この国をお救いください。現在の政治のあり方をお改めになってください。官僚や役人達の横領や贈収賄、国民の資産の搾取など、あらゆる悪癖を、鉄拳を持って制裁して戴きたく思います。他国からの支援が国民一人一人に行き届くよう、また、国民が意欲を持ってこの国の為に働くことができるよう、本当の国民の為の政治を行って戴きたいと、切にお願い申し上げます。この手紙が閣下の元に届いてから、1週間以内に閣下が行動に出てくたさらない場合は、わたくしはやむを得ずインターネット上に閣下に対しての国民からの訴えと、お父上からのメッセージを掲載させて戴き、世界中の人たちにコンゴの窮状を訴えたいと思います。ご慈悲に満ちたご裁断をよろしくお願い致します。

ケント・フレデリスキー)

大統領は憤りに、目を大きく剥いて、DVDを掴み、壁際に設置されている7.1サラウンド音響装置を備えたテレビシステムのDVDプレーヤーに掛けた。画面上に2、3秒ノイズが顕れてから、嗚れた男の音が響き、画面にぼんやりと老人の姿が映し出された。大統領は思わず叫んだ。

「*****」(おとうさん!)

老人は語り掛けるように話し始めた。

「*****」

(ザーザー・・・・ガガガ・・・スタンガジよ、私を覚えておるか? おまえたちのいる世界を去ってからもう何年になるだろう。私はやっとのことで、苦しい状態から逃れることができた。今では穏やかな心で、毎日畑仕事に励んでいる。不思議なことだが、おまえ達の居る世界でわ

しは死んだはずなのに、今ここではこのように生きている。身体もちゃんと生きているし、家も、畑もある。幸せな毎日を生きている。少しでも人々の役に立つ仕事をしたいと思うのだが、何でも思っただけで、直ぐに実現してしまうので、拍子抜けするほどだ。おまえもそちらの世界では、きっと人々の役に立つような仕事をしていることだろう。わしはおまえが自慢だった。沢山の仲間を集め、先頭に立って、自分達の住んでいる国を豊かな国にしようと思っていた。あの頃のおまえの姿をはっきり思い出せる。今おまえはきっと国民を幸せにする為に働いていることだろう。だが、おまえは少し自我の強いところがあった。リーダーとしてみんなを引っ張ってゆくとき、最も邪魔になるものが自我だ。よいな、自分のことは置いておいて、先ず人のことを考えなさい……) 大統領は恐ろしくなった。画面に映し出されている老人は紛れもなく、自分が革命軍を率いるようになる前に他界した父親の姿だった。自分がまだ幼少の頃からいつも自分に対して「隣人のことを先ず第1に考えなさい」と言っていた。そんな父親の言葉が説教じみていて好きではなかった。「自分は近所の人を助けるなどという小さなことでなく、国民がみんな幸せになる国をつくる— そういう大志を抱いている」と思っていた。大統領は考え込んでしまった。そして、大きく深呼吸をした。

「*****」

(……スタンガジよ、おまえの理想は実現したのか？おまえがいつも言っていた「全ての国民を幸せにする」という希望は実現できたのか？おまえの望みは叶ったのか？おまえの住んでいる国は、戦争の無い、平和な国になっているのか？……そうだ、お母さんと呼んでみよう。少し待ちなさい……。スタン、スタン……おまえなのかい？私だよ、おまえの母のクグニだよ。おまえを愛しているよ。元気で生きているのかい。私はお父さんとは一緒に住んではいないんだよ。お父さんよりずっと前に死んだだろう。不思議なことだけど、死んだ後も私は生きていて、他の大勢の人たちと一緒に住んでいるんだよ。毎日働いて、やっと生活している。いつもおまえのことを思い出しては、涙を流しているよ。生きていたとき、私は食べるものもろくに無くて、お

まえをやっとの思いで育てていた。自分が食べるだけの食料が無かったから、とうとう病気で死んでしまった。おまえが元気でいてくれることだけを祈っているよ。お父さんが時々来て、おまえは元気に生きているって言うってくれるから、少し安心なんだけど、ちゃんと食事はできているのかい？着る物や、住む家もあるのかい？それだけが心配なんだよ。私は、死んだ後も自分が食べてゆくのがやっとなんだよ。一度死んだのにどうしてこんなに苦勞しなくてはならないのか、とても悲しいよ。だけどスタン、私はおまえのことを考えているときだけが幸せだよ。おまえのことを考えはじめると、不思議なことに、自分がいつも住んでいる狭い部屋から抜け出して、とっても広い、見渡すかぎりの綺麗なお花畑に居るんだ。そのお花畑で、おまえにおっぱいを飲ませていたときのことを思い出していると、とっても幸せな気持ちになるんだよ。だけど、また、明日の仕事のことを考えると、暗い、狭い家に戻っている。私はきっと、夢を見ているんだ)

「うううっ・・・・・・・・」

大統領は耐えきれずにうめき声を発した。目から大粒の涙がしたり落ちた。大統領は急いで、ポケットからハンカチを取り出すと、目を拭い、頭から今の映像を消し去ろうとでもするかのような首を左右に振ってから、DVDをOFFし、メディアを取り出して、ケースに戻した。そして、封書の中から護符を取り出し、口づけして胸の内ポケットに収めた。大統領は椅子に凭れて暫くぼうっとしていたが、思い立ったように、2番目の封筒を開いた。中から同じように白いプラスチックのCDケースと1枚の黄土色の便箋にプリンターで印刷された手紙が出てきた。護符は入っていない。手紙には末尾にホセイ・ベリグと署名がされている。

「*****」

「スタンガジ・ムルンババナニク大統領閣下

私はルブンバシに住むホセイ・ベリグと申します。多分記憶に無いと思いますが、私は大統領がまだ革命軍を結成したばかりの頃、あなたと共に国軍と戦っていた者です。革命軍がまだ秘密裏に行動していた頃のあなたは、高邁な理想を抱いていて、周囲の者達はあなたの情熱に動かさ

れ、革命軍に加わったり、協力したりして国軍と戦いました。しかし、組織が大きくなってくると、あなたはカリスマ性が表面に出てきて、あなたの考えと異なる方法、例えば、周辺国との協調路線を取るとか、国軍と戦うより、政府と交渉することを目指した柔軟路線を取るとかといった考え方をする部隊に対して厳しい対応をし始めました。私はそれが一種の肅正の様に感じられ、直ぐに革命軍から離れました。あなたは自分に直接意見をするもの達をずいぶん肅正しました。私はそのころ、あなたに肅正された国民協調平和隊のブリ・ゴスマン隊長と対話をするので、それを録画したDVDをお送り致します。このDVDをご覧戴いた後、あなたから国民の救済に関する何らかの宣言があり、具体的な行動を示された場合は別として、そうでない場合は、ウェブにこのメッセージを公開致します。是非ご覧になり、現在、ご自分が政府を通して国民に対して行っている事を顧みて、腐敗した行政を糺して戴きたく思います。

ホセイ・ベリグ)

大統領はいきなり、手紙を破って放り出した。そして、DVDのケースを手にするるとそれを壁にめがけて投げつけた。DVDがケースから飛び出し、床の上を転げて窓際の壁にぶつかって止まった。

「*****」(ばかやろうめ!)

大統領は天井を向いて目をつぶった。少しして、椅子から立ち上がると、窓際からDVDを拾い、それをプレーヤーにかけた。

「*****」

(ザーザーザー・・・ピー・・・ガガガ・・・スタンガジ・ムルンブ
バナニクよ、俺のことを覚えているか？大勢の前で、おまえの指示で裸にされ、鞭打たれ、苦しみがいているところを、カラシニコフで足、手とじわじわと撃ち砕かれ、最後に頭を打ち抜かれて殺されたブリ・ゴスマンだ。俺はおまえの部下の残酷な仕打ちを、自分の頭が打ち抜かれる前から空中に浮いて見ていた。そうだ、頭を打ち抜かれたときには、もう死んでいたのだ。おまえの部下はそれでも飽き足らず、俺の心臓や腹を滅多撃ちした。俺はおまえを憎らしいとは思わなかった。「国民を

救う」というおまえの高邁な考えが実現されると信じていたからだ。自分と方針が違う者を排除するのもやむを得ないと考えていた。だが、死んだ後、おまえの生きている世界から次々に戻ってくる者達の話をして聞いて、おまえとおまえの仲間達が国家を食い物にし、私服を肥やし、贅沢三昧をして、国民の窮状を鑑みることさえしなくなっていることを知ったのだ。その話を聞いたとき、俺のおまえに対する寛容な心は激しい憤りに変化した。俺は自分の身を犠牲にしても、おまえ達を地獄に引きずり込もうと考えた。しかし、俺たちを指導してくれる天使様の話から、地獄は自分がつくるものだと分かったのだ。黙っていてもおまえは死んだ後、煉獄にたたき落とされる。いや、自分から地獄に墜落して行く道を選ばざるを得なくなる。だが、まだ救われる道は残されているようだ。今から、心を改め、自分の身を捨てて、国民の為に尽くせば、煉獄ほどの過酷で悲惨な世界に落ちずに済むかも知れない。スタンガジよ、心を改めろ。おれはおまえが立ち直るのをこちらの世界で待っている。……ガガガ・ピー……)

大統領はプレーヤーを止め、DVDを取り出すと、それをケースに収め、父親のDVDと一緒に自分の机の引き出しの中に納めた。大統領は大きくため息を吐いて、3通目の封書を手に取った。ピンク色の用紙に柔らかい筆致で書かれた手紙だった。

「*****」

(尊敬するスタンガジ・ムルンブバナニク大統領閣下

大統領閣下に直接このようなプライベートのお手紙をお送りする失礼をお許してください。わたくしはキンサシャに住んでいるエリアーヌ・デュラフォアという名前の白人女性です。夫は生粋のコンゴ人です。わたくしの両親はベルギー人です。あのコンゴ動乱で両親が亡くなってから長い年月が経ちましたが、わたくしは父の意志を継いで、この地に残りました。それはこの国があまりにも悲惨だからです。父は母国ベルギーがこの国の人々に与えた残虐な行いと悲惨な環境を少しでも修復しようと必死に働いていました。でも、あの悪夢のようなコンゴ動乱の砲弾によって斃れました。キンサシャが混沌とした状態に陥り、敵とも味方

とも分からない入り乱れた戦闘の中で、砲弾の直撃を受けたのです。わたくしは幸い母国に帰国しておりましたので、助かりました。わたくしは両親を失った悲しみを、この国を救う力に変えようと心に決めました。その覚悟もとてもきわどいものでした。わたくしはコンゴ人兵士に何度もレイプされましたが、幸いなことに命だけは救われました。その中に勇気ある、優しさに溢れた一人の男性がいました。その人がわたくしを救ってくれたのです。それが今の夫です。わたくしは夫なくして、避難民救済の活動を続けることはできません。この国はあのコンゴ動乱が収束し、新しい政府が擁立したのにもかかわらず、現在に至るまで殆どの国民が悲惨な状態から抜け出せないでいるのは何故でしょうか？一体何が原因なのでしょう？わたくしには分かりかねることでした。最近のある日、外国の方から変わった機械を見せてもらいました。死後の世界の住人と話のできる機械です。初めは信じられませんでした。画面に映し出された父と母の顔を見、話を聴いてみて、この機械がまやかshiではないことが分かりました。わたくしは一つのことを思いつきました。それはこの国を治めておられる方が、この国に住む人たちの生活の実態をご存じないのではないかとということです。それで、わたくしは大統領閣下にその事をお知らせすることに致しました。それも、わたくしの口からではなく、大統領が最も愛しておられたMiss. エリグ・ヌムンガリからの言葉でお話しさせて戴きます。DVDの中に今は亡きエリグさんの映像とお話が収録されております。是非ごらんになってください。そして、悲惨な状態に置かれているこの国の人たちをお救いください。あなた様がこの国で一番偉いお方なのです。あなた様のご命令で、この国は変わるのです。

エリアーヌ・デュラフォア)

大統領の心臓の鼓動が激しくなった。大統領はゴリラのように両手で胸を叩き、激しい鼓動を収めようとした。それと矛盾したように一刻も早くDVDを見たくなった。最も愛した、そして、今も心から消えることのないエリグの姿を見て、声を聞くことまでできると思うと、胸の高鳴りを押さえることができなかった。

「*****」

(ザーザーザーザー・・・・・・ピーピーピー・・・・・・ザーザー)

画面が出てくるのが待ちきれない。暫くの間、音声も映像も出てこなかった。大統領は早送りボタンを押した。ザーザーという音しか出ない。何回か早送りボタンを押しては再生してみたがとうとう最後まで音声も映像も出てこなかった。大統領はもう一度再生をやり直すことにした。今度は早送りをせずに再生状態のままにして、リクライニング・チアに戻り、もう一度手紙の文章を読み直してみた。部屋一杯に“サー”っというホワイト・ノイズが満ちている。胸の鼓動が響いてくる。大統領はエリグのことを思い出していた。自分が最も愛した女性だ。エリグは娼婦だった。キンサシャの南モンガフラのキャンプに駐軍していたとき、敵方との交渉が成立し、1ヶ月の休戦が成立した。多くの兵士が自分の家に戻った。そんな中、スタンガジは何人かの直属の部下と共にキャンプに残った。スタンガジ達は、昼間は緊急の臨戦に備え警戒を怠らなかったが、夜は身をもてあましていた。3、4日して街の置屋に行ってみようということになった。エリグはそこで出会った娘だ。まだ客慣れしていなかった。置屋の支配人が革命軍の隊長だったスタンガジに敬意を表し、まだ客を取ったことのない初（うぶ）な娘を紹介したのだった。

「*****」(わたしはエリグ・ヌムンガリという名前です。マスターに伺いました。隊長は私たちを救ってくれる救世主だって。今までの惨めな生活から抜け出すためには、この国を我が物にしている悪もの達を隊長にやっつけてもらうしかないんだって。私は隊長の為なら何でもしようと思えました)

そう言いながらエリグは上着を脱ごうとした。スタンガジはエリグの手を押さえてそれを止めさせた。

「*****」(エリグ、そのままで・・・・俺の近くに来て、おまえの話しを聞かせてくれ)

エリグは目が澄んでいて、これまで見た事も無いほど美しかった。スタンガジはいきなり彼女に手を触れることをせずに暫くの間話をした。彼女は自分の生きてきた苦難な道について悪びれもせず、だからと謂って

微笑むこともなく唯淡々と身の上を話した。それは悲惨な運命だった。8歳の時に父を失った。その後9年間母と、恐怖に怯える人生を生きてきていた。まともな教育も受けていない女ふたりにとって、当時のキンサシャに住むということは将来の望みがない人生を暗示していた。母は自分の仕事については何も話さなかったが、エリグは母が夕方厚化粧をして出掛けて行き、朝方まで働いて帰宅すると、雑巾の様にぐったりとしてベッドに倒れ込むことで、自ずとその仕事を知ってしまった。首都の郊外に住んでいたのも、本気でまともな仕事を探そうと思えば探せないこともなかったのだが、他のどの仕事も女としては命の危険を犯さなければならぬものばかりだったので、母はエリグを育て上げるまではその仕事を続けるのだと言っていた。エリグが18才になったので、母はそれまでの夜の仕事を辞め、果物を仕入れマーケットの露店で売るといふ仕事を始めた。新しい仕事を始めて僅か3ヶ月で、マーケットの中まで突き進んできた反乱軍と国軍の銃撃戦の流れ弾に当たり、亡くなった。エリグは悲しみにうちひしがれた。しかし、一人では葬式も出せなかった。エリグは自分で自分の身を守るしか方法がないと思った。まだこの置屋のドアを叩いてから1週間も経っていない。先輩のお姉さん達のやることを客室の隅のカーテンの陰からのぞき見て憶えなくてはならなかった。初めは恐ろしくて、涙が流れた。しかし、1週間が経つとやっとな我慢して観ていることができるようになった。この日がエリグにとっての初めての日だった。スタンガジは荒々しい性格だったが、黙ってじっとエリグの話を聞いた。話し終えて俯き加減に床の上を見詰めているエリグの肩をそっと抱き寄せた。エリグはどうしていいかわからず、夢中にスタンガジにかじりついた。それから全てスタンガジがすることを何でも受け入れた。エリグの口数は少なかったが、スタンガジはそういうエリグの姿が身震いするほど愛おしく感じられた。エリグは何もしなかった。ただ、この世界で一番偉い人に抱かれていると思うと、体中に喜びが広がった。スタンガジは今まで多くの女性と一夜を共にしてきたが、これほど素晴らし女性を見たことがないと感じた。エリグは何も求めなかった。ただ、スタンガジを100パーセント受け入れただけ

だった。その日は朝までスタンガジはエリグを抱き続けた。夜明け近くになって、エリグは自分が消えて亡くなるような深い恍惚感に包まれ、自分の果たすべきことを成し遂げた喜びに、涙を流した。スタンガジは支配人にエリグを自分のためだけに雇って欲しいと申し出た。支配人は一も二もなくそれを受け入れた。「隊長がエリグをお捨てにならない限りそのようにいたします」と誓った。それから暫くの間、スタンガジは毎晩この置屋に通った。エリグはスタンガジを心の底から愛するようになった。スタンガジも妻と別れてもいいとまで思い、その事をエリグに伝えたが、エリグは今のままがいいと言った。休戦期間の最後の日、二人がベッドの中で抱き合っているとき、外で銃を乱射する音がした。スタンガジは飛び起きた。何者かが置屋の中になだれ込んで来るのがわかった。あちこちで銃を発砲する音と、女性達の悲鳴が聞こえる。スタンガジは素早く衣類を身に着けた。エリグはどうしていいか分からず衣類を手にしたままおろおろしていた。銃は入り口のドアの横に置いてある。スタンガジが銃を取ろうと急いでドアの方に向かったとき、そのドアが蹴り開けられ男達がなだれ込んで来て、いきなりスタンガジに銃を向けた。その時すかさず裸のエリグがスタンガジの前に立ちはだかった。男が銃を発砲した。銃弾がエリグの胸を打ち抜いた。しかしエリグは倒れなかった。男が再び発砲した。今度はエリグの腹部を打ち抜いた。エリグの美しい肌が血で染まった。それでもエリグは倒れなかった。スタンガジは一瞬の隙を見て男に殴りかかり、銃を奪い取り、男を撃ち殺した。外から兵士が3人入って来た。スタンガジは3人とも撃ち殺した。その行動は目にも留まらぬほどの速さだった。3人目を撃ち殺すと、辺りはしーんと静まり返った。スタンガジは血で真っ赤に染まり、床の上に仰向けに倒れているエリグのところに駆け寄った。

「ガガガガ・・・ピーピーピー・・・隊長、愛しています。あなたを世界中で一番尊敬しています。国中の苦しんでいる人々を救ってくださるあなた、私はほんの少しの間でもあなたと共に生きることができて、もうこれ以上の幸せはありません・・・ガガガガ・・・ピーピー・・・サー」

紛れもないエリグの姿だ。スタンガジの目から大粒の涙が溢れ出た。もう我慢ができなかった。

「*****」(おお、エリグ、俺のエリグ、お、おれは……)

「*****」(大統領、大統領、どうなさいましたか？大丈夫でしょうか？)

ドアの外から補佐官の叫ぶ声が聞こえた。スタンガジは思い切り息を吸い込み、呼吸を止め、意識を現実に戻した。ハンカチを取り出し涙を拭くと声を低めて言った。

「*****」(大丈夫だ。あと5分ほどしたら、もう一度来てくれ)

スタンガジはエリグのDVDを引き出しに収め、破った手紙を拾って、先ほどの2枚のDVDを手紙と一緒に机の上に置いた。丁度5分後に補佐官のヌグバムリがドアをノックした。大統領はヌグバムリに手紙を読んでからDVDを観るように言った。ヌグバムリは1通が破られていることには触れず、真剣な面持ちで手紙を読み、直ぐにDVDを観た。

「*****」(大統領、これは明らかに陰謀です。下手に対応すると、取り返しのつかないことになりかねません。残りの1通はどんな内容でしたか？)

「*****」(うん、ちょっとプライベートな内容だからな……)

「*****」(大統領閣下、閣下の情に訴えるような内容でしたら、ご注意ください。敵はそれが狙いですから)

「*****」(分かっている)

大統領は不機嫌そうに言った。

ヌグバムリは3通目の手紙とDVDが非常に気に掛かった。大統領にことあるごとにその話をした。大統領も遂に根負けして、ポロッと行ってしまった。

「*****」(キンサシャの女だ。夜襲で死んでしまった)

ヌグンバリは即座にことの次第を飲み込んだ。大統領が革命軍の隊長だった頃、時間のあるときはよく一緒に置屋に通った。隊長が何時も決まった置屋にしか行かないことは、隊員の殆どが知るところだった。夜襲のあった日、ヌグンバリは警備隊を統率していた。翌日からの開戦に備

えるためだった。隊長は夜半には戻ると言って出掛け、敵襲を受けて戻って来たこともよく覚えていた。返り血を浴びたサファリ・ウェアを身に付けた隊長が悲壮感を漂わせて帰ってきたのは明け方近くであった。隊長は何も口にしなかった。いつもの隊長なら、襲撃を受けたら、からならず即座に報復に出るはずだが、その日は血のついた衣類を着替えることもせずに、そのまま暫くの間自分の部屋に籠もっていた。隊長の服は前面が不自然なほど血で汚れていて、どういうわけか袖口やズボンの裾は赤土がこびり付いていた。革命軍の隊長としてのスタンガジ・ムルンブバナニクがたった一度だけ見せた、気力の萎えた異様な姿だった。翌日の戦闘再開も午後になって漸く隊長の指揮が始動したのだった。

「*****」(大統領、このような中傷にいちいち反応していたら、国を統治することなどできません。たとえインターネットに掲載されても、この国の殆どの国民が見ませんから、大した影響はありません。暫く放っておきましょう)

それには応えずに大統領が言った。

「*****」(明日、モンガフラに行ってみようと思う)

ヌグンバリは大統領の気持ちを察した。

「*****」(明日は公の行事もありませんから、私が業務を処理しておきます。どなたか同行させますか?)

「*****」(うん、ムサルベだけでいい。夕方には戻る)

ムサルベは大統領の専属運転手を兼ねた執事で、大統領が唯一気を許すことのできる男だ。

エリグの墓には花が飾られていた。あの晩、泣きながら山中に埋めたエリグの遺体は、大統領に就任するとムサルベに命じて、直ぐに掘り起こさせ、このモンガフラにあるキリスト教の墓地に移した。エリグはキリスト教を信じていたわけではなかったが、こうすることで、エリグの遺骨が守られ、自分も怪しまれずに墓参できると考えたためだった。大統領はムサルベを一人、大統領専用車に残し、一人で墓を参った。墓は美しい花で飾られていた。ムサルベが常に生花を供えてくれていた。大統領は墓の前に膝を突いて、瞑目した。涙が止めどなく流れてきた。

「*****」(エリグ、許してくれ。俺は間違いを犯してしまった。大統領になって、取り巻きのことしか見えなくなってしまった。おまえの声を聞いた。見ていてくれ、俺は昔のスタンに戻る。必ず、このコンゴをおまえの望んでいたような国に作り替えてみせる)

スタンガジの目にエリグの姿が映った。しかし、それは連なる墓の中程にある人の背丈ほどの白い石塔に映った陽の影だった。スタンガジは1時間ほどその場を動かなかった。やがて、車に戻って来ると、大統領は言った。

「*****」(ありがとう。花がとても美しかった。エリグをいつも慰めてくれているんだな。きっと喜んでいるだろう。ムサルベ、車を替えて私を貧民街に連れて行って行ってくれないか?)

「*****」(かしこまりました。大統領閣下、ありがとうございます。私はその言葉をずっとお待ちしておりました)

貧民街は目を覆うばかりだった。通りを歩いている者が、食事もろくにしていないことは、火を見るより明らかだった。屈託のない子供達の服装も官邸のテレビで観る子供達の着ている衣服とは大きくかけ離れていた。

「*****」(俺は、一体何を見ていたのだ……)

大統領は官邸に引き返すことにした。現状を守ろうとする高官や官僚の壁をどうやって乗り越えたらいいか考えた。

「*****」(そうだ、逆手に取ろう)

専用車に乗り換えると大統領はムサルベに言った。

「*****」(ムサルベ、私の名前を使って、非公式の声明を発表してくれないか。大統領から聞いた話として……現在私は完全に軍を掌握できていない。下手に動くと、クーデターを引き起こしかねない。だから、私は高官達の前ではいかにも彼らと同じ考えを持っているように振る舞う。しかし、本当の意図は国民の生活を改善することにある事を国民に知らせて欲しいのだ。先ず手始めに、彼らがインターネットにDVDの内容を投稿するのを待ち、国民の間にその反応が出始めた瞬間を見計らって、議員や高官達に政策転換を指示しようと思う。それと同時

に、この手紙やDVDを送ってきた反政府分子にわたしの考えを理解させ、彼らと共にこの国の改革を進めようと思うのだ。無数にいる役人達の気持ちを一気に替えることはできない。一番厄介なのが国軍だ。ムサルベ、何かいい考えはないか？)

「****」(閣下、わたくしは各省が十分に機能を果たしていないことが、この国の状態を改善できない主な原因だと思います。先ず、大統領直属の委員会、国民生活改善諮問委員会を設置します。それから、本当は新たに国民生活省とでもいう新しい省を設けるのが一番いいのですが、そう簡単にはいかないでしょうから、当面、農水省の管轄下で全国の農業振興の為の資金援助を開始します。更に企業省の管轄下に産業振興基金母体を設置し、海外からの支援の2割をこれら2省の基金に供します。これまでだと、それらの基金は殆ど役人の手に落ちてしまいましたが、それを国民生活改善諮問委員会の監視下に置き、この会議が軍の組織、国防省と連携を図る形にするのです。そして一番大切なことです。困窮している国民を救済するための組織を作ります。国民救済庁というような名前でもいいでしょう。その組織に、保健省、労働省とタイアップして、国民の直接の窮状を受け止める活動を行わせます。例えば最低生活レベルの引き上げ、就活支援、起業支援、エイズ撲滅活動、伝染病防止インフラ対策、ワクチン注射の実施などです。上からの行政ではなく、ボトムアップの対応です。国民の生の声を聞く組織にします。そこには海外からの資金援助の8割を投入します。時間が掛かるでしょうが、そこから活性化をスタートさせます。それ以外の省に対しては、国民の生活改善を第1に考えた施策を出させます。それらの事業は役人の管理下に置くことにし、この事業に対して、汚職、横領などが発覚した場合は、即座に公務員の職を解き、特に酷い場合は、重い懲役刑、あるいはもし多くの国民を困窮状態に陥れた場合は死刑に処すように法律を変えます。一方で大統領閣下のおっしゃったように、手紙をよこした反政府分子の活動をうまく誘導して、国民の気運を高めます。いかがでしょうか？)

スタンガジはムサルベがこれほど真剣に国のことを考えていたことに

驚きを隠せなかった。この男を補佐官にしたいと思った。しかし、それは一朝一夕にできることではなかった。政府が補佐官や高官達の思惑で動いていることを知っていた。自分があまりに彼らに依存しすぎていたことを悔やんだ。

「*****」(ムサルベ、やってみよう)

官邸に戻ると、大統領はヌグバムリ補佐官に向って言った。

「暫くの間、敵方の様子を見ることにしよう」

ヌグバムリは目元に薄笑いを浮かべた。

賢は一連の物質転送処理を終えると、祐子と共に戦略の確認を行った。次のステップは高官達の懐柔だ。ふたりはコンゴ国内の全ての拠点の責任担当業務を確認した。ウグングが事細かく計画を記入してある。調査の終えた高官はまだ1割程度だった。高官達は各省庁の大臣と事務次官、そして各州の知事と副知事だ。ウグングの手紙には現在各地域の同志達が必死になって高官達の過去の個人情報を追っていると書かれていた。この仕事には時間が掛かる。賢は、衛星ラジオの投下とラジオ放送ができるようになるまでの3ヶ月間で調査を完了させることができるかどうかを祐子に確認した。

「1ヶ月以内に、やり遂げてみせる」って言っていたわ」

祐子はウグングの言葉を引用して応えた。

「それじゃあ、3ヶ月後にはコンゴ国民が衛星ラジオ放送を聞いているよ」

賢も祐子の意気込みに同調して応えた。

「必ずコンゴ国民の多くが意識を高揚させはじめ、この国の明るい未来を夢見るはずだ」

具体的な計画の確認を終えると、ふたりは立ったまま抱き合った。抱き合うと、意識は直ぐに同調し始めた。ふたりの意識空間は全宇宙に及び、次第に宇宙そのものを自分の中に感じ始めていた。ふたりの魂は融合して一つになった。魂の融合は、肉体的な結合による快感を遙かに超えて至福の状態を生み出した。ふたりは互いに心身が充実してくるのを感じ

た。アイリーンがドアをノックする音で、ふたりは意識を部屋に戻した。アイリーンはスバハを抱いて立っていた。スバハは目を覚ましていたが、おっぱいをもらったらしく、機嫌が良かった。賢は祐子と、アイリーンにもう一度様々な場面での物質転送機の使い方を解説してから、日本に戻ることにした。ふと康子のことが脳裏を掠めた。

「8時間か、いくら何でも、もう会社に戻っているだろうな」

そう呟くと、賢は一気に羽田空港の電話ボックスの脇にテレポーターションした。幸い付近には人影が無かった。もう夕方になっている。賢は直ぐに数馬に携帯電話をかけた。数馬は既に諏訪の視察を終え、関係者からの報告を受けている最中だった。

「数馬、済まなかった。意外に時間が掛かってしまった。これからそちらに向かおうと思うが……」

「賢、無理しなくてもいいぞ。俺はこれから東京に戻ろうと思う。おまえと会えなかったのは残念だが、悪いが、明日は一人で視察してくれるか？……そうだ、雪坂はどうした？」

「おまえの指示でここに来させたのか？」

「いや、彼女が是非行きたいというので、そうさせたのだが、社にも戻っていないようだし……おまえと一緒にじゃなかったのか？」

「朝出迎えてくれたが、少しして別れてからはどうなったか分からない」

「そうか、兎に角、行き違いになるが、おまえの目で進捗を確認してくれ。俺が見る限り、順調にやっているように見えるが……」

「ありがとう。じゃ、そうさせてもらうよ」

賢は一応確認しようと思い、カフェに行ってみて中を覗いてみた。果たして康子はまだ元の席に座っていた。テーブルにはカフェラテのカップが置いてある。朝のサイズと違いビッグサイズになっている。

「康子、おまえ、まだ待っていてくれたのか？」

康子は精一杯の笑顔を作って応えた。

「わたしは、あなたのことを待つしかないの。そう決めたのだから」

「昼飯は食べたのか？」

康子は首を横に振った。

「コーヒーばかりじゃ、身体に悪いぞ」

「夕ご飯を一緒に食べて頂けますか？」

「そうしよう。その後で俺は、諏訪に向かうつもりなんだ」

「わたしもご一緒していいですか？」

「社長には連絡したのか？君から連絡が無いって言っていたぞ」

「これから連絡します。明日はあなたに同行させて頂くことも……
そうしてもいいですか？」

「うん、俺は構わないが、社長の許可を得てからな」

カフェを出ると康子は直ぐに数馬に連絡を入れた。それからの康子はあらゆる縛りから完全に解放されたかの様だった。ふたりは5時45分発のバスで一旦新横浜駅に出た。バスを降りると康子はいつの間にか賢の左手にしっかり自分の右手を組んで賢に身体を擦り寄せるようにして歩き始めた。ふたりは下諏訪までの切符を買ってしまうと、駅弁の店を覗いて歩き、康子の気に入った「浜グルメ」という名前の駅弁を買った。横浜線に乗ると空席が無かった。途中停車駅で1席空いても康子は座ろうとしなかった。長津田で2席分空いたとき康子は賢を促して一緒に座った。八王子には7時半近くに着いた。乗り換えに時間がなかったので、ふたりは走った。賢は康子の手を引いて走った。康子はハイヒールを履いていたので、走りにくそうだった。賢は康子を気遣って、何度も振り返った。康子は賢のそんな行為が嬉しくて、胸が踊った。ふたりは午後7時35分発の梓18号に飛び乗った。下諏訪まで2時間ほど掛かる。康子のはじめて賢の優しさを独り占めにできると思った。走ったことで心臓は激しく脈打っていたが、電車が走り始めて、呼吸が楽になってきても胸の鼓動は収まらない。喜びに胸がときめいていた。電車が走り始めると、ふたりは弁当と茶を取り出した。

「わたし、こんな風に旅できたらいいな」

「いつだってできるよ。意識の問題さ。俺の中にはいつも君が居るよ」

「私だけじゃないでしょう？大勢の女性が居るんでしょう？」

「世界中があるって言った方がいいね。女も、男も、そして、何より大自然がある。それは君だって同じことだよ」

エビのムニエルを少し口にすると、上目遣いに賢を見詰めて康子は言った。

「わたしね・・・もしあなたが戻って来てくれなかったら、死のうと思っていたの。でも、あなたは戻って来てくれた。必ず戻って来てくれるって信じていたわ」

「康子、もっと心を解放させて自由になった方がいいよ」

「ううん、解放なんてしない。あなたのことだけしか考えられないんだもの」

賢は返す言葉がなかった。暫く駅弁に集中してから、箸を休めて言った。

「ホテルだけど、駅で見つけられるかな？夜だからな」

「大丈夫よ。わたし、予約してありますから」

「えっ？だって、俺がいつ戻るかだって分からないのに、どうして？」

「さっきも言ったけど、わたし決めていたんです。あなたに附いて諏訪まで行くこと。湖の畔にあるようです。ホテルの人、夜は湖面に写った光の影がとっても綺麗だって言っていました。湖に面したお部屋をとっておいてくれるって。お風呂からも湖が見えるんですって」

諏訪はしんと冷え込んでいて、雪がちらついていた。ふたりがホテルに着いたのは10時半を回った頃だった。ホテルはあまり立派な建て付けではなかった。フロントにも人影が無く、呼び鈴で呼び出して、漸く受付係が姿を現した。康子が予約してあると言うと、受付は康子にキーを渡してよこした。

「朝食付きで伺っておりますが、よろしいですか？」

「ええ、結構です」

「お部屋は5階です。お風呂はいつでもお入りになれます。12時までには、奥様が大人風呂、旦那様が岩風呂になっております。翌朝は男女が入れ替えになります」

部屋は1部屋しか予約されていなかった。賢はもう一部屋確保できないか聞いた。空き部屋は十分にあるようだった。康子は真剣な眼差しで賢の方をじっと見詰めている。受付係は直ぐにもう一つの鉤を賢に渡してよこした。康子は唇を噛みしめていたが、賢が鍵を受け取ると直ぐに賢

の左手に自分の右腕を絡めた。ふたりはエレベータで5階まで上がった。康子は部屋の前まで賢の腕を放さなかった。先ず康子の部屋があった。

「じゃ、明日の朝……」

「お風呂の後で、お部屋に伺ってもいいですか？」

「もう遅いじゃないか、それに……」

「やっとふたりだけに……」

「う、うん、分かった。じゃ後で」

康子が部屋の中に入るのを待ってから、賢は自分の部屋に向かった。賢の部屋は隣だった。部屋に入ると、暖かいぬくもりが身体を包み込んだ。二つのベッドが狭い部屋一杯に置かれている。賢は窓のカーテンを開けた。暗闇で湖面は殆ど見えない。遠方の灯りが微かに瞬いている。賢は浴衣に着替えて、浴室に向かった。岩風呂の湯船はそれほど大きくなかった。岩の上の立て札に源泉と書いてある。掛け流しの湯が湯気を立てて流れ落ちていた。康子の意識が絡み付いているように感じる。賢はいつものように逆のプロセスでこの日の省察を行った。朝にまで遡ると、やはり康子の心が解放されていないことがはっきりと分かった。康子の一途な愛は情に凌駕されている。賢は康子が自分の愛で満たされていないことに気付いた。これまで康子に強く意識を向けることは殆どなかった。今日は康子に愛の意念を集中しようと思った。賢は湯船の中で瞑想状態に入った。康子の姿が現前した。康子は髪を洗っている。白い美しい肌がまぶしい。康子の鼻歌が聞こえてくる。まるで電子音のような響きだ。最近流行している、長い青い髪をしたバーチャルドールの歌のようだ。

「わたしが生まれたのは、日差しの強い夏の日。焼けるような太陽の光がわたしに当たって、まぶしくて目が開いていられない。わたしは手から生まれた。お父さんの温かい手、わたしが生まれたとき、お父さんはわたしを見詰めて言った。おまえには永遠の命があるんだよ。わたしは生まれたときから大人だった。友達は赤ちゃんから大きくなったのに、わたしは生まれたときから大人だった。お母さんを知らない。お父さんが言った。おまえはみんなに愛される。おまえはみんなを愛せる。おま

えは壊れない、心も、身体も永遠に。おまえには大勢の愛する人ができる。だけど、わたしはひとりぼっち。お父さんはわたしを作った。大人のわたしを作った。わたしはお母さんを知らない。わたしはたった一人の人を愛して、その人と生きてゆきたい。わたしの命は永遠でなくてもかまわない。わたしを愛するひとと一緒に、この人生を生きることができれば、わたしは永遠の命も要らない」

康子の声は金属音のように響いていた。賢は上手いものだと思った。康子はバーチャルドールの歌を唄い終わると、髪を濯いで湯船に浸かった。康子の瞳がこっちを向いている。康子と視線が合った。康子は自分を見詰めている。康子の心の目だ。

賢が身体を拭い、浴衣を着て脱衣所から出ると、康子が外で待っていた。

「康子、どうして、俺が後から出てくるのが分かったんだ？」

「なぜかしら、当ててください」

「まさか、俺のことが透視できるわけじゃ……」

「できるわよ、あなたの身体は筋肉もりもり……というのは冗談よ。だって、あなたが、わたしに待っているように言ったでしょう？一緒に部屋に戻ろうって」

「言ったかな？」

康子は賢の左手を握った。康子の洗い髪のおいが賢の鼻をくすぐった。賢は康子の手をふりほどいて、肩に手を掛けた。肩を抱き寄せながら歩き始めた。ふたりは恋人同志になった。康子は無口になったが、康子の吐く息の音が賢にはよく分かる。誰も居ない廊下を歩き、エレベータに乗り、部屋に向かった。ふたりは康子の部屋の前を素通りして、賢の部屋に入った。

賢は部屋の鍵を掛けるとじっと立っている康子を抱き寄せ、口づけをした。康子は目を瞑り、賢の背に手を回した。ふたりはその場で暫くの間激しい口づけを交わした。賢は康子を抱くようにしてベッドに行き、立ったまま康子の浴衣の帯を解いた。康子の身体は均整が取れていて雪のように白く美しかった。賢は自分も浴衣を脱ぎ捨てた。賢の身体は傷だらけだ。部屋の暖かさがふたりを包み込んでいる。賢は康子を愛撫した。

康子の吐息は次第に荒くなり、遂に膝が折れた。賢は康子をベッドに倒し、愛撫を続けた。

「わたしは幸せです。もう、死んでもあなたから離れません」

賢は康子の思考が消えるまで愛撫しようと思った。そして、そう考える自分も思考が残っていることを自覚した。康子が喘ぎ始めたとき、賢は康子に入った。康子の身体は波打ち、悲鳴のようなため息を吐いた。康子の手がシーツを掴んで引き寄せる。賢は激しく動いた。達しそうになると動きを止め、両腕を伸ばして、指先に力を入れて意識をそこに集中させた。それで臨界を脱することができた。少ししてまた激しく動く、そして止める。その繰り返しをしていると、康子の呼吸が激しくなって、身体がぶるぶると振動し始め、「あーっ」と声を上げて、康子の意識は無くなった。賢はその様子をじっと見ていた。やがて康子の意識が戻ると、賢は再び激しく動き、絶頂の一步手前で動きを止め、峠を下りた。康子は再び絶頂に達した。康子の声は微かに漏れただけだった。再び意識が戻ると、康子は賢にしがみついた。もうこの世に賢しか存在しなくなっていた。

「あ、あ、あ、あなた」

「康子、一つになるよ。俺と一つになっていると意識しろよいいな」

賢は再び激しく動いた。康子は必死に一つになろうと意識していたが、あまりの恍惚感に、直ぐに達してしまった。その瞬間に意識が無くなった。3回目に達すると、康子の意識はなかなか戻らなかった。康子には愛する賢に抱かれている自分が見えた。宇宙空間に自分と賢が交わっている姿が見えた。ふたりの姿が溶けていって、一つの大きな球に変わった。球が白く輝いている。球は宇宙空間に浮いていた。自分がその球だということが分かる。自分の中に賢が居る。そして、自分も賢の中に居るという意識だけが残っている。妙な感覚だった。宇宙空間は無限に広く、そこは暗闇ではなく、明るい世界だった。今まで感じたこのとのない、脈動する至福の感覚が全身を覆っている。このまま永遠に消えてしまいたいと思った。その瞬間、意識がベッドの上の自分の身体に戻った。まだ賢が自分の中に入っている。康子はあまりの恍惚感に涙が流れた。

涙は止まることを知らない。

「康子、痛いのか？」

康子は首を横に振って、賢にかじりついた。

全身が痺れている。手足に力が入らない。賢が動こうとしたとき康子は必死になって賢の背中に廻した手に力を込めて賢を引き戻した。

「このままでいて。ずっとこのままでいてください」

賢は達することを押さえ、臨界に近い状態をずっと維持していた。賢はしがみつくと康子の中で再びゆっくり動き始めた。康子の身体は直ぐに小刻みに振動しはじめた。その夜、康子は10回以上意識を失った。何回かも覚えていない。朝、康子はもう自分が自分でないと感じていた。賢が康子から出た後も自分の中に賢を感じていた。賢は康子の額にそっと口づけしてベッドを降りた。

朝食はロビー横のレストランでふたり向き合って摂った。康子の身体にはまだ昨夜の余韻が残っていて、ジーンとする感覚が手足に響いていた。康子は顔を上げて賢を観ることができなかった。喜びと、恥ずかしさが入り交じった満たされた心が、賢の側にいることを受け止めるだけで精一杯だった。賢の方に視線を向けると、あまりのまぶしさに目を開けていられなかった。

チェックアウトを済ませ、ホテルのエントランスを出たとき、ふたりは10人ばかりの警察官に取り囲まれた。パトカーが5台ほど停まっている。

「内観賢だな、おまえに逮捕状が出ている」

年配の警察官が賢に向かって1枚の紙切れを見せながら言った。康子の顔色がみるみる蒼白になった。

「ち、違うんです。彼は違います」

「いや、全て調査済みだ。言いたいことがあれば署で聞こう」

警察官は賢の両手に手錠を掛け、小突くように賢をせき立てて、一番近くに停めてあるパトカーに連行した。賢は抵抗しなかった。

「止めてください、違うんです。彼は違います」

泣き叫ぶ康子を残して、パトカーがサイレンを鳴らしながら立ち去った。

ホテルの前には沢山の人だかりができていた。康子は泣き叫んでいる。「だれか、彼を助けてください。あの優しい、内観賢さんを助けてください。みんな、知っているでしょう。あの優しい賢さんが悪いことをするわけがありません。助けてください。えーんえーん」泣きわめく康子を一人残して野次馬はあっという間にその場を立ち去ってしまった。

「えーん、えーん、だれか賢さんを助けて・・・」

賢は諏訪警察署の2階にある取調室に連行された。狭い部屋だった。中央に机が置いてあり、その周囲に4つの椅子、部屋の角にサイドデスクと1つの椅子が置かれている。サイドデスクの上にはラップトップパソコンとインクジェットプリンタが載せられていた。賢は手錠を外され、中央の机の前の椅子に掛けるように言われた。腰を降ろすと、先ほどの年長の警察官と二人の若い警察官、それに女性の警察官が入って来て、年長の警察官が賢と向かい合って座り、若い警察官がそれぞれ賢のはす向かいに座った。女性の警察官はサイドデスクの前の椅子に座りパソコンを開いた。年配の警察官が言った。

「まず、身元を確認する。おまえは内観賢に違いないな？」

「はい、内観賢です。一体、罪状は何ですか？」

「身に覚えが無いと言うのか？」

賢は黙っていた。警察官は先ほど逮捕されるときに見せた逮捕状を広げて読み上げるように淡々と話した。女性の警察官がキーボードを打ち始めた。

「殺人未遂罪、銃刀法違反罪、器物損壊罪、猥褻罪、婦女暴行罪、誘拐罪、全部で6つの罪だ。おまえが人命救助などの慈善行為を行っている事はよく分かっている。しかし、それが偽善的な行為である事が暴露されたわけだ。自分で分かっていると思うが、詳しい説明が必要か？」

「よく分かりませんので、ご説明頂けますか？」

「いいだろう。まず、殺人未遂罪だが、おまえはインドのカルカッタのビルに爆弾を仕掛けることを指示しただろう。それはあのビルのオーナー

一、ハーレムの主を殺そうとしたことを狙った行為だという証言をしている者がいる。幸い死者は無かったが、多くの人たちに多大な損害を与えた。何か質問はあるか？」

「いいえ」

「この件について、罪状を認めるか？」

「いいえ」

「分かった。次は銃刀法違反罪だ。インドの爆破の後で、徒党を組んだ無頼漢が爆破場所の襲撃を行ったが、それもおまえの指示だろう。その上、奴らに銃や刃物を供与しただろう。あるいは間接的に奴らに武器が供与されたのかも知れないが。この件に質問はあるか？」

「いいえ」

「武器供与の罪は認めるか？」

「いいえ」

「まあ、その事は調べれば分かることだ。次は器物損壊罪だ。これはそのものずばり、爆発によるビルの破壊だ。この件について質問はあるか？」

「いいえ」

「それでは、このことについては認めるか？」

「・・・・・・・・」

「黙秘か、まあ、いいだろう。ここからは別件になる。猥褻罪と婦女暴行罪だおまえは生島麻子と関係を持っただろう。おまえが麻子の元夫、中川恭一の留守の間に中川の家に入り込み、妻の麻子に対して猥褻行為を行い、麻子を手込めにしたと中川恭一が供述している。中川恭一は自分が麻子を殺すことになったのは、おまえが麻子をつけ回し、麻子と関係を持ち続けたことに対して、ついカッとなったためだと供述した。どうだ、間違いないだろう」

「・・・・・・・・」

「おまえは麻子以外にも、複数の女性と関係を持っていて、同じ時期に別の女性を手込めにしていたという報告もある」

「・・・・・・・・」

「どうだ、ずばりだろう。まあ、黙秘することも自由だが、その事で不利になることもあることを承知しておくことだ……それから、もっと重い罪がある。誘拐罪だ。おまえは以前勤務していた東領製作所の社長令嬢をたぶらかし、彼女を海外に連れ出し、そのまま日本に戻れなくしてしまった。東領製作所の社長から、お前の行為はご令嬢の誘拐行為に当たるとの訴えがあった。警察もその確証を得るべく追跡調査を行って、彼女がアフリカのナイロビで消えてしまったところまで追跡したが、その後の足跡は確認できなかった。お前がどこかに幽閉しているか、または売り飛ばしたのではないかとの嫌疑が掛かっている。詳細については今後の調査に委ねられる。この件については異議もあるだろうが、今はこれらの件について詳細な調書をとることはしない。順次調べさせてもらう」

「……………」

賢はただ黙って聞いていた。年配の刑事が言った。

「どうだ、これだけの罪状を同時に突きつけられる犯罪者もそうざらにはいない。反論の余地は無いだろう」

賢はただ一言言った。

「全く違います」

女性の警察官がプリンターで2枚の用紙を印刷した。それを年長の警察官に渡すと、年長の警察官がそれを読み上げた。それはこれまで述べられてきた罪状について、賢の受け答えがまとめられた内容だった。警察官は賢にペンを渡し、内容に相違が無ければサインをするように言った。賢が全てを否認したと書かれている。賢はサインを受け入れなかった。年配の警察官がいきり立って、怒鳴ったりすかしたりしたが、賢にはそれらの声がカラスの鳴き声ほどにしか聞こえなかった。午前中の取り調べはそこまでだった。

「最後に独禁法違反罪だが、これはここの管轄じゃないので、後で公正取引委員会の方から説明してもらう」

一旦警察官が退室すると3人の若い背広姿の男達が部屋に入って来た。賢はそれらの男達が警察官ではないことが直ぐに分かった。男達が椅子

に座ると、賢と向き合っ座った男が言った。

「我々は公正取引委員会の者です。あなたの会社が独禁法に違反しているという申告があったので連絡手続きに来ました。本来刑事・民事事件とは切り離さなくてはならないのですが、あなたが逮捕される状態にある事を知って、急遽こちらの警察に来署しました。今回の措置は異例の措置です」

公正取引委員会の若い男達は、申告のあったことを伝達するために来署したのだった。賢が留置所に勾留されては審査が行えなくなる危険性があるための緊急処置なのだ。若い男は言った。

「内観さんの会社内観システムズはオーラ・ビジョン・システムという製品と物質転送機という製品を販売していますが、会社のカスタマー・サポート部門が、自社製品に類似した他社製品を閉め出すような、追跡行為を行っているとの訴えがありました。あなたの会社は販売先の顧客の動きを追跡し、他社が類似の製品を販売しようとしたときに、それを阻止しようとして、開発行為を妨害しているという内容です。それと、製造部門は部品納入業者に対して、他の製品にも使用できると思われる部品を他社に供給しないという誓約書を取り付けているという訴えもあります。公正取引委員会としては未だに他社の類似製品の販売がないことを不審に思い、調査を開始していましたが、審判手続きに移れるだけの証拠が揃いつつあります。実際あなたの会社の製品は、他社が何処も製造できないため市場占有率100パーセントです。まだ申告があった段階なので、委員会が審査請求をするかどうかははっきりしません。違反していた場合、排除勧告か課徴金処置が行われます。最悪の場合、課徴金請求と製造・販売の差し止めが同時に行われる可能性もあります。これらの訴えに異論があれば異議申し立てを行ってください」

賢は頷いた。男達はそれだけ言うと席を立ち、部屋を出て行った。少しして、先ほどの若い警察官がビニール袋に入った弁当を持参した。賢の前に唐揚げと漬け物、かまぼこの入った弁当とペットボトルの茶が出された。あまり食欲が無かったが、警察官が執拗に勧めるので賢は仕方なく指示に従った。弁当を食べ終わるまで一人の警察官が同席していた。

昼食後は別室に移動するようだった。若い警察官に連行されて取調室を出たとき、賢は階下で泣きわめいている康子の声を耳にしたような気がした。賢は警察署の入り口付近を透視した。受付の前で康子が発狂したかのように暴れ、婦人警官に取り押さえられているようだ。もがきながら大声でわめき、泣き叫んでいる。賢は康子に向けて愛の念を送り、意識を鎮めるように働き掛けた。少しして、康子の声は聞こえなくなった。賢は別室に連行された。身体検査を強要され、先ず、ブリーフ一枚にさせられてから、身長と体重を測定され、身体の隅々までチェックされた。賢の身体には各所に大きな手術の傷跡がある。検査を担当した若い警察官は、賢の傷が気になるようで、できるだけ傷口に触れないように神経を使っているようだった。

「沢山の傷があるようだが、手術の跡だな。札幌署からお前が最近事故に遭ったということは聞いている。酷く痛む箇所はあるか？具合の悪い箇所は？」

「いいえ」

一通りの身体検査を終えると、正面・側面・斜面の3方向から写真撮影され、続いて指紋採取が行われた。指先をフラットベッドスキャナの読み取り面のような部分に載せるだけで自動的に両手の全指と掌の紋が採取された。これで賢の肉体的な特徴が警察のデータベースに登録された。賢は「試行サイトで行っている i d 情報の取得みたいだ。試行サイトでも、最初の段階でこれらのデータを採取した方が良いかも知れない。そうだ、できるだけ早く試行サイトの進捗状況を確認しよう」と思った。身体検査を終えると賢は再び若い警察官に連れられて取調室に戻った。取調室では所持品の確認が行われた。逮捕されたとき賢が持参していた出張用の鞆が運ばれてきて、中を開けられ、ノートやペンなど1点1点確認されながら書類に記載された。ベルトやネクタイ、靴紐など紐の類いは全て外され、靴はそこでサンダルに履き替えさせられた。サンダルの上には397という数字の番号の書いてある粘着テープが貼り付けられている。賢はこれがここでの自分のIDナンバーなのだと思った。留置所も合理的にできていると思った。所持品の確認が終わると、少し

して、別の警察官が長い青い紐を持って部屋に入って来た。その警察官は賢に手錠を掛け、腰に紐を巻き付け、それを両手の手錠の間の鎖に括り付けた。紐を持って来た警察官はその紐を引いて賢を取調室から廊下に引き出した。手首の手錠がずっしりと重く感じられる。廊下の突き当たりに頑丈そうな鉄格子の扉が見える。警察官は鉄格子の扉の前まで腰紐を握って賢を引いてゆくと、横にあるインターホンを押した。

中から留置担当と思われる男が出てきた。鉄格子の扉がギーッと音を立てて開けられた。警察官は留置担当に青い腰紐の端を渡ししながら、機械仕掛けの人形のように言った。

「男397番を1名渡します」

「男397番を受け取りました」

留置担当はまるで牛や豚を受け取る屠殺場の処理係のように腰紐を受け取ると、鉄格子の扉を再びギーッと音を立てて閉めた。冷たく、感情の無いやりとりだ。賢は青い腰紐を引いて留置所の中に入れられた。通路の両側に鉄格子の部屋が連なっている。照明はあっても、暗く、冷たい世界だ。

「男が1名通ります」

監視の大声が留置所の通路に響く。賢はふと、梓の父親が話してくれた養豚の出荷をするときの話を思い出した。

「豚は自分が屠殺場に連れて行かれることを本能的に知っているんだ。それまで可愛がってきた豚に別れの言葉を掛け、飼育所から引っ張って来るとき、豚は悲しそうな目で僕の顔を見詰める。トラックの荷台に豚を乗せるとき豚は、動こうとしない。無理矢理尻を押すと、ヴィーヴィーと悲しそうな声で泣き、涙を流す。その時以来、僕は豚が食えなくなってしまった。とんかつなどを目にする、涙が流れてきて、箸を持つ気にもなれない。「俺はなんて残酷なんだろう！」って思うんだ。この可愛い豚を殺してまで、本当に俺に生きている価値があるのだろうかと思ってしまう」

「この者達は養豚を営む者でも持っている僅かばかりの感傷の心すら持っていない。青い腰紐を引いて渡した容疑者は死刑に処せられるか

も知れないというのに。これからは人間としての扱を受けなくなるの
だろう」

賢はそう思った。

賢が逮捕されたことは、落ち着きを取り戻した康子から直ぐに数馬に伝えられ、数馬から急いで梓に伝えられた。由仁の家は、既に公正取引委員会の立ち入り調査を受けていた。委員会の人間が証拠資料と言っているいろいろなものを持ち去ったばかりだった。梓は慌てなかった。梓は賢に連絡を入れようとしたが、賢の所在が分からずに途方に暮れていたもので、数馬からの連絡を受け、賢が何処に居るのかがはっきり分かったことで安心したことも事実だ。数馬に保釈金を積んで直ぐに賢を自由の身にするように依頼した。梓は「どうせ、間違いに決まっている」と勝手に決め込んでいた。梓は原と愛子に賢が逮捕されたことを伝えた。原は覚悟を決めていたかのように落ち着いていた。愛子は電話口で、おろおろして涙を流している様子がはっきり分かった。直ぐに学校を早退すると言った。数馬は経理部長に直接金の工面を指示し、保釈について顧問弁護士に相談した。弁護士はとりあえず賢の意志を確かめる必要があると言った。先ず弁護士が長野県警に赴いて事情を聞くことになった。賢のこれまでの慈善行為が考慮されたことと、賢がまだ自動車事故から回復したばかりの身体であること、そして、全ての訴状について、確定的な物証が無いと言う理由で、身内の接見は認められた。梓は直ぐに面会したいと弁護士に相談したが、それを聞いた数馬から電話が掛かり、出産が近いから飛行機に乗ることは控えた方が良いと言われ、梓は一時ジレンマに陥ってしまった。それでも梓はどうしても賢に会わなくてはならなかった。原のサジェスションで梓は航空会社に相談した。航空会社のVIPサービス係は柔らかい口調で言った。

「何時もご利用戴きまして、ありがとうございます。ファーストクラスをご利用頂ければ、安全にお連れ致します。お体のご負担にならないよう、振動を最小限に抑えるようなクッションもご用意させて頂きます」梓は、11時の便で原と共に東京に直行することにした。帰宅途中の愛

子から、自分も一緒に行きたいと電話が入ったが、留守の間の電話対応が必要なので家に残るように告げ、二人は直ぐに空港に向かった。

「田辺さん、これは畏ですよ。誰が仕組んだかはおおよそ想像できますけど、今は下手に動かない方がいいと思います。相手がどんなトリックを仕掛けてくるか分かりませんからね。祐子さんの救助の為の行為を除いて罪になることは何ともありませんから、確定的な証拠があるはずはありません。検察は焦っていると思います。逆にこちらが確実に反証できる物的証拠を提示するのが最良の策だと思います」

梓も同意見だった。弁護士による賢の過去の善行の説明が考慮され、弁護士が同行することを条件に、内縁の妻である梓の接見も許された。数馬と原は面会が許されず、受付横の待合室で待つことになった。梓は賢の姿を見ると、涙ぐんだ。出がけに賢の寝室のチェストから、賢が寒くないようにとマフラー、手袋、セーター、厚手の靴下などできるだけ沢山の衣類を取り出してバッグに詰め込んだ。空港ではウナギの弁当を買って持参してきた。賢は梓に向かって会釈し、弁護士に頭を下げた。

「梓、来てくれたのか。ありがとう。赤ちゃんは大丈夫か？」

梓はハンカチで涙を拭いながら言った。

「ファーストクラスで来たから大丈夫よ。保釈金は7億円だそうよ。樋口社長が今用意しているわ。でも、あなたは どうしてこれほど苦しめられなくてはならないのでしょうか。一体、どうしてこんなことになったのかしら？」

「俺自身はそんなに、苦しくないよ。だからみんなにもあまり気をもまないように言ってくれ。君たちが俺のために苦しむのがかえって辛い。今のこの世界では、俺の生き方がそのまま受け入れられないことは十分承知しているよ。それから保釈などは考えなくていいぞ。そんな金があったら、その分困窮者救済に廻してくれよ。それより、できるだけ諏訪のプロジェクトの推進に影響が出ないようにしてくれ。俺のことに時間を割くと、それだけ全体の進捗が悪くなる。自分自身のことは自分の意志でどうにでもなる。いま、もっと大切なことはOVSとMTSが独禁法に違反していないことを立証することだ。あれが活動源だからな。原

さんと相談して具体的な立証方法を考えてくれないか？」

「分かりました。でも、あなた、この混迷の世界を救い、生きる希望を与えてくれる世界に変えようとしているあなたが、投獄されるなんてことは絶対あってはならないことです。敵はあなたを陥れようとしているのです。ここで悪の力に負けてはいけません。ギータにもあるように正義の為に敢然と戦うべきだと思います」

「はっはっは・・・、ギータか。あれは相手がアルジュナだったからクリシュナが勇気を持つように諭しただけのことだ。正義とか悪とかという2極分離した考えが、センタリングを難しくするんだ。激しく対抗するのではなくて、抱き参らせることの方がよほど重要だ。少し時間は掛かるかも知れないがな。梓、君には苦勞を掛けるけど、このまま経過を観察していて欲しい。一応弁護士さんと相談して、この社会のルールに従って対処してくれ」

賢は弁護士の方を伺った。弁護士は頷いた。

「そうですね。我々もそれが常套手段だと思います」

梓も賢の意志を尊重して、一応頷いて見せたが、何とかして賢が不起訴で無罪釈放されるようにするしかないと思った。その事を弁護士に話すと、弁護士も梓の意見に賛成した。

「起訴される前に、確たる証拠を持って反証さえできれば釈放されるでしょう」

賢との面会を終えると、梓は受付横の待合所で待機している数馬と原のところに向かった。

「樋口社長、内観社長は保釈の必要は無いと言っています。それより、できるだけ早く社の製品が独禁法違反に該当しないことを証明することが重要だと。わたしは内観社長が全て冤罪だということを証明するために全力で証拠を探します」

これまで無口でいた原が言った。

「僕が独禁法の方は処理します」

梓は閃いたように目を見張って言った。

「そう、それがいいわ。よく分かっている人が、手分けして証拠を提出

すれば・・・わたし、猥褻と婦女暴行の冤罪証明を担当するわ」
数馬が言った。

「残るは殺人未遂罪、銃刀法違反罪、器物損壊罪、それと誘拐罪だな。これは相手がインドだからそう簡単にはいかない。おれはこの事件についてさっき聞いたばかりから、詳細が分からないし・・・」

「誘拐罪は分かるでしょう。亜希子さんを誘拐したという事実が無いことを証明すればいいと思います」

「よし、誘拐罪は俺が対応しよう。あとは弁護士さんの指導を戴いて全員で証拠集めをすることにしたらどうだろうか？」

顧問弁護士は協力者達の力強い言葉に勇気付けられた。

次の日にアメリカから賢の両親が駆けつけ賢に面会した。母は涙を流した。父は泰然としていた。

「*****」(ママ、心配掛けてごめん。だけど、僕は大丈夫だから。弁護士さんもいるし、仲間も無実の証拠を提出してくれるって言うてるから心配要らないよ)

母は涙を目に一杯溜めていて、言葉が出なかった。

「賢、俺たちは親だぞ。心配しない訳がないだろう。一体どうしてこんなことになったのだ。まだあの大怪我が治り切っていないだろうに」

「僕の心が安定していなかったからだと思うよ、ダディ。でも、本当に心配しないで、何とか解決するから」

両親は翌日も面会に来たが、弁護士から、検察が起訴にまでもって行くのは難しいだろうという説明を受けて、様子を見ようということになり、病院の業務のために一旦帰国した。

賢は留置されることで自分だけの時間が確保できたことをむしろ歓迎していた。

留置所に収監されると、朝夕の掃除や、取り調べの時意外は自由時間だった。賢は透視を使って祐子達の挑戦がどのように展開しているかを注視し、同時に諏訪のプロジェクトの進捗状況も常に把握するように努めた。テレビや新聞でのニュースの報道があったためか、賢の無罪を信じ、釈放を要求するデモ隊が編成された。主催者は新世界秩序敷衍同盟と名

乗る新宗教組織の総裁漆畑篤という男で、これまでに何度も由仁の家を訪問したことのある男だった。賢に会長か、それがだめならせめて顧問になって欲しいと要請していたが賢はその都度、丁重に断ってきた。漆畑は賢の超能力に惹かれているようだった。組織を立ち上げると、次第にカリスマ性を発揮してきて、見る見る間に50万人を越える会員を集めてしまった。勧誘するときは、先ず自分がまるで慈善的な心に満ち溢れているかのような姿勢を見せ、さも賢の超能力が自分にも備わっているかのような誇張した説明を行った。会員になった者達はもともと賢を崇敬していたので、その教えを身に付けたとする漆畑の言動に惹き付けられて入会していた。その漆畑が1万人の会員を動員し、更にインターネットを通じて一般大衆に対して賢の行ってきた慈悲の行為をアピールし、検察の不当性を訴えて、デモへの参加を募ったため、諏訪大社上社本営駐車場前からスタートしたデモ隊の人数は5万人にも及んでいた。デモ隊はただプラカードを手にして歩くだけで、シュプレヒコールも街頭演説もしなかった。デモ行進は事前に申告されていたので、警察もそれを無視することができなかった。沢山の警察官がデモ隊を警護した。その整然としたデモ行進は各テレビ局に取り上げられた。賢が罪状を否認していたため検察の焦りは益々強くなった。

一番はじめに解消したのは独禁法違反だった。原の作成した異議申し立ての論駁書は一滴の水も漏れることのないほど、理路整然としていて、公正取引委員会も脱帽したほどだった。原は検察の示していた証拠の出所を直接訪問し、部下を使ってその論拠となっている全ての販売先に内観システムズからの直接フォローと情報隠蔽強要の事実が無いことを書面をもって承認してもらった。そして、内観システムズに納品している全部品メーカー、部品納入業者には他社への販売を規制した事実の無いことを証明してもらった。その上で、WEB上で、OVSとMTSについて基本概念と、ハードウェア構成、ソフトウェアのジェネラルフローを公開した。ただ、核心部分は絶対秘匿性を保つ必要があったため企業秘密部分として、ブラックボックス化した。この程度の秘匿部分はこの企業の製品にもあるはずである。原の指導による迅速な処置が効いて、

公正取引委員会に論駁書を提出すると、委員会は賢の独禁法違反の審判請求を取り下げた。

梓は愛子と相談して、賢の猥褻、婦女暴行罪が冤罪である事を証明した。中川の陳述が誤りである事を愛子が立証した。それは簡単だった。賢と麻子が共にいるところを中川は一度も目撃しておらず、それが想像に基づく陳述だと謂うことを愛子が立証したためだった。中川が目撃したと言った時間帯には愛子が麻子とふたりきりで過ごしていた。逆に愛子は賢と麻子がむつまじくしていた事実を何度も目にしていたので、その様子を中心にかなり詳細にわたって説明することと、テレビの生出演で麻子が話した賢への愛の言葉が決定的な証拠となり、反証の信憑性が一層高くなった。梓は検察側が何処で手に入れたのか、検挙の決め手になったとする、「賢が麻子の手を引っ張るようにして歩いている写真」は、猥褻行為や婦女暴行行為を立証するにはあまりにも不十分だと論駁した。もう一つの大きな勝利要因は、ある女性が賢に猥褻行為を強要されたことを理由に行った告訴が、その女性自身によって取り下げられことであった。その女性が「取り下げの理由は、告訴が賢に対する嫉妬心からの行為だった為で、自分の卑劣な行為を反省したため」と言ったことが警察から弁護士に説明された。その女性は匿名扱いになっていたが、賢が逮捕された翌日、その女性から警察に連絡が入ったとのことだった。これらの証拠資料と論駁書により、検察による猥褻罪と婦女暴行罪の起訴は取りやめになった。

数馬の担当した藤代亜希子の誘拐が事実無根である事を証明することは至難の業だった。この告訴が直接ではないにしろ、藤代夫妻の意志で行われたことは明らかだった。藤代肇は賢の3度目の海外出張の時、亜希子がアフリカに行こうとするのを止めてくれるように賢に働き掛けた。賢はそれを了承しておきながら、亜希子の行動を止めるどころか、たぶらかして海外にまで誘い出し、アフリカのどこかの国に亜希子を幽閉しているか、または売り飛ばした可能性があり、行方不明になっているというのが訴状の内容だった。

数馬は亜希子の亡骸が由仁にあるのはまずいと考えた。もし、由仁の家

の家宅捜索が行われれば、賢が絶体絶命の立場に立たされるのは明らかだった。数馬は急いで梓にその事を話した。しかし、梓は周りの人影を意識して

「もう置いていません」

とだけ応えた。数馬はそれを聞いて安心した。一旦由仁に戻った梓が中心となって、海外出張時の亜希子との会話の内容を明確にしていった。その言葉の何処にも誘拐の気配など無い。しかし、検察がそれを受け入れるはずは無かった。弁護士は亜希子の手紙を探して欲しいと梓に依頼した。2通の手紙が賢の寝室にある机の引き出しから出てきた。それは賢が亜希子の命を救い、亜希子が賢を慕っていたということを確認するものだった。弁護士は「かなり強い証拠品ですが、決定的証拠としては少し不足です。もう少し確証が持てるものがありますか」と言った。亜希子が日本を離れる頃の手紙がほしいと言った。それが祐子の元にある事は梓にも想像できたが、梓は、それを取り寄せることは祐子のアフリカ救済活動を邪魔することになると思った。弁護士はとりあえず現有の証拠と弁駁書だけで告訴の不当性を訴えることにした。検察がこの件を優先的に扱わなくなれば、多少時間稼ぎができるかと踏んでいた。罪状1件に対して拘留期間は23日だ。このままでは最長92日間拘留される危険性がある。弁護士は起訴される罪状の数を減らすことに心血を注いだ。

康子が差し入れの弁当や替えの下着などを持参して毎日必ず面会に来た。最初は弁護士同伴だったが、そのうち、単独での面会が許可された。康子は総務部長に対して、毎日賢とコンタクトを取るという名目で長期休暇の申請をし、許可を得ていた。康子は賢に会うたびに涙を流した。拘留から3日してから、康子は賢に自分の過ちを告白した。

「わたしが猥褻罪の告訴をしたのです。わたしの所為でこんなことになってしまって……」

康子の目から涙が止めどなく流れ落ちた。

「康子、君のせいじゃない。俺が悪かったんだよ。もっと早く君の気持ちを受け入れていれば良かった。君のように美しい女性は俺のように誰

でも直ぐに愛してしまう男ではなくて、たった一人の女性の為に生きる優しい男と添い遂げた方がいいとずっと思っていたからな。だけど、もう君は俺の心の中に入りこんでしまった。君のことは全て分かる」
康子は再び声を上げて泣き出した。

1週間が経過した。賢はその間、昼間は騒がしい外国人拘留者が夜半寝静まってからと、取り調べの無い昼間にバイロケーションを用いて、アフリカ向けの衛星ラジオ放送について、契約会社をフォローしたり、打ち合わせに参加したりしていた。留置所に残された方の肉体も、外部からの話し掛けに応答することはできたので、不審に思う者は無かった。国内では賢が逮捕されたことが知れ渡っていたので、賢が会議に姿を見せるたびに、会議出席者の何人かから質問を受けた。

「内観さん、保釈されたんですね。出張しても大丈夫なんですか？」

「それにしても、酷いことをする者もいるんですね。日本人で、内観さんが慈善活動をしていることを知らない人はいないと思うのに、妬みですかね？」

賢は何時も苦笑いをして誤魔化していた。バイロケーションを行うときは、必ず身体の片割れは、留置所のベッドの上に横になった状態で居た。南アフリカへのバイロケーションは真夜中に行ったので、誰も気付く者は無かったが、昼間賢がベッドに横になっていることがちょくちょくあるので、留置所の監視は、賢はどこか身体の具合が悪いのだと思い込んでいた。食事の時、監視が賢に質問することがあった。

「397番どこか具合が悪いのか？よく横になっているが・・・」

賢はその都度「大丈夫です」とだけ応えた。

賢は留置所の生活にも慣れてきて、狭い監獄の生活にもそれほど違和感を抱かなくなっていた。

「男が通ります」

ある日、監視の声に続いて、賢の部屋に一人の中年の男性が連行されてきた。頬がこけていて、小柄な暗い感じの男だった。何日も着替えてないような薄汚れた灰色のジャンパーと黒いパンツを履いている。男は手錠を外され、腰紐を解かれて部屋に入れられると、ズボンとジャンパー

を脱ぎ捨てて自分の布団の中に潜り込んでしまった。夕方近くになってようやく男は起き出した。少しして弁当が配給されると、賢は康子の持つて来てくれた寿司を男に差し出した。

「これ、食べていいですよ」

「・・・・・・・・」

「ぼくは、内観賢です。よろしくおねがいします」

「杉山俊太です。ありがとうございます。でも、お寿司なんて喉を通りませんから・・・・・・・・」

「嫌いなんですか？」

「いいえ、勿体なくて・・・・・・・・」

「誰も食べなければ、処分されてしまいます。どうぞ」

杉山は賢の差し出す寿司折りを遠慮がちに受け取った。

「僕は殺人未遂と器物損壊などの容疑です。あなたは何の容疑ですか？」

「窃盗と自殺教唆だと警察が言っていました。盗みは認めますが、他人（ひと）さまに自殺をさせようなどと思ったことは一度もありません」

「まあ、弁当を食べてから・・・・・・・・」

賢ははじめて配給の弁当を食べた。弁当からは美味しく作ろうという暖かい心は全く伝わってこない。身体に養分を供給するだけのものだ。2枚のたくあんの切れ端は、唯の塩漬けの大根だった。杉山は美味しそうに寿司を食べた。食べ終わると、空になった寿司折りを片付けながら言った。

「こんなに落ち着いて食事ができたのは久しぶりです」

毎日の取り調べは、同じことの反復や、強い言葉による自白誘導、情を煽るような言い回しなど、あの手この手で繰り返し行われた。時として、検察官の尋問を受けるために検察庁に連行されることもあった。賢はどんな手段で尋問を受けても、平然として、事実だけを淡々と返答していた。しかし、取り調べの最後に求められる署名には一切サインしなかった。

ある朝早く、久しぶりに祐子からテレパシーの連絡が入った。コンゴの大統領の反応が無いので、WEBにビデオ情報と手紙の内容を暴露する

という内容だった。コンゴ政府高官に対するレター、ビデオ攻撃は功を奏しているとのことだった。高官の中には慈善活動に名乗りを上げる者もぼつりぼつりと出てきた。保険省と社会省は省の再編を検討しはじめた。党の代表委員会でも国内の貧困対策が重要課題として取り上げられるようになった。その一方で、それらの動きを牽制するかのようになり、反対勢力の拡大が起きてきた。各地の警察の取り締まりが強化され、国軍による反乱軍への急襲の回数が多くなった。貧困問題を国会審議の議題にすべきという発言をしていたカナンガ出身の国会議員が自宅で何者かの銃撃を受けた。幸い議員や家族に怪我は無かったが、警察は緊急発動したにもかかわらず犯人を取り逃がしてしまった。また慈善活動を行っているNPO法人の事務所に手榴弾が投げ込まれたこともあった。これらが貧民救済活動への嫌がらせである事は明らかだった。

賢は祐子に衛星放送の進捗状況について「ラジオさえ用意できればいつでも放送を開始できる状態になっている」と伝えた。祐子もウグングから「フランス語、リンガラ語、コンゴ語、スワヒリ語の放送文言が用意できている」との連絡があったと賢に告げた。賢は「ラジオは間もなく試作品100台が完成するので、出来上がったら直ぐに持ってゆく。放送の開始もそれほど先の話ではない」と言った。試作品は先ず各アジトに配られ、試験放送を開始してアジト内での試聴を繰り返し、問題点を抽出することになった。

「問題はピグミーなどの原住民に対する放送なの。あなた、何かいいアイデアは無いかしら」

「ピグミーの人たちは、狩猟と採集で生活しているだろう。それが維持できるような保護区を設ける方向で進めたらどうだ。アメリカのリザベーション地域の考えだ。勿論その地域から出てはいけないというような縛りや、保護区を狭めて開拓を進めることなどは防がなくてはならない。それらの土地の売買を禁止するなどの措置が必要だと思うけどね。それと、放送する言語の中にピグミーの言葉も入れた方がいいな」

「そうね、検討してみるわ。ラジオの用意ができたら連絡してね」

祐子との通信を切ると、賢は杉山に目を移した。賢と目が合うと杉山は、どうやって持ち込んだのか、いじっていたサブリの小瓶の様な物を布団の中に隠し、小声で淡々と喋りはじめた。

「僕は信州地方ではナメクジ俊児と呼ばれていて、神出鬼没な盗賊で、盗んだものを貧困者に与えるという義賊的な行為を繰り返していたんですが、とうとう警察の罠にはめられて逮捕されてしまいました。ずいぶんいろいろな悪人達の金を盗みましたよ。始めたばかりの頃は留守宅に忍び込むことが大変でしたが、最近では盗むことより、それを心の正しい人たちに配ることの方がずっと難しくなっています。今の日本に必要なのはお金じゃなくて、心なんです。どんな貧乏人も、どんな金持ちも、みんな心が貧しいんです。喜びに満ちて生きている人になど滅多に出会いません。昔はお金を配ると、みんな感謝し、驚喜したのですがね・・・今は迷惑そうにする奴さえいるんだから嫌になります」

「それなら、窃盗を止めてしまうか、盗んだ金を自分で使えばいいのに」
「それじゃ、生きる意味もありゃしませんよ。それに、“悪銭身に附かず”ですからね」

「僕は、今諏訪でプロジェクトをやっています。お金の必要ない社会の試行サイトです」

「ええ、知っていますよ」

杉山は賢の近くに身を寄せて、小声で言った。

「本当はあなたに会いに来たんですよ。監視されていますからあまり話せませんがね」

賢は驚いた。留置されている目的の人間と同じ部屋に意図して拘留されるなんてことができるものなのだろうか、さすがはナメクジ俊児だと思った。

「僕は、いろは予言というのを信じていましてね。もうじき世界が大転換するらしいんです。あなたのことはずっと追っていましたよ。あなたがこの世界の仕組みを変えようとしていることも知っています。それにあの東海地震の時、あなたは倒壊した建物の中に潜り込んで人命救助をしていたでしょう。ありゃ、僕にはできない業なんです。何とかあの

業を教えていただきたいと思っていましてね。ちょっとぶしつけですが、
教えていただくわけにはいかないでしょうかね」

「いいですよ。できるかどうかはあなた次第ですけど、やり方は教えま
しょう」

賢は内観（ないかん）の方法、意識の集中の仕方を教え、集中した状態
を持続することの重要性、その集中を極めて強くすることを教え、自分
の出現したいところを具体的イメージに描いてそこに自分が存在する
ことを現実の物として認識することを教えた。あまりに簡単なので、杉
山は拍子抜けしたようだったが、それが非常に難しいことである事は、
少し試してみて、直ぐに理解できたようだった。

「一寸お願いがあるんですけど、僕が床に着いているときは、僕を起こ
さないでいて欲しいんですけど」

「分かりました。お安いで用です」

「ところでそのいろは予言と謂うのは、どんなことを教えているのです
か？」

「この世界がもうじき今のような物質的な世界じゃなくて、霊界と物質
界が混合したような世界になることを予言しています。そのためには大
多数の人間が身を清めなくてはならないと。そうしないと、世界中に大
災害が起きて、大半の人間が死んでしまい、心の清い人間だけが生き残
るか、あるいは死んでも次の世界で新しい時代を作る仕事に携わること
ができると言っているのです。それが僕の中ではマヤの予言と重なって、
2012年12月23日に天地のひっくり返るような大変動が起きる
と思っていたのです・・・心を清めなければならないと」

「そうですか、それで、あなたは悪人を懲らしめ、善人のために生きよ
うとしてきたのですね」

「まあ、そんなところですよ。でも、2012年12月23日に何も起こ
らなかったでしょう。一体どうしたことだろうと。いろは予言は本当の
こと言っているのだろうかと不安になっていて、そんな心の不安定な状
態でいたこともあって、とうとう、捕まってしまったんです」

「僕は、2012年12月23日この世の終わりの日の意味していると

ころは、物質的な破壊を意味していたのではないと考えています。物質文明は究極点まで至っていて、あとは人間の精神的なレベルがそれに合致すれば、世界が大転換するところまで来ていたと思うのです。物質文明はインターネットと電子技術です。そして素粒子論、宇宙論、これらが本来の人間の姿に立ち戻る素地を与えてくれたと思うのです。インターネットは人間が分離した存在ではないということを人々に知らせ、自分が意図しさえすれば、自分の考えが直ぐに全世界にまで伝わることを実際に証明しました。電子技術はそれを支えている基盤です。素粒子論は無量大と無限小が等しいことを証明し、存在の確定性は人間の意志に委ねられていることを見いだしました。宇宙論はインフレーションやビッグバンのモデルを描き出しました。もう、あとは人間の心のあり方次第でこの世界が変わるところに至っていたのだと思います。でも、世界は変わりませんでした。人の心が追い付かなかったからだと思います。生まれ変わりのある事についてさえもまだ、人々の中に確たる信念が出来上がっていないでしょう。自分自身が何者かが分かると、自分はもうこの世界で生きる意味が無くなり、世界が大変革を起こす。それはすなわち、それ以上の発展が無くなるからだということが、未だに大半の人たちに認識されていません。本来、あるとき人類の意識の変革が起きているはずだったのです。しかし、それによって現象の世界が消えるわけでも、宇宙が大爆発を起こすわけでもないと思います。ただ自己の真の存在がこの世界に映し出されなくなるということだと思うのです。結果として、それと同時に自己にとっての世界自体が映し出されなくなるということ、すなわち大変動で存在意義を失ったものが消滅するということの意味する訳です。それが全ての人に同時に起こることがないとすると、ある人の目には世界に壊滅的な出来事が起きているがごとく映るはずなのです。実際あの頃世界中で起きていた自然大変動は異常でしたから・・・今ではあの頃の状態とは異なった形で変化が起きてきているのです。特に精神面の変化が・・・」

「凄いですね、どうしてそのような洞察ができるのですか？」

「僕は、この世界の真の動きを観察し続けていますから、自然に理解で

きますよ」

賢は毎日面会に来る康子から仕事の進捗の報告を受け、必要な伝達事項を伝えた。康子は毎日自分で作った弁当を持参し差し入れた。康子の姿は日に日に輝きを増し、目映いばかりに美しくなっていた。

「いまのあなたは、わたしだけのもの」

康子は帰りがけによくそう言った。

梓は週に1度土曜日に面会に訪れ、ホテルに1泊して翌日もう一度面会に来てから由仁に戻った。もう出産も間近だったので、賢は梓に、無理して来ることのないように言ったが、梓は必ず来ると言って聞かなかった。梓の来る土曜日と日曜日には康子は姿を見せなかった。しかし翌日の月曜日には豪華な弁当と、身の回りのものを沢山持参して現れた。

賢は康子の差し入れてくれた弁当を杉山と分けて食べた。夕方になると監視が渡してよこす弁当は杉山が二人分受け取り、それを一度開封して賢から受け取った康子の差し入れ弁当の半分を綺麗に盛り付け直して、賢に戻してよこした。それが日課になった。

1ヶ月が経過した頃、アフリカでの衛星放送の試行が行われた。AFSAT社の衛星トランスポンダの確保が完了し、衛星通信開発工業株式会社によって既にコンゴ国内に簡易放送局が設置されていた。放送局は日本から担当者がキンサシャに出張し、そこで打ち合わせを行って、施工の手順と方法をウグングの指名したコンゴの技術者達に説明した。放送局の建設は、物質転送機を用いて事前に転送されていたセットアップ済みの機材を、コンゴの技術者が組み立てて設置したのだった。そういう訳で放送局が何処に設置されたのか、具体的な場所については、衛星通信開発工業株式会社の人間にも分からなかった。試験運転もスムーズにいった。試作ラジオ100台が原の手によって祐子の事務所に転送された。祐子はそのラジオを2、3台ずつウグングのよこしたリストに従ってコンゴ国内の各アジトに転送した。衛星ラジオで放送する内容も決まり、それぞれの言語に翻訳されCDに録音されたコンテンツが、新たにできた簡易放送局に渡された。先ず最初に放送されたのはアフリカで流

行しているポップ歌手の歌だった。あまり目立たないように流行歌を用いたのだった。試作ラジオのスイッチを入れると、ヒット曲のメドレーが聞こえてきて、2曲目と3曲目の間に女性戦闘士の話し声が挿入されていた。

「****」(愛するコンゴのみなさん、元気に頑張っていますか？アフリカの輝ける夜明けが近付いています。今日は我が祖国コンゴの美しい歌をお楽しみください)

ラジオから聞こえる音は澄んでいて、全く雑音が無い。彼女がまるで目の前で話しているように聞こえた。各アジトの男達は天国からの歌声を聞いたような気分になり、歓声を上げた。続いて流された民族音楽に合わせ、踊り出す者達さえいた。

賢は自分の視力が落ちてきていることに気付いた。遠くのものが見えにくくなっている。監視の顔も霞んで、はっきり認識できなくなった。杉山は心配した。

「内観さん、何か不便だったら僕に言ってください。布団の収納や掃除など僕が手伝います」

「ええ、ありがとうございます。だけど、どうしたと謂うんだろう。今までそれほど目を酷使した覚えはないんだけど……」

「内観さんは善行を行っているような方ですから、留置所みたいな酷い環境には適応できないんじゃないですか？」

「それはないと思うよ。身体は結構強いはずですからね。どこか内蔵が悪くなってきたのかも知れないな……」

賢は本心からそう思った。怪我をしたときに傷ついた肝臓の影響か、あるいはあの時に打った脊柱や腎臓が次第に衰弱した為かとも思ったが原因ははっきりしなかった。賢は自分の身体を内視した。傷口は全て問題なく塞がっていて、損傷を受けた内臓器官も正常に機能している。ただ全体的に機能が弱ってきているように感じる。賢は一つ一つの臓器の意識と語り合っていた。肝臓と腎臓が明らかに動きが激しく、特に解毒機能がフル回転で動いているようだった。賢は食べ物の所為かもしれ

ないと思った。監視がよこす弁当は味付けが濃く、微妙な味の変化などは感じようもないが、これまで特に異常を感じた記憶はない。食物に原因があるようにも思えなかった。50日を経過する頃には体力も弱ってきて、視力は極端に悪くなり、杉山の姿をはっきり捕らえることすらできなくなっていた。起床時には立ちくらみするようになった。賢はその事を監視に伝えた。監視は「暫く様子を見てみよう」と応えた。梓にも言った。梓は心配した。

「あなた、なぜもっと早くおっしゃってくださらなかったの？」

「疲れかと思っていたから……」

「これから直ぐに医師の手配をします」

梓は早々に面会を終えると直ぐに弁護士に連絡を入れ、弁護士を通して医師の受診を申し入れた。日曜日だったが、緊急に医師が診察を行うことになった。賢は警察指定の医師の診断を受けた。しかし、内蔵に異常は見られないとの所見だった。医師は精神的なストレスによる自律神経失調症だと判断し、精神安定剤を処方して引き上げて行った。梓は医師の診察の結果を聞いて安心し、市内の薬局で肝臓と腎臓に効くサプリメントを購入してきて差し入れた。梓は賢を気遣いながらも一旦由仁に引き返した。翌日からの監視は対応が悪くなった。賢が具合悪そうにしているあまり気にとめなくなった。それは賢が拘置された時からずっと、取り調べが無いときは布団の上に横になっていることが多かった為でもあった。賢は康子には何も話さなかった。それでなくても自分の過ちを悔い、自責の念に苛まれている康子をこれ以上苦しめたくなかった。この日、賢は康子と面会している最中に突然何も見えなくなってしまった。

「ああっ、気分が悪い……」

賢は面会室の椅子の上から転げ落ちてしまった。康子は仰天した。康子は面会室で泣きながら大騒ぎした。直ぐに監視がやって来て、床に倒れている賢を面会室から担ぎ出した。

賢はそのまま医務室に運ばれた。担当医が来たのは1時間後だった。担当医は賢の脈を取り、瞳孔の状態を確認してから、カテーテルを使って

尿を採取し、毒性の有無を検査した。賢の肉体の意識は亡くなっていたが、心臓は動いていた。賢は医務室のベッドの上で丸1日意識不明の状態であった。面会室で倒れたとき、意識は一時面会室の上空にあって室内で康子が泣き叫び、監視官が慌てて賢の身体を運び出してゆくところを眺めていたが、やがて暗いトンネルを抜けて光り輝く霊界に入る入り口で、またムクウに出会った。

「賢、まだ霊界に戻るの早い。今回は毒物にやられたようだな。まあ、今日いっぱいくらいは戻れないだろうから、亜希子に会ってゆくといい。亜希子は凄いぞ、既に100万を越える魂を導いている。人の魂は本来自分の力で軌道修正を行わなくてはならないような仕組みになっているのだが、既に大変革が始まっているので、そんな悠長なことは言っていられなくなった。この大変革で、次のプロセスに移れない魂が沢山いて、このままでは、新しい世界が最初の社会を構成して行くのに現在の時間感覚で1年以上掛かりそうなので、それを短縮するためには意識の目覚めた魂の数を2000万程度にまで増やす必要があるのだ。亜希子は必死になって霊界の魂を導いている」

「亜希子はどんなことをしているのですか？」

「1万人も収容できる大講堂に出掛けて、この世界が、お前の認識しているような世界である事を講演し、教えている。聴講したもの達も、普通は自分でこの世界の真の姿を認識しなくては、覚醒は起こらないのだが、不動の知識として魂の中に深く植え付けられれば、再誕の時に、その知識の影響を受け、これまでとは違う意識で生まれることができ、新しい時代の時空間に存在できる。お前も知っての通り、その新しい時空間が新しい世界なのだ。賢、亜希子に会って、励ましてあげなさい」
賢はムクウに礼を言うと、意識を亜希子に向けた。亜希子からテレパシーが返ってきた。

「あなた、あなたなのですね。今講演の最中ですから、わたしの家に行って少し待っていてください」

賢は亜希子の家に直行せずに、少し寄り道をすることにした。賢は意識を麻子に向けた。直ぐに麻子の存在を感じる光り輝く空間に出た。自分

の身体が亡くなってしまったように軽く、周囲にある白い建物の雰囲気にも希薄な感覚を覚える。どうやら、そこは亜紀子の家のある時空間より次元が2段階くらい高いようである。前方から光の球が近付いて来た。賢の前まで来ると光の球はパッときらめいて白い布で身を包んだ麻子が姿を現した。

「あなた、もうこちらにいらっしゃったのですか？」

「いや、多分、もう一度現象界に戻ることになる。麻子、ここではどうしているんだ？」

「わたしは、あなたへの愛を、全ての存在に対する愛に変えることができました。ここに来たばかりの頃は、あなたから戴いた愛があまりに大きかったので、自分が愛で満たされているのが分かりました。そして、次第に自分から迸り出る愛であらゆるものを包み込むことが出来るようになりました。不思議なのですが、今では地上であなたを愛していたときの心の高まりと同じ高揚感を、あらゆるものに対して感じるのです。だから、わたしは、いつも至福の中に居て、こんなに幸せでいいのかと思っています」

いつの間にか辺りは美しい草原に変わり、カワセミのような青い鳥が木の小枝に留まり、メジロのような小さな緑色の鳥が飛び回っていて、ウグイスのような黄色の鳥が歌を唄っている。麻子が振り向くと、鳥たちは一斉に麻子の元に飛んで来て、上空を乱舞した。

「よかった。麻子のことがとても心配だったが、こんな幸せな姿を見て、俺はうれしい。時々俺たちが勝手に、オーラ・ビジョン・システムで君を呼び出したりして、済まない」

「ああ、あの機械的な通信のことですね。いいえ、あれも楽しいわ。地上で生きていたときのことが走馬燈のように目の前に展開するので、まるで映画を見ているみたいですから」

賢は麻子に別れを告げて、亜希子の家に向かった。向かったとは言ってもただ意識をそこに向けただけだが、次の瞬間、賢は亜希子の家の玄関の前に居た。亜希子の家は麻子の居たところよりずっと質感のある重い雰囲気を感じる。呼び鈴を押すと亜希子が姿を顕した。

「あなた、どこかに迷ってしまわれたのではないかと心配しましたわ」
「亜希子、久しぶりだな」

亜希子は賢の胸の中に飛び込んできた。ふたりは暫くの間しっかりと抱き合っていた。

「あなた、お会いしたかったです。でも、わたくし、我慢していたのですのよ。あなたのお仕事のおじゃまになってはいけないと思いましたが、わたくしも毎日講演で忙しかったものですから」

「亜希子、ずいぶん大勢の人たちを導いているんだってな」

「ええ、先ほどの講演でおよそ127万人の方達にお話しさせて戴きました。でも、おわかりにならない方もいらっしゃいますので、大体100万人くらいの方があなたのおっしゃっているこの多次元世界の姿を認識されたようです」

「それは凄い。霊界の方は次第に認識のレベルが上がってきているんだね。だけど、霊界では意識レベルの近い人たちが集まって存在しているから、1万人ずつ集めると謂っても大変じゃないのか？」

「そうなんです。わたくし、ムクウさんの指導を受けながら講演を行っているのです。講演の前に、ある特定の意識レベルの人たちを集めるのですが、それがとても不思議で、自分がその意識レベルの人たちのレベルにならないと意思疎通ができないのです。ですから、わたくしも講演の2、3日前に先ず、その人達の生活している空間に移動して、同じ意識体験をするのです。そして、相手の考えていることが認識できるようになってから、呼び掛けを行うのです。それも不思議なのですが、音の出ない、テレパシー拡声器とでも言うのでしょうか、呼び掛けを行おうとすると、そういう装置が自動的にできて、わたしが意識で呼び掛けると、沢山の人が応答してくるのが分かるのです。1万人くらいの人に集まって欲しいと意識すると、何時も講演会の時には大体1万人近くの人が集まってきているのです。この霊界が全て自分の意識で出来上がっていることがよく分かります。ムクウさんが言うのには1日の長さも地上界の1日とは違って、自分の考える1日になっているようなのです。ですからわたくしが落命してからどのくらい経ったか分かりませ

んが、こちらの世界ではおよそ1年くらい経過しているようなのですよ」
「そうか、こちらではもうそんなに経っているのか、地球上ではまだ3ヶ月ほどしか経っていないのにな。亜希子はよく頑張っているんだな」
「わたくし、ここの方達よりずっと高い意識レベルの方々にもお話をさせて頂くこともあるのですよ。地上に居たときに大勢の皆様から尊敬され、地上では羅漢だとか、菩薩だとか謂われていた方々にお話しさせて頂いたことも何度かあります。その方々は、それはそれはお優しい方で、近付いただけでこちらにもその暖かさが感じられます。お姿を顕すときはお体の周りにオーラの輪ができていて、周囲の雰囲気がとても厳かになります。そのような方々も、この世界はご自分達の体験で、どのような構造になっているかは大体ご存じなのですが、まだ、究極のところには至上の仏様とか創造神がいらっしゃるってお考えになっておられますから、その人達の上段には、仏教系の人たちなら、上段には如来様、キリスト教の方々は上段にキリスト様がおられるのです。わたくしは世界中の様々な宗教信者の集団の中にお邪魔していますので、いろいろな神様のお姿を拝見させていただきました。その方々に、あなたのお示しになっている、自分自身の本体が自分の帰依している究極の存在なのだとご説明申し上げても、なかなかご理解いただけません。そして、この世界が自分の核を写し出した世界だという説明も、殆ど受け入れてもらえません。むしろ、もっと意識レベルの低い方々の方が早くご理解いただけます。たまに民俗宗教のシャーマンだった方の中にとっても意識レベルの高い方がいらっしゃいます。そういう方は、特定の神様は信奉しておられなくて、大自然がそのまま神様の顕現されたお姿だと認識されています。そして自分自身もその大自然の一部であり、同時に全体であると考えていらっしゃいます。そのよう方の場合にはあなたのお考えを良くご理解いただけるようで、是非あなたにお会いして、直接お話を伺いたいとおっしゃっていました」

「そうか、今日はそれほど時間がないから・・・あ、そうかこちらの時間は違うんだったな・・・だけど、自分の身体に危険が迫っているから、その方にお会いすることはできないけど、そのうちに機会が

訪れるだろう」

「わかりました。あなた、あなたのお身体は危険な状態なのですか？直ぐにお戻りにならなくても大丈夫なのですか？」

「どうやら、現象界にある肉体の内臓が極端に機能低下しているようで、今は、戻れないんだ、だけど戻ろうとする意志を切らせるわけにはいかない。それより、亜希子はもう一度蘇生することになっているけど、いつ頃になるのだろう？」

「ムクウさんは、「こちらの時間であと3年ほど講演を続ければ、霊界の人々の0.5パーセントほどが理解できるようになるだろうから、現在までに自助努力で悟っている0.5パーセントの人々と合わせて大体1パーセントになるだろう。1パーセントの魂がこの世界の姿を認識できれば次のステージに進める。すなわち新しい次元に移行する準備ができる」とおっしゃっています。そして、それが達成されたら一旦わたくしを地上界に戻すとおっしゃっています。なぜわたくしが全ての講演をこなさなくてはいけないのか理解できませんが、わたくしは、疑念を抱かずにムクウさんを信頼して、指示に従うことに決めました」

「亜希子、それは、君の意識が核に直接繋がるレベルにあるからだ。本当は君が何かを変えたいと考えると、この世界は君の考えたとおりになる筈なんだ。今度一度ムクウさんに聴いてみるといい。だが、自分の意志を入れると、君のレベルが低下する危険性があるけどね……じゃ、俺は兎に角一旦自分の身体に戻ることにするよ」

「また、お会いできる時を楽しみにして、講演を続けますわ」

ふたりは再び抱き合って別れた。

賢が肉体に意識を戻そうとすると、途中にムクウが現れた。

「少し待ちなさい。たった今俺がお前の肉体にエネルギーを注入して、内臓の機能を元に戻したばかりだ。賢、少し注意深くしていなくてはならないぞ。もう一度このような事態になると、もう俺の力では、お前を蘇生させることはできない。今回も、かなり難しかった。毒だ。お前の内臓は毒にやられていた。まだ身体から毒が抜け切れていない。だから、身体に戻ったら、自分で内臓の浄化を行いなさい。常に毒を排出する処

置を続けるのだ。そうしないと、重大な欠陥が生じてしまう。地上で云う癌とか脳性麻痺とかという奴だ。多分、目や、耳、鼻などの感覚器官もやられているだろう。これからは虚次元の身体を転用して生活しなくてはならなくなるかも知れない。心しておきなさい」

賢はムクウの話した言葉を胸に刻んで肉体に意識を集中した。

賢が意識を取り戻したのは面会所で倒れてから1日してからだった。

「おお、息を吹き返したぞ。397番！気が付いたか？わかるか？」

賢は目を開いた。明るさを感じない。周囲に何人かの人間がいるようだが、全く見えない。時々、何かが動く気配だけは捕らえることができた。

「今は、昼間ですか？全く見えません」

「やはり、そうか。ホルムアルデヒドにやられたようだな。だけど、よく助かったものだ。危なかったな」

担当医の声だ。頭がずきずきして痛い。腹部が重苦しく、締め付けられるような感覚がする。

「み、水を頂けませんか？」

賢は直ぐに水の入ったコップを渡された。手探りでそれを飲み干した。酒のような感じがする。感覚がおかしくなっていると思った。

「もう一杯ください」

また、渡された。どうやら水は既に用意されているようだ。しかし、どう見ても酒の味だ。

「こ、これは酒ではないですか？」

「そうだ。酒で戦わせるのだ」

「先生、水も下さい。水を飲みたいです」

三杯目は確かに水だった。賢はそれを飲み干して、それが本当の水である事を知り、ほっとした。腹の痛みがほんの少し楽になったような気がする。

「僕は、一体どうしたのですか？」

「尿からホルムアルデヒドと蟻酸が検出された。微量だが、どうやら長い間少しずつ蓄積して、中毒化したようだ。ホルムアルデヒドや蟻酸は

メチルアルコールが分解してできる毒素だ。お前の衣類からはナトリウムメチラートが検出された。メチルアルコールを粉末化したものだ。毒を盛られたようだな。どうだ、身体でおかしく感じることはないか？」

「はい、腹部が締め付けられるように重苦しいです。それから、目が見えません。鼻も効かないようです。耳は聞こえます。頭が重く、ずきずきします」

「水や蒸留酒を飲んで毒をできるだけ早く出してしまわなくてはまずい。尿意は無いか？」

賢は用意されている溲瓶に放尿した。医師が尿を調べるように誰かに指示している。監視官の声がした。

「397番、暫く病院に入院して治療してもらうことになる。お前の身内から釈放の依頼が出ているので、お前の身体の具合を考慮して治療期間中仮釈放することになった。その間の取り調べは延期する」

「一緒にいた杉山さんは大丈夫だったのでしょうか？」

「455番のことだな。彼は保釈金によって保釈された。お前が倒れる2時間前だ。455番が毒を盛った可能性があるので、調査したが、彼の寝具に付着したふけや髪の毛などから毒物は一切検出できなかった」
賢が面会所に出掛けるとき、杉山の姿は無かった。監視が杉山を連れて出て行った後だった。賢は特に注意もしなかったが、杉山はそのまま保釈されていたのだった。

賢は中郷町の試行サイト内の病院を希望したが、それは認められなかった。諏訪にある県警の付属病院に入院することになった。入院すると直ぐに弁護士が訪れた。

「内観さん、これはやはり罠です。あなたを狙っている者がいるとしか考えられません。留置所での出来事を逐一教えてください。その中に今回の冤罪を証明できる事実があるかも知れません。もしかしたら、あなたを狙っている者の正体を暴く手掛かりになるものもあるかも知れません」

賢は自称義賊のナメクジ俊太、杉山のことを説明した。そして、月曜から金曜まで毎日康子が面会に訪れてくれて、その時弁当や衣類を差し入

れてくれたことも説明した。

「杉山という男の過去について調べてみます。雪坂さんの差し入れは、どうされたのですか？」

「杉山さんと半分ずつ分けて食べました」

「どういう風に半分にしたのですか？」

「杉山さんが、監視の持って来る弁当を僕の方まで受け取って、康子の差し入れてくれた弁当を開け、それを二人の弁当の上に盛り付ける役を買って出てくれました。ぼくは杉山さんから受け取った弁当を戴いただけです」

「その時、なんか変な味がしませんでしたか？」

「特に感じたことはありません」

「その弁当に何か仕掛けられていたとしか考えられませんが、杉山が一旦、2つの弁当を受け取っていて、あなただけが毒にやられたということは、杉山が毒を盛ったとしか考えられません。杉山に何か不審なところはありましたか？」

「杉山さんが入所したとき、サプリメントの瓶の様な物をいじっているのを見た事があります。僕は、どうやって持ち込んだのかなと思いましたが、健康のためのサプリだと思い、あまり気にしませんでした」

「どうやら、それですね。分かりました。杉山が入所したときの経緯や犯罪歴、個人情報などを調べてみます。それと、杉山に保釈金を積んで釈放させた人間を探してみます」

弁護士が帰ると梓が言った。

「あなた、目は全く見えないのですか？」

「うん、どうやら、網膜がやられてしまったようだ。何も見えない。だけどね、梓、目が見えないのも面白いぞ。自分の観たい物を意識して、集中すると眉間にその像が浮かぶ。それ以外のものは一切見えないから、煩わしさも無いよ。だから、愛する君のことを思うと可愛い君の姿が見える。それで十分だ。だから大丈夫だ、はっはっは」

「あなた、冗談をおっしゃらないでください。わたしは真剣なんですから」

「ごめん、ごめん。だけど本当だよ。目は見えないけど、観たいものは意識で見えるんだ」

賢の両親が再びアメリカから駆けつけた。まず、母が病室に姿を顕した。母は目に涙を溜め、横になっている賢の髪をそっとなぜながら言った。

「*****」(賢、お前は辛い運命を背負ってしまったのね。私たちは、もう心配で、心配で、夜もぐっすり眠れないのよ)

「*****」「ママ、僕が至らないばかりに心配ばかり掛けてごめんなさい」

母は涙を流しながら、賢の身体を擦っていた。

数馬から既に話を聴いていた父は病院の担当医と暫くの間相談してから、担当医と一緒に賢の病室に現れた。

「賢、大変な目に遭ったな。良く助かってくれた。メチルでどれほどの人間が命を失ったか知れない。お前は天に守られているな。だが、今度こそは、本当に注意をしていなくてはだめだ。毒物は致死量を超えたら、もう、手の打ちようが無い。何とか1命を取り留めたのだから、内臓機能を復活させるために、毒の排出を続けなくてだめだぞ。さっき大泉先生と相談した。エチルアルコールとミネラル、ビタミン剤の混合液を点滴し続けることにした。量を多めにするから、何度もトイレに行くことだ。それと、これは最近アメリカで研究されているホルムアルデヒドの分解をする薬品だ、アル中の患者の体内に蓄積したホルムアルデヒドを除去する力を持っている、少し幻覚が起きるという副作用があるから、緊急の時以外は処方できないが、これを大泉先生に預けておくので、いざというときは処方してもらいなさい。まだ厚生省の認可が下りていないので、危急の時にはお前の自主判断で処方をお願いしなさい。お前も大変な道を生きているな。命だけは大切にしてくれよ。私たちにはお前しかいないんだからな」

大勢の者達が見舞いに訪れたが、梓と愛子以外の者の面会は監視の立ち会いなしでは認められなかった。梓は賢の疲れを考え、見舞いに来た者達にできるだけ早く引き上げるように伝えた。梓は諏訪のホテルに宿泊

し、昼間は病院に出向いて看病し、夕方、ホテルに引き返した。翌日康子が訪れた。康子は梓に遠慮しながら、病室に入った。賢は眠りに着いていた。両手で口を塞いで嗚咽を堪えている。目からは涙が止めどなく流れている。梓が言った。

「雪坂さん、ありがとう、この人はあなたの差し入れてくださったお弁当をととても喜んでいたわ」

「わ、わたしの・・・何か、悪いものがあったのでしょうか？」

「いいえ、悪い奴が毒を入れたようなの。この人は初対面の人を誰でも信用してしまうから・・・」

「部長、内観部長はどんな症状なののでしょうか？」

「身体の中に毒が蔓延して、目が見えなくなってしまったのよ」

康子は再び口を両手で押さえて、鳴き声を出さないように必死に堪えたが、とうとう堪えきれずに声を出して泣き出してしまった。賢が目を感じました。賢は康子の気配を感じ、康子を透視した。目から一杯涙を流し、むせび泣いている。

「康子、来てくれたのか。もう大丈夫だから、心配しなくてもいいよ。大丈夫だから」

「わたしがいけなかったのです。余計なことをしたばかりに、内観部長をこんな目に遭わせてしまって。あなたに迷惑ばかり掛けて、わたしなんて、死んでしまった方がいいのです・・・う、う、うっうっ」

「康子、君の所為じゃないんだよ。君には感謝しているよ。だから死ぬなんて言ったらだめだよ。君は僕にとってかけがえのない大切な人なんだから」

「雪坂さん、冷たいようで済まないけれど、この人は今、大事なときだから、できるだけ短い時間にしてね」

雪坂は泣きながら、直ぐに退室した。しかし、暫くの間、部屋の外に佇んで泣いていた。弁護士が泣いている康子の姿を横目で見ながら不安そうに部屋に入って来た。

「何かあったのですか？」

「いいえ、雪坂さんはお見舞いに来てくれただけです」

梓がさらっと言った。

「そうですか。実は杉山のことが分かりました。杉山は義賊なんかじゃありませんよ。ただの窃盗犯ですよ。これまでに5、6回捕まっているんです。盗んだ金は殆どギャンブルに使っていたようです。借金が1000万円ほどあったようですが、最近それを返済したところを見ると、大金を掴んだ可能性があります。今回の逮捕はスーパーでの万引きが原因で、誰が見ても直ぐにそれと分かる手口でした。しかも店員が警察に通報してからも、辺りをうろうろしていて、簡単に捕まったらしいです。妙なんです、その日の同じ頃、杉山の他に二人、同じような窃盗犯が逮捕されているんです。しかし、杉山以外の二人はいずれも保釈金が支払われて直ぐに釈放されています。その保釈金を払ったのは芹沢というチンピラで、ふたりの仲間だったようです。杉山の保釈金を支払った人間ですが、杉山のギャンブル仲間の木崎という男で、杉山はその男から借金をしていたようです。保釈金は120万円でしたが、全額木崎が支払ったようです。木崎という男のことは今のところ、それ以上は分かりません。それから、杉山が留置されたとき、直ぐに木崎が差し入れをしています。差し入れられたものは下着類と杉山の好きなメロンパン2個、石けん、タオルなどです。どうやら、あのメロンパンの中にサプリの瓶を隠してあったんじゃないかと思います。木崎の行方と釈放された後の杉山の足取りはどうしても掴めませんでした。もう少し追跡してみますけど……」

弁護士は背後に賢を陥れようとしている組織がありそうだと聞いた。

ムクウのエネルギー注入と、自分の内臓の浄化、医師による点滴が功を奏したのか、賢の身体は次第に回復していった。腎臓の透析もせずに済んだ。しかし、失われてしまった視力だけは元に戻らなかった。

3日間付き添っていた両親も賢の回復を確かめてから帰国した。

梓は臨月に入り、札幌の由仁に戻った。出産予定日が近くなったら産院に入院することになっていた。賢は3日後に再び留置されることになった。しかし、今度は保護観察が附いた個室が充てがわれた。弁護士の話では、インドの司法局からの取り調べ要請があるため、警察としてもどうして

も留置せざるを得ないのだろうとのことだった。留置所に戻って直ぐに祐子から通信があった。

「あなた、いよいよ軍の上層部に時限爆弾攻撃を仕掛けるわ。攻撃とは謂っても、唯の威嚇だけよ。これはそれほど精度が必要ないからわたしひとりでも物質転送機の操作でやれるわ。本当はあなたにも来て欲しいんだけど、あなたも忙しいでしょうから、今回は結果だけ連絡するわ」

「祐子、爆弾を置いてある場所の位置情報と、時間管理を間違えるなよ。途中で爆発したり、不発に終わったりしては元も子もないからな」

「ええ、その点が一番心配なの。でもウグングが全ての指示を出すことになっているから大丈夫だと思うわ」

賢は自分もキガリにテレポーテーションしたかったが、現在の自己の内部エネルギーで次元の切り替え時に最後まで持ち堪えられるかどうか自信がなかったの、祐子の提案通り、留置所の中で経過を透視するだけに留めた。

賢の健康状態は日に日に回復していった。1ヶ月後には尿からホルムアルデヒドと蟻酸が検出されなくなった。そんな中、梓が札幌レディース・クリニックで女兒を出産した。賢は弁護士に同行してもらって面会に来た数馬からその報告を受けた。数馬は賢を祝福した。賢は梓を労う為に直ぐにクリニックにテレポーテーションした。目は見えなくてもテレポーテーションに不自由は感じなかった。賢は梓のベッドサイドに顕現した。幸い誰も居なかった。

「梓、よく頑張ったな」

賢はそう言いながら、梓の頬に手を当てた。梓の涙が賢の指を濡らした。

「あなた、来てくださったのね。うれしいわ・・・わたし頑張りました。赤ちゃん、とても元気です。お顔に触れてみてください」

梓は賢の右手を取ると、指をガーゼのハンカチで軽く拭い、添え寝させている赤児の頬にそっと導いた。真綿のような柔らかい肌の感触が、感動を伴って賢の指に伝わってきた。母の胎内から生まれ出る、純粹無垢な命。この不思議は人間の思考では到底理解できない。意識の目を見開いて透視すると、赤児は目を瞑り、ガーゼの産着から出した両手を握る

ように丸め、穏やかな寝息を立てている。

「あなた、抱いてあげて」

賢は梓に促されて、意識の目を一層大きく見開き、細心の注意を払いながら、赤児を抱き上げた。賢が赤児の頭に左手を当てるのを見て安心しながらも、梓は半身になって賢の左手を下から支えるようにした。

「あなた、赤ちゃんの頭をしっかりと支えていてね」

「うん、梓、そのまま手を添えていてくれ」

赤児のぬくもりが賢の両掌に伝わってくる。賢は赤児を軽く抱き寄せた。

「梓、リタという名前はどうか？」

「あなた、不思議ね、わたしもそう思っていたの。どうしてかしら」

「リタ、リタ、・・・うん、良い響きだ」

インターネットに大統領への訴えを綴った文章と、OVSから録画された大統領の父親からのメッセージの動画、将軍によって処刑されたブリ・ゴスマン隊長のメッセージの動画が掲載されてから1週間後、軍の評議員会の会長であるガザヌ・ンバリムニ中将の元に手紙が届いた。大統領宛に不審な書簡が届いていたことは隠されていて、大統領補佐官からは、高官や軍の関係者などには一切知らされていなかった。またンバリムニやその取り巻き達はインターネットの情報に疎かったため、ンバリムニはグリフジブ少尉から書簡が届いているとの報告を受けると、業務上の書簡と勘違いし、それを開封して読むように命じた。グリフジブ少尉は姿勢を正して封書を開封し、読み始めた。

「*****」

(ンバリムニ中将殿

中将殿のこれまで行ってきた、反政府軍に対する武力弾圧は、とても国民のことを考えた処置であったとは思えません。いいえ、あなた自身は国民に対する優しい慈悲の心をお持ちかも知れませんが、あなたの部下が行っている非人間的な行為は、国民を奈落の底に叩き落とす行為です。精力を持って余して暴徒と化したまだ未成熟なあなたの部下達は、一般の家庭に押し入り、家財を強奪し、婦女を辱め、酷いときは住民を惨

殺するようなおぞましい行為を行っています。こうした非人道的な行いによって、国民は日々恐怖に怯え、生きる希望も失っています。中将閣下、直ちに民間の自主組織への攻撃を中止させてください。そして、軍の力を難民の救済活動や、インフラの整備に充て、国民を救済してください。然もなくば、あなたの率いる軍は「天の戒め」により爆弾の総攻撃を受け、多くの犠牲者を出すこととなります。その結果、軍解体の憂き目を見ることになることは必定です。

コンゴ難民救済同盟)

ンバリムニは怒りに燃え、目つきが鋭くなった。

「グリフジブ少尉！これは一体何だ、今の話しは事実なのか？」

「中将閣下、事実のはずがありません。この書簡は、明らかに反政府勢力による攪乱作戦です。我が国軍は毅然とした態度で、これらの挑発的行為を止めさせる必要があると思います。閣下、封書の中にCDが入っていますが、どうしたら良いでしょうか？」

「かけてみる」

グリフジブ少尉は隣の部屋に行ってカセットデッキを持参した。DVDをかけようとしたが、メディアは自動的にリジェクトされ再生されなかった。

「馬鹿者、このラジカセはCDもまともにかからないじゃないか、装備を見直せ」

「はっ！」

「少尉、後で内容を調べて報告しろ。良いな、こういう文書が送られて来るといことは、反乱分子が不穏な動きをしていることを意味している。直ちに各分団に、反政府組織のアジトを見つけ出し、少しでも疑いのある組織には総攻撃を掛け、首謀者を捉えるように指示を出せ」

「はっ！」

翌日、軍は書簡の要求とは逆の動きに出た。キンサシャ、キサングニ、カナンガ、ルブンバシなどの主要都市近郊で軍の活動が活発になった。国軍は少しでも不穏な動きを感じると直ちに出兵し、総攻撃を仕掛け始めた。そのことを知ったウグングは祐子に連絡し、早急に爆弾作戦を展

開することになった。

ンバリムニ中將は部下に命じて不穩分子から書簡が届いたことを全軍の上官に伝達し、もしそのような書簡を受け取っても、挑発に乗らないように指示した。その命令を受けた軍の將校達の神経は針のように尖ってきた。中將からの命令は、それが反政府軍による挑発によるものだとの尾ひれを付けて各分団に伝えられた。各小隊はこれまでは無視してきた反勢力組織間の小競り合いのような些細なトラブルに対しても、直ぐに出動し、制圧しようとした。軍の姿勢は益々攻撃的になった。ウグングの指示で手紙が届いてから5日目に、事前に用意されていた時限爆弾が將校達の家々に転送され、全ての將校達の自宅の庭で爆弾が爆発した。明らかに不在になっている地方の詰め所でも小規模な爆弾が破裂した。一連の爆発の犯行声明がインターネット上に掲載された。声明には難民の救済、国際援助資金の横領と腐敗した政治の改革、軍の自国民攻撃への批判が連綿と述べられていた。それから1週間して、明らかに私腹を肥やしていると思われる大臣や高官達のオフィスにも同様の書簡が届けられた。謎の書簡の噂は瞬く間にコンゴ全土に広がった。書簡を受け取った者は恐怖に慄きはじめるようになっていた。そして、一層態度を硬直させた大臣や高官達の自宅の庭先でも、必ず爆弾が爆発した。特に贅を極めていと揶揄されていた高官の自宅の屋根も爆弾によって吹き飛んだ。彼らはどこから攻撃を受けたのか皆目見当がつかなかった。どこからともなく爆弾が出現し、突然爆発するのだった。「天からの戒め」という言葉が彼らの脳裏を駆け巡っていた。書簡と爆弾による攻撃、その後のインターネットの声明は暫くの間続いた。この問題は国際的なメディアにキャッチされ、ワールド・ニュースとして世界中に報道された。アフリカ中部諸国の国連代表団は、ニューヨークの国連本部にこの問題を提起した。アフリカだけでなく現在国内情勢の安定していない国々の代表も危機感を募らせ、アフリカ諸国政府の訴えに同調したため、この問題は総会で審議されることになった。北部アフリカ諸国に端を発した国民の反乱による独裁政権打倒の動きに恐れ慄いてきたアフリカ各国の共和制政府の代表は真剣な面持ちで自分達の置かれている危う

い立場を守ろうとした。その結果、今まで拒否を続けてきた国連軍の介入による仲裁を希望するまでになっていった。その訴えを聞いた時にヘデン事務総長は内心ほくそ笑んでいた。爆弾作戦の経過は祐子から逐次賢に連絡された。賢は祐子の計画した大胆な戦略が着実に功を奏していることに驚きを禁じ得なかった。

諏訪の試行サイトには多くのメディアが入り込み、その経過がニュースにも取り上げられ、時にはドキュメンタリー番組として放映された。国民の関心も次第に高まってゆき、多くの賛同者が、諏訪中郷地区での試行に参加したいと申し入れてきたが、その一方でそれまで試行サイトをテーマパーク程度としてしか見なさず、無視し続けてきた評論家達が未来の経済システムという見地から批評をするようになってきた。様々な否定的意見が新聞やインターネット上で展開された。論点はその資金調達と経済の発展性にあった。「現時点ではマトラー・システムと内観システムズの出資によって運用されているのでなんとかうまくいっているが、将来にわたって地域内の産業だけで地域住民の生活全体を支えることは非常に難しいだろう」というのが評論家達の意見だった。彼らの主張は「人間は本来、何でも只でもらえると分かれば、何もせずに楽をしようとする傾向がある」という思い込みからきていることは明らかだった。収入の無い労働というものはあり得ないのであって、「働かざる者、食うべからず」的な思想が心の奥に根を張っていた。「最近盛んになってきているボランティアの考え方も、自分の資産に余裕があるからできるのであって、将来の収入が保証されていない社会では、奉仕的な労働はあり得ない」とまで主張した。しかし、その批判も思考サイトの順調な展開によって、自ずと力を失っていった。賢は時としてバイロケーション、時としてテレポーテーションを使って試行サイトに顕れると、梓の差し入れてくれたサングラスを掛け、耳まですっぽり覆う毛糸の帽子を被り、黒い手袋をして、諏訪の調整事務所の主催する会議に出席していた。賢は常に傍観者を装った。誰も賢の存在には気付かなかった。ことあるごとに街の小売店や病院、学校を見学して歩いた。賢は肉体の

目は使えなかったが、意識の目を全開して行動した。テスト運用で問題になっていた、住民の労働意欲は自己の資産拡大という意識から、地域全体の運用資金の補填という意識に移っていった。この地域に多い蕎麦屋などの接客業は、如何に顧客を喜ばせるかという一念に動機が絞られて、人の喜ぶ姿を見ると、これまでの経済システム下で感じた「収入を得る喜び」より、「顧客に喜んでもらえるという純粋な感動」を覚えるようになったし、医師や看護師などは、経済的な観点を度外視して業務ができたので、患者に寄り添う診療・看護ができた。多くの人が、初めのうちは無償で働くことに対し、与えるだけの奉仕という感覚を覚えていたが、時間が経過するにつれ、実は与えることによって自分がそれ以上のものを得ていることに気付きはじめていた。それでも、今まで経験したことの無い様々なトラブルがあったが、調整事務所の従業員の努力によって、どんな問題も時を経ずに解決することができた。最も喜ばしいことは、交通事故など不可抗力による加害以外の犯罪が全く発生しないことだった。マトラー・システムと内観システムズの月次の出資額も次第に減少傾向を示してきた。

内観システムズの収支は一時の巨額出資の損失を補填できるだけの売り上げの増加による利益増があり、3月の決算でも黒字を計上することができた。賢が祐子に約束した50億円の支援も寄付金としての計上を済ませていた。

原は賢の指示を受け、ウルトラ・スペース・ソニック社から衛星ラジオの初ロット5000台を受け取った。ラジオは衝撃吸収のため、1台ずつ厳重な包装が為されている。原は物質転送機を用いて祐子と通信し、5000台のラジオを数回に分けて祐子の事務所に転送した。祐子はウグングから前回仲間のアジトに送った試作ラジオ100台のテストが成功したことを知らされていたので、次の5000台を一般国民宛に配布することに対しても自信を持っていた。ウグングの話では、既に一般国民宛のメッセージや番組も用意できていて、現在は各アジト向けに、朝から晩まで、国民の最も好む音楽に乗せて、国民の意識を高揚させるメッセージを流し続けているとのことだった。アジトの中ではそのラジ

オ放送を楽しみにして過ごす者達が多くなってきていた。5000台のラジオがキガリに届いていることを聴くとウグングは手を叩いて喜び、心が勇んでくるのを覚えた。最初の5000台は先ずブカヴの周辺に散撒くことになった。祐子はできれば最初にルブンバシに撒きたかった。ルブンバシは大統領の出身地である。この地に改革のうねりを起こすのが効果的だと考えた。それに大統領が同調すれば、改革は直ぐに軌道に乗るはずだと祐子は考えた。しかし、ルブンバシまでは距離がありすぎた。キガリから1000キロメートルはある。ウグングも先ず東部からはじめることに積極的だった。ふたりは相談した結果、手始めに紛争の絶えない地域の住民に希望を抱かせることが重要だと判断したのだった。ヘリコプターはボディに印刷されている社名をビニールテープを貼って隠し、キガリから飛び立つことにした。祐子はジミーとメドリスナをラジオの投下役としてヘリに乗せることにした。ヘリポートのレストランで昼食を済ませ、3人はヘリに乗り込んだ。男性二人は投下のため前席に乗り、祐子は後部座席に乗った。5000台のラジオはかなりかさばった。ヘリが飛び立つと、ジミーとメドリスナは下界の景色に夢中になった。

「*****」(ママ、この土地はこんなに美しいんですね。あんな殺戮が起きたなんてとても考えられません)

ジミーが感動して言った。

「*****」(ジミー、そう思うでしょう。この地は世界中で最も自然に恵まれた、美しい土地の一つなのよ。それなのに一部の人達の過った生き方が、この土地を不毛の砂漠にしているのよ。早くここに住む全ての人たちに暖かい家庭を取り戻してあげなければなりません)

メドリスナはふたりの会話が聞こえないのか、必死に下の景色を覗き見ている。上空から見たキガリの丘は、その高低差があまり見えないが緑豊かな土地だった。飛び立って直ぐにキミサガラの丘を越えた。北部に二つの丘の間を走る川が見える。その川は州境を、南北に蛇のように曲がりくねって流れる大きなニャバロンゴ川に注いでいる。ニャバロンゴ川を下に見てから暫くは山岳地帯の上空を西に向けて飛んだ。1時間ほ

どすると湖の畔に出た。キヴ湖だ。キヴエが見えた。祐子はここに居る2人の女性達のことを思い出した。マリゼとピピの手の感触が蘇ってくる。悲しい思い出が祐子の心を振るわせた。ジミーとメドリスナは身動きせずじっと下界の景色を眺めている。ヘリはキヴ湖の畔に沿って南に下った。眼下に遠征に出たとき通った道が見える。祐子は、無邪気に喜ぶ亜希子の姿が臉に浮かんだ。上空から見るキヴ湖の湖岸は切り込んでいて、絶景だった。キヴエから1時間ほど飛ぶとヘリは湖の南端部に差し掛かった。ひときわ美しい湖岸が眼下に広がる。パイロットは湖岸から湖の上空に向けて航路を取った。国境を避けるようだ。少ししてヘリはルワンダの湖岸の突端とキヴ湖の中央にあるコンゴのイジュヴィ島の間を掠め、キヴ湖の東湖岸の半島の上空に至った。もうコンゴの国内である。この辺りは反政府軍や他国籍の戦線が潜んでいると謂われる地域だ。全員緊張した。しかし辺りは木々に覆われ、あまり人の住んでいるような気配は感じられない。キヴ湖の東岸を南下すると、住宅の密集した地域に出た。

「ブカヴだ」

メドリスナが言った。ヘリはブカヴの市内に進入した。祐子はパイロットに低空飛行をするように告げた。ヘリが高度を下げると、ジミーとメドリスナがハッチを開け、民家に向けてラジオの投下をはじめた。ヘリが低空飛行している間、ジミーとメドリスナはできるだけ1カ所に固まらないように注意しながらラジオの投下を続けた。およそ30分間で5000個のラジオ全てを、街の中と周辺の郊外にばらまいてしまった。地上からの反応は全くない。全員胸を撫で下ろして帰途に就いた。

ラジオの投下を終えて3日後、ウグングからブカヴ市民の反応について連絡が入った。ラジオを見付けたのはいろいろな人たちだとウグングは言ってきた。

「*****」

(ママユウコ殿

ブカヴは面白いことになっています。わたしも自分で見たわけではないのですが、住宅地区の中に落ちたラジオを拾った者は、最初は警戒心が

働いてなかなか包みを開かなかったようですが、勇気のあるものが最初に開くと、それがラジオである事が直ぐに分かり、しかもスイッチを入れると、自分達の好きな音楽が流れ、時々自分達にも分かる言語で「この国が平和な国になるように、今、沢山の勇士が努力を重ねている。希望を持って」というメッセージが流れるので、誰もがラジオを欲しがり、近くの森の中に探しに行く者まで現れたようです。役人達もラジオを拾ったようです。でも、それをたたき壊すようなことはなく、ただ音楽放送を聴いているようです。多分政府軍や反政府軍の兵士達も拾っていると思います。そのうち政府高官や軍の上層部にまで噂が届くでしょう。彼らは、謎の封書やDVD、時限爆弾の爆発などで、神経をぴりぴりさせていますから、反応が見物です。また、暫くしてから国民や政府の反応などをお知らせします。その反応の程度によっては、これからのラジオの投下方法を考えなければならないと思います。とりあえずブカヴへの衛星ラジオ投下の反応をお伝えしました。Mr. ウチミによろしくお伝えください。

ウグング)

祐子はまた一步前進したと思った。